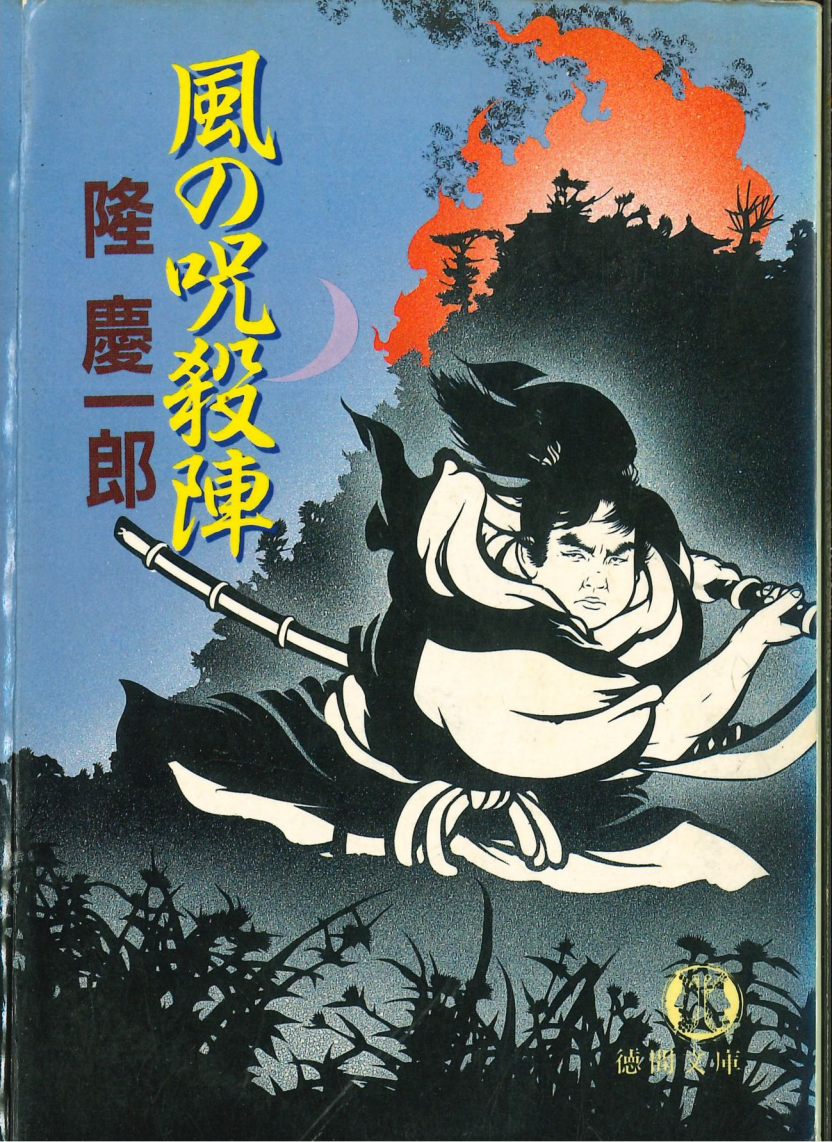
風の呪殺陣

隆慶一郎



徳間文庫

徳間文庫

隆　慶一郎　作品

風　の　呪　殺　陣

カバーイラスト＝百鬼丸
カバーデザイン＝池田雄一
カバー印刷＝近代美術㈱

り
3-1
460

風の呪殺陣

隆慶一郎

徳間文庫

9784195994528

ISBN4-19-599452-7

C0193 P460E (0)

1910193004602

定価460円(本体447円)

天下布武をとなえる織田信長は元亀二(1571)年、ついに比叡山に攻め込んだ。僧俗三千とも四千ともいわれる酸鼻を極めた大殺戮であった。大阿闍梨・詮舜を師とあおぐ修行僧・昇運は、阿闍梨への道をたたれ、立山にこもって大魔王信長を呪い殺さんと呪殺行に入る。一方、この戦乱で両親と妹を失った山門公人衆・谷ノ坊知一郎は、伊勢一向一揆に身を投じ、信長殺害に青春のすべてを賭けた！　傑作時代長篇。

徳間文庫

風の呪殺陣

隆　慶一郎

徳間文庫

風の呪殺陣

隆慶一郎

徳間書店

風の呪殺陣

隆慶一郎

徳間文庫

徳間文庫

風の呪殺陣

隆慶一郎

徳間書店

目次

北嶺回峯行（ほくれいかいほうぎょう） 5
風流踊り（ふりゅうおどり） 24
一揆衆 31
叡山焼亡 36
観音寺 73
髑髏の舌（しゃれこうべ） 83
処刑 91
ウルガン伴天連（ばてれん） 103
傀儡子女（くぐつめ） 116
地獄谷 125
川内（かわうち） 131
鬼嘯（きしょう） 136

小猿 149
輪中 156
上京焼討ち 160
左顧右嘯 174
川内根切り 182
叡山再見 198
本願寺焼亡 207
御馬揃え 220
譲位 229
本能寺炎上 239
解説 縄田一男 247

北嶺回峯行

寅の一点（午前四時）はとうに過ぎた筈なのに、岩だらけの山道はまだ漆黒の闇の中にある。深い杉木立をすかして見ても、黎明のきざしも見えない。手にさげた提灯の黄色い明りがなかったら、魑魅魍魎がとびかいそうな重い暗闇だが、十八歳の昇運は恐ろしいとも思わなかった。この比叡山の三つの峰は、三部諸尊をかたどった聖なる山である。一木一草にも仏が宿るという聖地に、魑魅魍魎が跳梁するわけがなかった。

それにしても、ひどい荒れようである。根本中堂の『消えずの法燈』だけは、さすがに暗い堂内に二つ三つ燈されてはいたが、その他の堂塔・坊舎ことごとく荒れ果てて、住む人の影さえない。比叡山には始祖最澄の定めた『籠山十二年』、つまりは十二年間一歩も山を降りるこ

となく、修学に励むべしという掟があるにも拘らず、元亀二年（一五七一）七月のこの当時、大部分の僧衆は山麓の坂本の里坊に住み、乱行不法の限りをつくしていたのである。この前年、永禄十三年三月、叡山に登った南都の多聞院英俊は、この様を見て、

「一山相果てる式なり」

と嘆き、その日記に録している。現在『籠山十二年』の掟を堅く守り、『論湿寒貧』の生活を山上に送っているのは、ほんの一握りの清僧たちと、更に少数の回峯修験道の行者たちだけといっても過言ではない。『論湿寒貧』とは、湿気がひどくて寒冷な山坊に籠り、清貧に甘んじて、法華経の論議に精をいだすべし、という意である。

昇運は回峯修験道の新行である。この六月二日に、行を始めたばかりで、歩きだしてまだ五十三日目だった。新行の満行は百日。その百日間、何があろうと、一日も欠かさず、この三峰の山上山下、堂塔・霊石・名水・神祠、二百数十カ所を巡って礼拝しなければならない。行程およそ七里半（三十キロ）。丑の上刻（午前二時）に無動寺を出て、朝までに帰りつく。帰って休めるわけではなく、平常の勤行と雑用が待っている。十八歳の若者にとって決して楽な行ではなかった。この百日の行が満ちた時、師の僧や更に先輩格の阿闍梨たちが集まって、その新行にそれ以上の行をさせるべきかどうかを論ずることになる。それ以上の行とは、更に九百日の回峯を重ね、その間に、九日間の断食断水不眠不臥の『堂入り』や、京大回り（日に

二十一里、八十四キロを歩く）や、八千枚の大護摩供の入る、いわゆる千日回峯行のことである。阿闍梨とはこの千日回峯行を満行した僧侶に贈られる名称だった。これは正に生命懸けの行であり、それだけに適性を持つか否かが、厳密に審査されるわけだ。その審査をくぐり抜けなければ、千日回峯行者になることは出来ない。勝手にやれる行ではないのである。だからこそこの最初の百日回峯が、非常な重要性を持ってくるわけだった。

〈あと四十七日か〉

昇運はなにげなくそう思ったが、次の瞬間、慌てて首をふった。師の阿闍梨詮舜にかたく禁じられている思考だったからである。

「あと何日と決して思うな。思った時、お前の行は挫折する」

わけも何もない。断定だった。昇運は師の言葉を堅く守って来たのだが、今、ふっとその禁を破ったのは、ようやく半ばを過ぎたという安堵感のためかもしれない。師がいましめたのは正しくその安堵感だったのだが、この時の昇運はまだ気づいていない。

だが……。

昇運はふっと足をとめた。

山に慣れた昇運の五官が、異変をとらえている。何か、ありうべからざることが起っている。いや、起りつつある。

音だった。低い、低い音。
ごぼ、ごぼ、ごぼ。
水が穴に吸いこまれてゆくような、それともあれは老人の咽喉にからまる痰の音か。
ひゅるるるる。
風が泣いた。
昇運は動かない。全身を耳と化して立っている。
ここはどこだ？
大分前に通り過ぎたのは、横川の定心房だった筈だ。とするとここは……
ぎやあ。
鋭い声があがり、昇運をほとんど跳び上がらせた。
華芳ヶ峯だ！　ここは華芳ヶ峯だ！
かち、かち、かち、かち。
かた、かた、かた、かた。
石塊がぶつかり合う音だった。
もう間違いようがなかった。
〈みみょう（御廟）だ！〉

昇運は半ば声に出して、そう思った。同時に走りだしている。深い林の中に、遮二無二つき進んでゆく。
その場所に出た。
八角形の異様な石の卒塔婆が立っている。正八角ではない。四角柱の四隅に広い面取りを施した八面体といった方がいい。上にゆくにつれて細まり、頂上には饅頭形の石が笠のように乗せられている。材質は花崗岩だが風化がひどい。
その石の卒塔婆が大きく揺れていた。
かた、かた、かた、かた。
音をたてながら、今にも倒れんばかりに揺れている。見ようによっては、悲しみに耐えられず、身を揉んでいるかのようだった。胸が締めつけられるような切なさがあった。
かち、かち、かち。
鳴っているのは饅頭形の笠だ。石塔がかしぐにつれて落ちそうになっては、また元にかえる。そこにもまた、剽げた哀しさがある。
昇運は心の底から怯え、身動きも出来ずにいた。
これは『みみょう（御廟）』である。第十八代天台座主慈恵大師良源の廟所である。比叡山中興の祖といわれ、その厳しさで三千の僧を畏怖せしめたという一代の学僧良源の墓所だっ

た。この石造りの卒塔婆は墓標だった。古来一山に事ある時は、必ずこの墓標が鳴動すると伝えられ、『叡山三魔所』の筆頭に数えられている場所である。

〈お山に何かが起ろうとしている！〉

昇運の歯ががちがちと鳴った。

〈みみょうの大師は、我に何を告げんとしているのか〉

卒塔婆は応えず、ひたすら揺れ続けた。

「オンコンギャラセンダムハッタ

オンアラシャリソワカ

オンニサンババサキカ……」

昇運は自然に呪文を唱えはじめていた。手は無意識に九字の印を結びながら、あとずさりに卒塔婆から離れ、やがて一散に走りだした。

風が嘲笑うかのように、いつまでも昇運を追った。

東塔無動寺は千日回峯行の祖、相応和尚の建立になる寺で、転げ落ちそうな急坂を下った無動寺谷の底にある。回峯修験道の行者たらんとする者は、皆、この寺に集まって来る。今、この寺の輪番をつとめているのは、正教坊詮舜大阿闍梨だった。詮舜、この時三十一歳。斧で削ったような鋭い風貌と、優しい眼の持主である。昇運の師だった。ほかには十五歳の小僧好運と飯炊きの源さんがいるだけである。源さんは年齢不詳の男である。きいても、

「忘れてしもた」

にこにこと笑っている。六十歳より下でないことは確実だった。どこで生れ、その齢まで何をして来たのか、誰も知らない。僧でもないのに、どうして無動寺に住みつくようになったのか、それさえ分ってはいない。ひょっとすると詮舜は知っているのかもしれなかったが、何も言わない。とにかく口数の少ない、というより殆ど口をきかない、呆けたような老人である。齢の割りには膂力が強く、米俵も軽々とかつげば、薪も割る。人に肌を見せることはないが、背の広いがっしりした体軀である。いつもにこにこと笑っていて、力仕事なら何でも片づけてくれる便利な男だった。おまけに飯炊きの腕が抜群だった。麦や稗をまぜても尚ふっくらと輝くような飯を炊く。暇な時は石段に腰をおろして、倦きずに琵琶湖を眺めている。どんな思いで湖を見ているのか、その茫々たる表情から読みとることは出来なかった。

その源さんが一番最初に昇運の異変に気づいたようだった。長い石段の掃除をしていたのだが、飛ぶように帰って来た昇運の姿を一目見るなり、竹箒を放り投げて走って来た。

「どうした？」

とは言わない。ただ目を丸くして昇運を見つめただけである。昇運が目もくれずに明王堂

にかけこんでゆくのを見送ると、珍しく声をあげた。
「えらいこっちゃ。こら、えらいこっちゃ」
どうしていいか分らないという顔で、境内をおろおろと歩き廻った。何事が起ろうと、源さんには、おろおろ歩き廻ることしか出来ないようだった。

「何か変ったことがあったか」
向うむきで茶を点てながら、詮舜が訊いた。昇運の気息が尋常でないのは、既に気づいているが、詮舜の声はいつもと変らない。
昇運は大きく息を吸った。
「みみょうの石塔が……」
詮舜がふりむいた。ひたと見た。恐ろしい眼だった。いつもの限りなく優しい眼差しではない。肺腑まで見透すような、鋭く険しい眼である。その眼にぶつかった途端に、昇運の声は途切れてしまった。あとがどうしても出て来ない。
詮舜が催促するように、顎をひいて、うなずいてみせた。
「みみょうの石塔が……」
もう一度いった。

「声をあげて揺れました」
いい終るとふーっと息を吐いた。
「声をあげた？」
詮舜が訊く。
「はい」
「なんと言った」
「分りません」
詮舜は無言で見つめている。
「呻くような、喚くような、怨むような……」
石塔の様子と音を、吃り吃り述べた。
「恐ろしゅうございました」
いってしまって、はっとした。殴られるかな、と思った。この師の坊は、言葉より先に拳固をとばす。恐ろしい、などと新行にあるまじき感情である。でもいわずにはいられなかった。
「そうか」
長い沈黙のあとで、詮舜はそういった。拳はとんで来なかった。かわりに驚くべきことをいった。

「わしも恐ろしい」
昇運は茫然と師を見つめた。
「好運たちにはいわない方がいいな」
詮舜はまたあの限りなく優しい眼に戻っていた。
好運は何ひとつ気づいていない。この小僧は昇運が新行になることを許されたのが、羨しくて仕方がないのである。
「わしは鈍くさい男やから……」
これが好運の口ぐせである。
「いくつになったら新行を許して貰えるか分らへん。ひょっとしたら、一生あかんかもしれん」
本当に好運は鈍くさい小僧だった。むやみに口数が多く、そのために師の坊に殴られてばかりいる。ひとつ仕事を果すと必ず詮舜のもとに行っていうのである。
「掃除は終りました。何かご用はござりまへんか」
「ない、ない」
と詮舜はいう。それが度重なると、ものもいわずただ殴った。
「なんで殴らはるのやろ？」

好運は全く分っていない。
「今度は何をしまひょ、いうとるだけやのに」
「用は自分でみつけるものだ」
昇運が仕方なく教える。
「自分でみつけて、さっさとやるんだ。ご用はありまへんか、とは何だ。鈍くさい」
だが何度教えても好運は懲りない。またぞろ、
「ご用はござりまへんか」
ときにいっては、顔を脹らし、泣きべそをかいて戻って来るのである。
「今朝はどないでした？　しんどうましたか？」
明王堂を出るとすぐ好運がよって来た。昇運は急に疲れが出て来た感じで、返事をする気にもならない。
「たいしたことおへんなあ。もう半分はすんだんやし……」
禁ぜられた言葉を平然と吐く。昇運でさえ殴りつけてやりたくなった。
まるでお百度を踏んでいるように、おろおろ歩き廻っている源さんの姿が目に入った。昇運は、それが自分のせいだとは知らない。
「源さん、めしは炊きあがったのか」

好運に訊いた。

「あっ、ほんまや。まだ炊いてへんわ。どないしたんや、もう」

すっとんで行った。源さんをつかまえて、文句をいっている。

〈妙だな〉

源さんが飯炊きを忘れるわけがなかった。唯一自慢のわざなのである。昇運はそこにも異変を察した。

〈何かが起ろうとしている〉

それはもう確信に変っている。師の坊さえ恐れさせ、源さんさえおろおろさせるような何かが、今まさに起ろうとしている。だが……分らない。

〈考えてみても分らないものは仕方がない〉

ようやく胆が据って来た。何事であろうと起ってみなければ、分りはしない。先どりして、無闇に恐れ、不安になっても、無駄なことだった。何事も起った時に対処するしかない。詮舜の態度がそれを教えている。

〈つまりこれなんだな〉

昇運は悟った。

千日回峯行は、絶えざる行によって、生き身の不動明王を顕現することが目的だという。不動明王を顕現するとは、まさしく自分の眼で生き身の不動明王を見、己れ自ら不動明王になることである。つまり詮舜は生き身の不動明王である。不動明王が恐れることがあろうか。それを師の坊は、

「わしも恐ろしい」

といわれた。生き身の不動明王が、恐ろしいといったのである。もとよりそれは、己れの一身に対する恐怖ではあるまい。己れ以外の多くの人々の運命や、お山や世の中の成りゆく果てについての恐れであろう。だがそれも、起ってみなくては分らない。対処の方法もない。そう思い定めれば、不安も動揺もない筈である。だから、師はすぐいつもの優しい眼差しに戻ったのであろう。

「ナーマク・サーマンダ・バーサラナン・センダンマーカロシャナ・ソワタヤ・ウン・タラタ・カン・マン」

昇運はいつか不動尊の真言を、口の中で唱えていた。

源さんがまだ飯炊きにゆかず、境内をおろおろと歩き廻っている。

そうだ。人間はああなるのだ。生き身の不動明王にならぬ限り、果てしなく迷うのが人間のあり方である。その意味で源さんのしていることは、正直そのものだった。なすすべもなく、ただおろおろと歩き廻ることだけが人に出来るわざなのである。不意に昇運は、源さんに限り

なく愛着を抱いている自分を知った。あれでいいのだ、と思う。みみょうの森から、跳ぶように逃げ出した自分の所作も、あのおろおろ歩きと少しも変りはしない。源さんこそ、この世の人々の代表ではないか。

「お早ようさん」

大きな荷物を背負った大柄な若者が、無動寺の境内に入って来た。これは谷ノ坊知一郎である。坂本に住む山門公人衆の一族、谷ノ坊家のあととり息子だった。当年十八歳。だが長身六尺をこえ、樽のように肥えた軀は、仔牛ほどの大きさである。力は五人力といわれ、刀槍の術でも途方もない強さを発揮するという噂だった。そのくせ、恐ろしげな軀とは対照的な、あどけない顔の持ち主だった。まるっきり子供のまんま育ってしまったとしか思えない。性格の方もその顔の通りで、素直でおよそ企みというものがない。十五歳の好運の方がよっぽど大人っぽく小ずるく邪気がある。

山門公人衆は、山徒とも呼ばれ、叡山の階級でいえば、衆徒、堂衆の次、つまり最下位に属する。家長は剃髪して、法橋とか法印という僧位は得ているが、生活の根拠を山下の坂本に置き、妻帯して俗人と変らぬ暮しをしている。叡山の庶務・会計・年貢の収納・警備がその仕事である。一口に叡山の僧三千というが、衆徒（親王・公卿など身分の高い家柄の出身）も堂

衆（庶民出身）も、一切口をのりするために働くことはない。彼等の仕事は、ひたすら学問であり行である。だからそれ以外の俗事、各地の所領から税金を集め、琵琶湖の通行料を徴収し、京都その他の夥しい末寺から冥加銭をとりたて、食糧燃料を山上に運び、一旦いくさとなれば衣の上に鎧をつけ、長巻をふるって闘う者が必要になる。その役を果すのが山門公人衆だった。いわゆる僧兵とはこの人々だった。そして坂本は比叡山の補給基地であり、堅田と共に諸国の物産を集積する港だったのである。

「ご苦労さまです」

昇運は近づきながら声をかけた。

「平気や、これくらいのこと」

知一郎は荷を降して汗を拭いた。荷は食糧と燈油だった。

「身体を拭いて、阿闍梨さまと飯をくっていったらどうですか」

昇運は源さんをじろりと見た。

「飯はもう炊けるね、源さん」

源さんが妙な顔で昇運を見ている。一目見て異変を嗅ぎとったほどの、一種の殺気が、いつの間にか昇運の軀から消えている。源さんをあれほどの不安に追いこんだものが、僅かの間にあとかたもなくとんでいってしまった。こんな馬鹿なことがあろうか。それとも自分が間違っ

たのだろうか。いや、この自分が、禍いの臭いを嗅ぎ間違える筈がない。だが……。源さんは自分が不安になった。同時に飯炊きのことを思い出す。冗談じゃない。とっくに食事の時間だ。ものもいわずに、かまどの方へ走った。

「あは。源さん、飯炊きを忘れよった」

知一郎が笑った。

「源さんもぼけて来よったなァ」

屈託のない声だった。

「源さんが好きなんだね」

昇運がきくと、知一郎はうなずいた。

「去年の暮には、随分世話になりましたわ」

去年、即ち元亀元年六月、姉川の合戦に一敗地にまみれた浅井長政・朝倉義景の連合軍は、九月、織田信長が摂津に三好三人衆を攻めている隙を窺って再び蹶起し、坂本に入った。これは三年に及ぶ近江一向一揆につき上げられ、今また三好三人衆攻撃のついでに包囲を受け、寺内破却の通告をうけた石山本願寺が、初めてその重い腰をあげ、日本全国に一揆を促す檄文を送った、その結果の一つであった。石山本願寺は、九月十二日の夜半、突然寺内の早鐘をつき鳴らして、天満の森に布陣した信長勢に銃撃の火ぶたを切っている。これに呼応する浅井・朝

倉勢の蹶起だった。彼等は醍醐・山科に放火し、京都に迫らんとする勢いを示した。

やむなく急旋回した信長は京都に帰り、この浅井・朝倉連合軍の追い落しを計ったのだが、彼等は意外にも比叡山に登り、二万といわれる兵力によって、比叡山中に陣を布いた。当初信長は事態を楽観していたらしい。日本海からの寒冷風の直撃をうける叡山では、十月といえばもう煖をとらねばならない。十一月には雪が降り、十二月となれば耳も落ちんばかりの極寒になる。その苛酷な冬に向って、二万の軍勢が山上に何カ月ももちこたえられるわけがないと読んだのである。食糧も欠乏し、煖をとる薪もあるまい。山下に厳重な包囲陣さえ組んでいれば、二万の浅井・朝倉軍は、いわゆる干殺しになる。

だが事態は、信長の予想を大きく裏切った。浅井・朝倉の軍勢は、干殺しどころか十二月になっても余裕綽々、長期戦を戦い抜く姿勢を見せたのである。これは坂本の山門公人衆の力だった。信長は補給基地坂本の底力と公人衆の働きを計算しそこなったのである。公人衆にとっては、包囲軍の目をかすめて、山上に物資を運び上げるくらいのことは、易々たる業だった。信長は屈辱をこらえて叡山に交渉を始めた。山門衆徒を集めて二つの条件を示し、その選択を迫った。その一つは信長に味方して、浅井・朝倉を山上から追い出すこと。そうしてくれれば、先に奪いとった信長の分国（美濃・尾張）中の山門領を返してやろうという。いま一つは、出家の常道として厳正中立を保つこと。この場合は浅井・朝倉を追い出すまではしなくてよいが、

食糧その他の補給に手を貸すことは一切やめよ、というのである。

山門にとってはこんな虫のいい言い分はない。美濃・尾張の山門領を力ずくで奪いとったのは信長である。山門はこれに抗議し、朝廷へも訴え、天皇から山門領返還の綸旨まで出ているのに、信長はどこ吹く風で一向に返そうとしないのである。それを返すから、というのは、盗品をもって賞金にあてるようなものではないか。第二の項目も、厳正中立という言葉はいいが、結局は浅井・朝倉勢の干殺しに手を貸し信長を援けるだけのことである。それをしも厳正中立というか。そもそも浅井・朝倉両家とも、叡山にとっては永年の大檀越である。仏法の敵ともいうべき信長と同等の立場に置いて談じられる相手ではないし、檀越を贔屓するのは仏家の常である。そういいたてて、信長の要求をぴしゃりと拒んだ。

窮した信長は、遂に最後の切札である朝廷を利用し、勅令講和という形で浅井・朝倉と和を結び、やっとこの事件に一応のけりをつけた。内容から考えて、これは信長の完敗といえる。恨み深い信長が、この敗北を忘れる筈がなかった。

知一郎が、源さんの世話になったという去年の暮とは、この事件当時をさしている。強力の源さんは、知一郎への好意から、この危険な物資補給に随分力を貸してくれたのだった。なにせ二万人である。平常の補給方法では到底間に合わぬ非常の場合だった。

「でも、あんなことは二度とごめんや」

知一郎は暗い眼になっていた。何人もの公人衆があの冬に死んだ。織田方にみつけられて斬られたのである。公人衆にとっても受難の冬だった。

風流踊り

その晩、元亀二年七月二十五日の夜、父の命令で京都まで出掛けていった谷ノ坊知一郎は、生涯忘れることの出来ぬ情景にぶつかる破目になった。

坂本を出たのが夕刻だったから、当然夜道になった。京都に着くのはどうせ夜も遅くなる。そのまま祇園社の宿坊に泊って、明け方、荷を積んだ馬を曳いて坂本へ帰ればいい。そのつもりでいたから、のんびり歩いていた。知一郎はその気になれば、一刻（二時間）で軽く八里（三十二キロ）を走る。長身なだけに歩幅が広く、その上、疲れを知らぬエネルギーの持主なのである。

夏の夜道は涼しく愉しい。京に入り、灯の消えた町並を眺めながら、いい気分であるいていると、突然、爆発するような歓声がきこえた。五十や百の声ではない。明らかに数百という単位の声である。

〈いくさだ！〉

知一郎は直観した。大人なら即座に坂本へ逃げ帰るところである。知一郎の若さ、というより稚なさが、逆に歓声の方向へまっしぐらに駆けさせることになった。

いざとなれば僧兵として戦わねばならぬ知一郎だったが、大きな図体に似ず荒事の嫌いな穏やかな性格だったのである。

それは確かに凄まじい光景だったが、いくさではなかった。数百人の集団の踊りだったのである。銘々がきらびやかな衣裳を身につけていた。記録には、

『金銀・金襴・緞子・唐織・織物・紅梅・綺羅ヲ尽ス、先代未聞也』

とある。そうした華美な衣裳をつけ、或いは奇抜な仮装（『ひとつもの』という）をした群集が、趣向をこらした細工で飾られた風流傘や風流灯籠をかこんで、鉦や太鼓のはやしと流行の歌にあわせて踊り狂っている。その踊りも、もの静かな舞とは根底的に違う、力強い躍動感に満ちあふれた踊りである。まるで全身で跳びはねているような凄まじさが感じられた。それを何百という群集が円陣をつくり、揃って踊るのだから、魂も消しとぶほどの迫力があった。当時の記録類が『踊り』と書くべきところに『躍り』とか『跳り』という字をあてているのが多いのは、この踊りの印象を明確に示している。

これは盂蘭盆会のいわゆる風流踊りである。この晩は上京の町々がこぞって灯籠をかかげ、

町ごとに装束を変えて踊りの競演をくりひろげていた。『言継卿記』によれば、この踊りに参加したのは、『一条室町（一条組）』、『西陣（川より西組）』、『立売（立売組）』、『絹屋町・小川・鐘鋳（小川組、中筋組）』の町組を単位とした、四つの集団だったという。山科言継はその目でこの踊りを見物したらしく、西陣を『第一の見事也』、絹屋町以下を『第二の見事也』、立売を『第三の見事也』と採点までしている。

見物人の数が、また大変なものだった。踊りの集団はそれぞれの町から繰り出して合流すると、次いで幕府に推参し、桜の馬場をめぐり、伏見殿の門前へ向うというように移動してゆく。沿道の公卿屋敷の前には桟敷が組まれ、誠仁親王はじめ女中衆、公家衆が見物した。築地の上も忽ち見物席に変り、立錐の余地もないほどである。将軍足利義昭でさえこの踊りの見物に出かけたという。

『町々の見物衆、十余万人あるべき由』

という記録が誇大だとしても、京都じゅうを湧き返らせた一大ページェントだったことは確かである。

知一郎が生れて初めて見る華やかさに総身の血を湧かせ、半ば夢見心地で、どこまでも踊りを追っていったのは、無理からぬ反応だった。見物しながら、知一郎もいつか踊っている。勝手に手が舞い、足が躍るのである。誰一人咎める者も、奇異に思う者もいない。事実、踊っているのは町衆ばかりではなかった。公卿もいれば、少数ながら武士もいる。特にその中で、天狗の面をつけ、華麗な衣裳に黄金づくりの見事な太刀を佩いた一人の武士らしい男の踊りが、他を圧して見事なのに知一郎は気づいた。その差す手、引く手の見事なきまり様は、男が舞の巧者であることを示していたし、瞬時も休むことのない躍動は、その底しれぬエネルギーを窺わせるものだった。

いつの間にか、知一郎は、天狗に近づき、天狗の所作を真似て踊っていた。そのため、御所の塀の続くあたりで、天狗の姿がふっとかき消えた時、まっ先に気づいたのは知一郎だった。消え方も分っていた。天狗は一瞬知一郎の蔭に入った時、塀にとびつき、これを越えたのである。無意識に知一郎も同じやり方で塀を越え、御所の中に入った。

少し先を天狗がゆく。御所内の人かと思ったが違った。天狗は明らかに御所の人々の目をさけている風だった。足早やに、ほとんど斜めに御所を横切ると、もう一度、土塀をこえた。知一郎も続いた。

大路に出た天狗は、面をはずして、手にもっていた。知一郎は顔を見たいと思ったが、如何せん真の闇である。御所の反対側が、灯籠で昼のような明るさだっただけに、余計、闇が暗かった。

不意に篝火の明りが目に入った。よく見ると、手に手に松明を持った五十人あまりの鎧武者

の集団である。近くに同数の馬がいた。

天狗が篝火に近づき、こちらを振返って何かいった。数人の鎧武者が走って来る。いずれも持槍を小脇にかかえた屈強の武士たちである。知一郎は危険を察した。素早く、もう一度、御所の塀を越えた。塀の内側を走り、篝火に明るい個所を少しすぎてから、塀の上に首をのぞかせた。

危いところだった。侍たちが篝火を踏み消しているところだった。知一郎は天狗の顔を初めて見た。繊細な感じの色白の細おもてに、鼻が高く、短い口髭をはやしている。都の公達といってもおかしくない端麗な風貌だった。背は高く、すらりと痩せ、姿勢がいい。齢頃は三十台半ばと思われた。

声がきこえた。異様なほど疳高い調子であり、傲慢そのもののものいいだった。

「確かに尾けて来ていた。背が高く肥った奴だ。だが餓鬼だ」

「見当りませぬ」

部下らしい男が、馬を曳きだしながら応えている。

「三人残ってあくまでも探し出せ。見つけ次第、斬り捨てろ」

無造作にいいすてると、鮮やかな手並で、馬上の人になった。

「行くぞ。明日じゅうに帰らぬと、また大人たちがうるさい」

「舟を使った方が……」

部下がいいかけるのを、ぴしゃりと封じた。

「駄目だ。舟は危い。岐阜まで駆け続けるぞ」

馬腹を蹴り、恐ろしい勢いで走り出した。部下たちが一斉に乗馬し、後を追う。松明の一団がみるみる都大路を遠ざかってゆく。

知一郎は息をのんで見送っていた。天狗の正体が分った。天狗は弾正ノ忠織田信長その人だった。それであの見事な踊りも説明がつく。信長は舞と小鼓の名手として聞こえている。五十人余りの鎧武者は、信長の高名な親衛隊である母衣衆に違いなかった。戦陣での指揮班であり、信長の側近中の側近だった。いずれも若く、剽悍と武勇で知られた面々ばかりの集団だという。

「織田信長が京都に来ていた！」

しびれるような思いで、知一郎は呟いた。

〈だが、なんのために？〉

知一郎にそんなことが分るわけがない。恐らく五十人の母衣衆の誰一人、理由など知ってはいまい。信長は気まぐれであり、自分の行動の理由を決して部下に明かすことはないという。部下を軽蔑し切っていたし、信じてもいなかったのである。

〈何かが起きる。何か大変なことが〉

知一郎は不吉な予感で慄えた。今までも、信長の気まぐれな所作のあとには、必ず夥しい死体が残されるといわれている。ましてあの凄まじい天狗の踊りには、見る人をおびやかす激しい殺気があった。知一郎は今になって、それを悟ったのである。

一揆衆

漆黒の街道を五十騎の鎧武者が、手に手に松明をかざして、疾風のように馬を駆ってゆく。その中心に信長がいた。まわりをぴっしりと母衣衆に囲まれているが、信長の眼中には部下などいない。自分の思った速度で、遮二無二馬をとばしてゆく。

不機嫌だった。

今まで信長は挫折しらずに生きて来た。尾張から美濃一国を切り取り、天下の諸武将に先がけて京へ入った。たいした値打ちはないが坊主あがりの義昭を将軍に仕立て、朝廷もほとんど自家薬籠中のものにしている。あとはこの両者を利用して、四方へ勢力を拡げてゆくばかりだったのに、その眼前に大きく立ちはだかったものがある。それが一向門徒衆であり、石山本願寺だった。

信長が最初にぶつかった門徒一揆は北近江のものである。近江は信長の本拠地である岐阜と京都との通行路であり、絶対に確保しておく必要のある土地だった。だが土地柄がよくない。

近江は当時、もっとも先進的意識の強い農村だったのである。中世以来京都の台所として栄え、世にきこえた江州米と琵琶湖の魚介は、京都にとって必要欠くべからざるものだった。惣といわれる自治組織も、どこよりも発達していた。その上、湖北から湖東にかけて『江北十ヶ寺』といわれる一向宗の寺が密集している地帯である。

『諸国ノ百姓、ミナ、主ヲモタジモタジトスルモノ、多クアリ……百姓ハ王孫ノユエナレバナリ。公家公卿ハ、百姓ヲバ御相伴ヲサセラルル。侍、モノノフハ、百姓ヲバサゲシムルゾ』

これは『本福寺跡書』と呼ばれる近江堅田の門徒記録の中にある言葉だが、これこそ、天下を統治しようとして新しく擡頭して来た武士階級に対する、百姓の鋭い対抗意識の現れだった。信長の近江平定は、この『主ヲモタジモタジトスル』百姓に、主を押しつけるものだったのである。百姓たちは当然蹶起した。それは門徒一揆の形をとって、湖北から湖東へ、更に甲賀へと燎原の火のように拡がっていった。

この一向一揆が、石山本願寺の命令によるものでないことは注目されていい。事態は逆だった。近江の一揆衆の激烈な抵抗が信長に一向宗の総本山石山本願寺破却を決意させ、諸事ことなかれ主義の本願寺をして信長に対して立たざるをえなくしたのである。

信長ほどの男が、一向一揆の本当の恐ろしさを知らなかった。簡単に、一宗門の抵抗にすぎない、とたかをくくっていた。だがこの時期の一向一揆は後世の百姓一揆とは根底的に違って

いる。先ず一向宗門徒を構成する人々は、百姓だけではなかった。中世以来、『無縁』（世間とのつながりを断つこと）と『上ナシ』を標榜して、漂泊の人生を送っていた『道々の輩』、即ち技術家・職人・海人などの土地なき自由民と、同じく自由を憧れる下層の武士階級まで含んでいたのである。だからこの一揆は、今風にいえば専制君主に対する自由の民の戦いだったのである。それは第二次大戦の直前に起ったスペイン戦争に似ている。ファッショであるフランコ政権に対する民衆の戦いに、全ヨーロッパからアメリカまで、自由を愛する人々が馳せ参じ、無償の戦いを闘ったことを私たちは知っている。アンドレ・マルロオが『希望』で、アーネスト・ヘミングウェイが『誰がために鐘は鳴る』の中で描いたのと、全く同じ状況が、この時機の一向一揆にはあった。人々は正しく自由のために、専制君主信長に戦いを挑んだのである。戦士たちの戦いは、上ナシの門徒共和国を成立させるためであり、個人個人の利害など考慮の外にあった。だからこそ、石山本願寺の檄文に対して、ほとんど日本全国の門徒衆が立ち上ったのである。

信長をもっとも愕然とさせたのは、安全を信じていた自分の領地、美濃と尾張にまで一揆の旗が立ったことだった。岐阜城の東では、郡上郡の門徒たちが八幡町の安養寺に籠り、西では多良谷（養老郡上石津町）の門徒衆が浄徳寺に一揆の旗を掲げている。更に尾張の葉栗郡本庄郷の専福寺は、河野惣道場といわれ、河野十八門徒と号する大門徒団を擁して抵抗の構えをと

った。いわば信長の領地は、ばらばらに分断されたのである。

それればかりではなかった。

去年十一月二十一日に、弟織田彦七信興を殺した伊勢長島の一揆衆を討滅すべく、信長は今年五月、兵を集めて尾張津島に自ら出陣した。ところがたった五日の戦いで織田軍団は崩壊し、歴戦の猛将氏家卜全は戦死し、柴田勝家まで浅手ながら手傷を負うという惨憺たる結果になった。

それはまあいい。勝敗は兵家の常である。今日負けたら、明日勝てばいいのである。信長にとって我慢ならなかったのは、部下の裏切りだった。家臣の中にまで一向宗は滲透していたのである。駒根城主高木貞久の息子兵次郎、氏家卜全の家臣柴原勘次郎など、多数の織田方の兵士が一揆方に身を投じ、主君に対して戦いを挑んだ。これは正に身内同士の戦いである。身内同士の戦いぐらい、勝っても負けても、後味の悪いものはない。信長は自分の足もとが大きく揺れだすのを身をもって感じた。強烈な危機感である。今や一揆衆との戦いは、信長のすべてを賭けた一大決戦の様相を呈して来たのである。

馬を激しく責めながら、信長はぎりぎりと奥歯を噛みしめた。

〈まるで蜥蜴のしっぽだ〉

一揆衆のことである。斬っても斬っても生えてくる蜥蜴のしっぽ。殺しても殺しても、再び

起ち上ってくる一向宗一揆衆。彼等は宗門のために死んだ者は、誰でも魂は救われて、浄土へゆけると信じているという。

〈誰でもだと?! 誰も彼もごたまぜに救われてたまるか!〉

救われるのは、選ばれた者だけである。生れつきそれだけの素質をもった一握りの人間だけである。その他の人間は、選ばれた者のために尽せ。そうすればそれだけのことはしてやる。何が極楽、何が浄土だ。極楽も浄土も、この世にしかありはしない。この世の極楽を生きたければ、儂に尽せ。儂が神だ。儂が仏だ。

信長は胸の中であらん限りの悪態を吐きつくした。仏法への怒りと憎しみが火炎のように燃え上って、胸中を焦がす。

〈今に見ておれよ〉

どす黒い憎悪の眼をあげて、信長は夜空を仰いだ。その目の先に、叡山が黒々としずまり返っていた。信長にはそれが仏法というものの象徴のように映じた。

叡山焼亡

九月十二日は、昇運にとって行をはじめてから丁度百日目、満行の日である。

いつものように丑の上刻に無動寺を出て、三峯を巡り歩いた。今は寅の下刻（午前五時）。昇運は『みみょうの森』の近くまで来ていた。昇運の胸が僅かに躍った。二カ月近く前の異変を思い出したのである。昇運はあの話を師の詮舜にしか語っていない。詮舜にとめられるまでもなく、誰に語る気にもなれなかったからだ。また語ってみても仕方がなかった。あれから二カ月たつが、お山にはなんの異変も起きてはいない。

〈話さなくてよかった〉

昇運はこの森にさしかかるたびにそう思う。さし当り好運などに話をしていたら、どんなに馬鹿にされただろうか。

「なんも起きまへんなあ」

あのいやらしい京言葉で、そんな風にいうにきまっている。

「ほんまにみみょうの石塔が泣かはったんどすか。なんぞ聞き違いとちがいますか」

そして意地悪そうな眼で、ちらりと昇運を見る。暗闇の恐ろしさから、或いは歩きながら半ば眠りこけていたから、そんな妄想めいた夢を見たのではないか。好運の眼はそう告げている筈である。

〈ほんとにあいつは意地が悪い〉

あの日、どうしたわけか源さんが茫然自失して、境内をうろうろ途方に暮れたように歩き廻って、飯を炊くことさえ忘れていた。谷ノ坊知一郎が笑って、

「源さんもぼけたかな」

といった一言を、好運は素早く小耳にはさんだのである。それからというもの、源さんの顔さえ見ればからかう。

「源さんやない、ぼけはんや」

それがまた執拗で、よく源さんが怒り出さないな、と思うほどだった。

源さんは源さんで、好運のような餓鬼にそんなことを言われて、と呆れるほど、しょんぼりしてしまう。一日中、肩を落して、溜息ばかりついている。昇運はその姿を見るのがいやで、好運に注意したが、まるっきり糠に釘だった。

〈あれじゃ本当に源さんは駄目になってしまう〉

そう思った途端に、はっとした。大事な行をしながらくだらない事を考えていたものである。礼拝も、印を結ぶのも、真言を唱するのも、すべてが百日目ともなると無意識裡になってしまう。心は自在に遊ぶのである。

〈自在に遊んで、源さんのことを考えてるんじゃ仕様がないな〉

昇運は苦笑した。回峯行は不動明王と出会うのが目的である。もとより百日の行で、生き身の不動明王に会えるわけがない、それは通常八百日目から千日目までの間といわれている。それにしても、お不動さまに会いたい、という強烈な願いを堅持していなければ、その八百日目が来てもお不動さまの顕現は難しいかもしれなかった。昇運は心をひきしめて、懸命にお不動さまを念じながら『みみょうの森』に足を踏み入れた。

「ぬッ」

足がとまった。

泣いている。

また石の卒塔婆が泣いている。

「あーッ。あーッ」

凄まじい声である。

御廟の中に走りこんだ。

「……?!」

石の卒塔婆は動いてはいなかった。ひっそりと鎮まり返っている。

だが、泣き声のような音は、依然としてきこえている。

「あーッ。あーッ」

昇運はまわりを見廻した。勿論、誰がいるわけもなかった。

「あーッ。あーッ」

かなりの冷気にも拘らず、昇運の額に汗が浮んだ。だが、心を落ち着けて、真言を唱え、九字の印を結んだ。

「ナーマク・サーマンダ・バーサラナン・センダンマーカロシャナ・ソワタヤ・ウン・タラタ・カン・マン」

だが泣き声は消えない。

「あーッ。あーッ」

それは昇運の真言と競うように、いつまでも続くのだった。

詮舜も無動寺で同じ声をきいた。

「あーッ。あーッ」

正教坊詮舜は首をかしげた。今日は昇運の目出度い満行の日である。源さんにおこわを炊いてくれるように頼んである。昇運が帰って来たら祝ってやるつもりでいたのだが……。

〈あの声はなんだ〉

廊下に出た。好運がおびえたように、廊下のはしに立って外を見ている。

「あの声はなんでっしゃろ」

詮舜を見ると慄えるような声で訊いた。

声はまだ続いている。

「あーッ。あーッ」

詮舜は草履をはいて境内に出た。

源さんが蒼白な顔で、例によっておろおろと歩き廻っている。

「源さん。おこわは炊いてくれたかね」

詮舜がきいた。源さんはぴくっとして足をとめた。

「おこわ？」

「そうさ。昇運の満願の日だといっただろう」

「そうだ。満願の……えらいこっちゃ」

源さんは落着きをとり戻したらしい。慌てて、かまどのある土間へ向って走った。

「あーッ。あーッ」

声は山下からきこえているのではないか。ふっと詮舜はそう思った。

〈今頃、昇運はどこにいるんだ〉

なによりそれが気にかかった。

昇運は坂本へ向っていた。坂本の日吉社も回峯行の巡路に入っているのである。

さっきから、あの泣き声が次第に大きくなって来ている。

〈あの声は坂本からだったのか〉

だが……もう泣き声とはいえなかった。それは何百もの人間の喚声のようだった。

〈一体、なんの声だ？〉

足を早めた。とぶような速度になっている。

その時、煙が見えた。黒い煙だった。同時に臭いが鼻に来た。

〈この煙は……！〉

その瞬間、ひらけた地点に出た。坂本の町は完全に眼下にあった。

〈……!!〉

昇運は今、自分の百日回峯行が決して満行にならないことを知った。

日吉神社が燃えていたのである。

そして……。

谷ノ坊知一郎が、昇運たち同様、あの泣き声を聞いて目覚めたのは、もう半刻（一時間）も前のことである。もっとも知一郎には初めから泣き声とはきこえなかった。咽喉も割れよと叫ぶ絶叫ときこえた。

はね起きて戸を開けた。

同時に咳きこみはじめた。

黒い煙が、どっと流れ込んで来たためである。

「火事だ！」

咳きこみながら叫んだ。

「火事だぞォ、みんな！」

その瞬間、三本の矢がたて続けに部屋の中に射込まれた。二本がからかみを引き破り、一本が柱につき立って、矢羽根を震わせている。

知一郎は呆けたようにその矢羽根を見つめた。この現象が何を意味するのか、理解出来なかった。

〈なんてことをするんだ。危いじゃないか〉

一瞬、そう思った。

〈怪我でもしたら、どうするんだ？〉

呪縛にあった感じだった。思考がそこから先に進まないのである。

〈一体どこのどいつが……〉

そこまで来て、ぎょっとなった。

〈どこのどいつが、火事の最中に、矢を射ると思う？〉

とび上った。走りよって陣太刀をつかんだ。そのまま庭にとび出そうとした時、背後から父の良勢の声がかかった。

「阿呆！　そんな格好でとび出す奴があるか！」

振り返って見て目をむいた。父は鎧をつけ長巻をかかえていた。足は厳重な草鞋ばきだった。

「父上！　その格好は……」

良勢が吼えた。

「いくさだッ！　早くいくさ支度をせんか！」

「いくさ?!」

また浅井勢と織田勢のいくさか、と思った。しかし、この火事は？　煙はどんどん濃くなっ

ている。

「公人衆が戦ってええんですか？」

今まで何度もこの近くが戦場になったことはあったが、山門公人衆は一切かかわってはいない。いつも平服で、火事の手配だけ厳重にして来たのである。

「わしら相手の焼討ちやぞッ！　戦わずにどないするッ」

良勢は地団駄踏むと、奥へ消えようとした。

「皆をお山に落す」

その背へ叫んだ。

「敵は誰ですかッ?!」

「弾正ノ忠信長！」

声だけが返って来た。

不意に、がくがくと慄えが来た。

〈信長だと?!〉

あの風流踊りの中の天狗の姿が、忽然と浮んだ。あの素早く、力強い、奔放な動き。

「天狗かァ」

知一郎は我知らず大声で喚くと、鎧櫃を蹴り倒し、鎧をひっぱりだした。

「天狗だァ！　天狗だぞォ！」

狂ったように喚いていた。

鎧をつけ、邪魔くさい兜はかぶらず鉢巻を締め、菊一文字の陣太刀を吊り、長巻をかいこんで外に出た知一郎に、いきなり、矢がとんで来た。無造作に払い落して見ると、父が母と妹をかばって、三人の敵と闘っている。かーっと頭に血がのぼった。大股にかけよるなり、長巻のひと振りで二人の敵の首をとばした。知一郎の初めての殺人だった。残る一人は良勢が袈裟がけにしとめた。

「お山に登るぞ」

良勢が咳きこみながらいった。

「でも町を守らねば……」

「坂本はもうあかん。見ろ」

良勢が指さした。

日吉の社が燃え上っている。もうどんな消火も手遅れだと思わせる、強烈な炎と黒煙だった。

見廻せば坂本じゅうの里坊、宿坊のすべてが煙を吐いている。徹底した焼討ちだった。そしてさながら焦熱地獄だった。

騎馬武者がかたまって、雨霰と矢を射かけながら走り抜けてゆく。辻々で人の群れがもみ合い闘っていた。既に路上には夥しい屍体が転っている。首のない屍体もある。女の屍体も、子供の屍体もあった。

酸っぱいものが咽喉もとにこみ上げて来た。

「祝部さま方は？」

祝部家は日吉社の神官である。当主は行丸。長子は行広を名乗る。

「分らん」

良勢が妻と娘を無動寺谷口の方へ追いやりながら喚いた。

「それより早く……」

「ちょっと見て来ます」

いうなり知一郎は走りだしている。

「無動寺へゆくぞ！　必ず参れ！」

良勢が叫んだ。

日吉大社の炎は猛烈で、熱気が立ち籠め、とても近よれるものではなかった。その境内に異様な光景を知一郎は見た。明らかに織田方の雑兵と見られる十四、五人の武

者たちが円陣をつくって大笑いしている。円陣の中になま白いたっぷり肥えた身体が四つ、僅かに見えた。更に近づいて見ると、なんと祝部行丸、行広ほか二人、計四人の神官である。四人とも素っ裸に剝かれ、四つん這いに這い廻らされている。白い尻が血だらけだった。動きをとめると、槍の先でちょいちょいと突くのである。生命にかかわる傷ではないが、かなりの出血で、四人とも参りかけている。それでも織田兵たちはなぶるのをやめようとしない。残忍な遊びだった。

小姓組か大番組らしい立派な鎧兜の騎馬武者が一騎、馬をとばして来たが、この情景を見て、身体をゆすって笑った。

「こいつはいい。何者だ？」

「この社の神主だというております。なあに、こうしてしまえば、ただの白豚で……」

雑兵たちも笑っている。

〈なんという男たちだ〉

見ていて知一郎は震えて来た。恐れではなく、怒りのためである。

「お前たち、下手だのォ。けつの穴が四つとも無事じゃないか。それ、こうやるんだ」

騎馬武者が大身の槍を凄まじい早さでくり出した。仲々の腕である。槍先は過たず、一人の神官の肛門を突いた。神官が悲鳴をふりしぼってつっ伏した。

「そうか、そんなに気持がいいか」

騎馬武者は残忍に笑って、もう一度、槍をくりだす。今度は前よりも深く肛門をえぐった。

神官の絶叫が上った。

「見ろ。たまらんというとる。ほかのもやらんか。慈悲やぞ」

哄笑した。

雑兵たちも薄笑いを浮かべ槍を構え直した。

限界だった。

知一郎はとび出すなり、馬の前脚を長巻で刈った。前のめりに崩れた馬の頭ごしに、騎馬武者が転げ落ちてくる。その身体が地につかぬ間に、知一郎の長巻は兜首を高々と跳ねあげていた。

次いで雑兵たちの中へ斬り込んだ。

「この外道！　死ね！　くそったれ！」

何を喚いているのか、自分でも分らなかった。ただ喚き、ただ長巻を振った。

知一郎の長巻は、その太刀ゆきの早さで定評がある。雑兵たちが気をとり直す間に、半数が身体のどこかを切り跳ばされて、地べたに転がっていた。残りの半数は、この返り血に染まった阿修羅のような大男を恐れ、慌てふためいて逃れた。知一郎はそれを追って、更に四人を斬

った。

「谷ノ坊さん！」

呼びかけに振り返ると、昇運である。白布で覆面のように鼻と口を蔽っていた。

「昇運さん！　どうしてこないなところへ……」

いいかけて知一郎は、昇運が回峯行中なのを思い出した。しかも確か今日は満行の日の筈である。

「昇運さん！　今日という日は……」

絶句した。

昇運の眼が異常である。暗く燃え上るような、怒りと怨みの眼だった。

「そうです！　今日という日は満行の日なんです。私は、私は……」

涙にむせんだ。

「私は祈らなきゃならない。この日吉のお社に……それにお山で、あと三カ所……でも、でも、このお社に何を祈ればいいんですか！　何を唱え、何を祈れば……」

ごう、と社が鳴った。建物が崩れはじめている。火炎が煙をつきぬけて、いっそう大きく上った。

「それでも、私は祈らねばならない！」

昇運は叫ぶと、建物に向って走った。

「危い！　崩れまっせ、昇運さん！」

知一郎の声も耳に入らないように、拝殿の前にゆくと、昇運は地べたに身を投げた。腹這いになったまま、何事かを唱え、何事かを祈念している。

火の粉が昇運の身にふりかかり、激しい火勢がみるみるその肌を焦がしていった。行者の白い衣裳が、ぶすぶすと燃えはじめる。

それでも昇運は祈念をやめない。

知一郎はたまらなくなった。こんな形で満行せざるをえない昇運の悲運を思った。いや、果たしてこれで満行になるのかどうかも分らなかった。百日の行が、まったく無意味になってしまうかもしれない。無念というも愚かであろう。

建物がきしみ、崩れはじめた。

〈昇運さんは死ぬ気なんじゃないか〉

死なせてたまるか、と思った。

息をつめてとびこむなり、昇運の両足をつかんだ。たぐりよせた。昇運は地べたに爪をたてて動くまいとする。だが五人力の知一郎にかなうわけがなかった。

ようやく拝殿の前から石段のきわまで曳きずって来た時、轟音と共に日吉の社は倒壊した。

〈天狗だ。天狗がお社を倒した〉

知一郎はそう信じた。

祝部親子の姿はなく、肛門を刺された神官だけが、そのままの姿でうち伏していた。近づいてみると既に死んでいる。槍傷のためとは思われなかった。あまりの衝撃に、心の臓がとまったに違いない。

いつか昇運が起き上っている。凄い眼だった。次から次へと崩れ、火の粉をまき散らす社を見ながら、呪文を唱え、いそがしく印を結んでいた。

無動寺谷口からの急峻の山道は、避難の人々で一杯だった。誰一人荷を背負っている者はなく、殆どが裸足だった。それは織田軍団の急襲が、いかに坂本の人々の不意をついたかという証拠だった。

誰一人、信長の意図に気づかなかった。

信長はこの八月に岐阜を発って、小谷城に浅井長政を攻め、更にこまめに湖畔の城を一つ一つ落していった。小川城の小川孫一郎をくだし、金ヶ森城を抜き、やっと昨日、休息のために三井寺へ入ったところだった。まさか黎明と共に舟を出し、一気に坂本を攻撃するとは、何人も考えも及ばなかったのである。

駿足をとばして、父母と妹の一行に追いついた知一郎は、無動寺谷への山径を辿りながら、振り返って眼下の坂本を見つめた。

燃えていた。二万戸を数える坂本の町が、そっくりそのまま巨大なかまどと化し、盛んな炎をあげていた。斬られ刺されて死んだ坂本の住民たちは、町ぐるみ荼毘に付されたようなものだった。

「千人は殺されたいうぞ」

良勢が暗澹たる声でいった。

「信長は悪鬼羅刹か！」

知一郎は応えない。まさか信長は天狗なんですとはいえなかった。盂蘭盆会の夜のことは、父にも話していないのである。

母と妹が声をあげて泣いていた。一種の安堵感がこの涙をひき出したことを、知一郎は知っている。もう安心だ、という気持が、山径を歩く誰の心にもあった。いかに信長が悪鬼羅刹とはいえ、お山にまでその魔の手をのばして来るわけがなかった。お山は王城守護の聖地である。兵を向けられる場所ではない。

人々がその考えの甘さを身に徹して知るのに、それほどの時を必要としなかった。

不意に轟音が湧いた。

これは鉄砲組の一斉射撃の音だった。

密集隊形で登っていた人々は、後尾からばたばたと斃れた。鉄砲組にとって、こんなたやすい的はなかった。一発の弾丸が、よく数人を斃すのである。

二度、三度。射撃音が響き、人々は斃れていった。天下に名だたる織田軍団の鉄砲組である。鉄砲の保有数にかけては、織田軍団は日本一だった。

「散れ！　かたまるんやない！　散るんや！」

良勢が喚き、妻と娘をつきとばした。

妹が知一郎の方へよろめいて来た。その腕をとって、知一郎は叫んだ。

「走れ！　あの角を曲れば弾丸は来いへん」

妹は知一郎にかかえられるようにして、遮二無二走った。

道の反対側を、良勢が同じように妻をかかえて走っている。

曲り角が近づいた。あと十歩。あと五歩。あと三歩。

その時、鉄砲が鳴った。

妹がつきとばされたようにつんのめり、うつ伏せに倒れた。

知一郎はその身体をひき起すなり、ひっかついで角を曲った。

再び鉄砲が轟いたが、もう弾丸はとんで来ない。

手早く傷を改めた。弾丸は左の背から入り胸に抜けていた。
母がとんで来て抱きついた。号泣して名を呼んだ。
「兄さま」
妹は訴えるようにいうと、ごろごろと咽喉を鳴らすような音をたて、それっきり静かになった。死んでいた。たった十四歳だった。
なんともやりきれなかった。
知一郎は長巻を握りしめ、とって返そうとした。
鎧の草ずりを父の手がつかんだ。
「犬死はあかん」
激しく首を振った。
「信長はお山まで焼くつもりや。わしらは戦わねばならん。生命がいくつあっても足らんわ。こんなところで死ねるか」
考えてみればその通りだった。叡山を焼くと覚悟をかためたからには、信長はありとある登り口から、一斉に兵を進め、山頂を目ざしているに相違なかった。三塔十六谷、三千と称せられる堂宇、これを悉く焼きつくすつもりなら、寄手は五千や一万の兵ではなかろう。生命を温存して、一人でも多くの兵を斬らなければならなかった。

知一郎は曲り端から首をのぞかせ、この無動寺谷口を攻め登って来る軍団を眺めた。
鮮やかな桔梗の旗が、へんぽんとひるがえっている。
「明智か」
知一郎は呟いた。明智十兵衛光秀の名は、織田軍団の中でも、最も華々しく喧伝されたものである。
〈忘れぬぞ、明智十兵衛！〉
知一郎は胸の中で呟くと、妹の死体を肩にかつぎあげ、片手で母をかかえて走りだした。良勢が必死で追って来る。息を切らしていた。怒った知一郎の足は、二人の女性を抱いても、尚、野生の獣の速さだったのである。
全山の鐘が一斉に鳴り出していた。
あと三カ所の拝礼をすませて、昇運が無動寺に戻ったのは、知一郎の到着より僅かに早かった。
昇運の顔は異常なほど蒼い。
詮舜はじろりとその顔を見たが、いつもと同じように問いかけた。
「何か変ったことはなかったかな」

勿論、詮舜は信長の坂本焼討ちを知っている。ついさっき自ら山頂まで走って、その惨状を見おろして来たばかりなのである。

昇運の声は異常なほど淡々としていた。

「日吉のお社が燃えていました。織田軍団の焼討ちだと申します」

詮舜は僅かに目を細めた。昇運の様子が、なんとなしに気に入らない。

「では祈れなかったな」

「いえ。お祈りしました。谷ノ坊の知一郎殿が見届けていて下さいました」

「ほう」

詮舜はまばたきもせずに昇運の顔を見つめている。嘘はないと読んだ。

「知一郎殿に救けられました。両足をつかんで曳きずられて……そのすぐ後でお社が焼け落ちました」

道理で昇運の法衣は焼け焦げだらけだった。顔にも両手にもかなりの火傷を負っている。

「それで尋常の祈禱が出来たのだな」

かすかに目が伏せられたような気がしたが、思いすごしだろうか。即座にきっぱりした答えが返って来た。

「はい」

「ほかに変ったことはないのだな」

「はい。ございません」

打てば響く答えであり、迷いは一切認められなかった。さっき、一瞬目を伏せたように見えた以外は、申し分ない。

「本日をもって百日行を満行したものと認める」

詮舜は合掌した。昇運も合掌を返した。

「ありがとうございます」

「本来なら祝いをせねばならぬのだが、今日は非常の日だ。こらえなさい」

「はい」

「源さんが炊けるだけの米を炊いている。いつ、どれだけのめしが必要になるか分らないからね。行って手伝ってやりなさい」

「はい」

「好運にばたばたせんと、落着いているようにいいなさい。騒ぎは怪我のもとや」

「はい」

一礼して昇運は出ていった。

詮舜はもう一度首をひねった。どうも気になる。あの目を伏せた裏に、何があるのか。

だが、もうやがて、夥しい人々がここに避難してくる筈だった。凄まじい修羅をくぐって来た人たちである。出来る限り慰め、気をとり直させてあげなければならぬ。いつまでも一人の弟子のことにかかずり合っているわけにはゆかぬ。

だが、それでも、詮舜は気にかかった。自分が途方もない誤りを犯したような気が、どうしてもするのだった。

昇運は手早く法衣を着替えると、すぐ厨へいった。源さんが大釜で飯を炊いていた。

「手伝うことはないかい、源さん」

源さんの眼が、妙にうつろなのに気づいた。身体が小きざみに慄えている。

「源さん」

重ねて声をかけると、うるさそうに手を振った。その手の方向で、好運が既に炊き上った飯を握っていた。

「残念どしたなァ。満行の日にこないなことになってしもうて」

へらへらと好運がいった。

「満行を認めていただいたよ」

昇運は握り飯をつくりながら、ぶっきらぼうにいった。好運の声には、兄弟子の不運を喜んでいるような響きがあって、ちょっとむかついたのである。

「へ？」

好運は意外そうに瞠目した。知らんふりで握っていると、気をとり直したように、

「そら、おめでとうさんで……」

「ふん」

昇運は鼻を鳴らしただけである。

「けどえらいもんやなあ。いくさが始っとるいうのに、脇目もふらんと行をしてはったとは」

なんとも気に障ることばかりいう餓鬼である。横っつらをぶん殴ってやりたかった。

「もっともそれでのうては、行は出来へんのやろなあ」

「ばたばたせんと、落着いとれとお前に伝えろって、お師匠さまにいわれたよ」

ぴしゃりといった。

「落着いてますがな……」

「握り飯の形を見ろ」

好運の握ったのは、形も大きさも不揃いで不恰好にごろんと転がっているのまであった。さすがにこたえたのか、暫く黙っていた。

「坂本へも降りはりましたんか」

「当り前だ」
「どないでした？」
昇運は手をふっただけだ。いいようがなかった。見ない者に、何をいっても始らない。
「何人死んだ」
突然、源さんが訊いた。ものいいが一変している。いつもは叮嚀で、こんな高飛車な口のきき方をする男ではなかった。
「知らん」
昇運のものいいも荒くなっている。
「そこらじゅう屍体だらけだった」
「じゃあ千人だ。それとも千五百か」
断定するように言った。
「まだまだ死ぬな。このお山で三千、いや四千」
呆けたようなうつろな眼は変っていない。昇運たちなどてんで見ていないのである。まるで自分の心の中にぽっかり開いた、底なしの地獄の穴でものぞきこみながら、喋っているようだった。
「なにいうとんのや。なんぼ信長かて、お山を攻めたりしますかいな」

好運が強い調子で抗議した。
「するさ」
また断定である。
「なんでや？」
「わしがいるからだ」
きっぱりといった。微塵も疑っていない調子だった。
「源さんは織田に生命を狙われているのかね」
昇運が訊いた。源さんは首を横に振る。
「わしは疫病神や。わしのいる所では、きっと人が死ぬ。それも大勢なんだ」
啾々ともいうべき口調だった。どうにもならない嘆きが、その声をかすれさせている。
「和尚さんがいかんのや。わしを置いておくから、こんなことになるんだ」
「そんなことが……」
あるわけはないと昇運がいいかけた時、好運が叫んだ。ぶるぶる震えている。心底おびえきっているのだと、昇運は悟った。
「それならさっさと死んだらどや。自分で死なんかい！」
「好運！」

昇運がたしなめる前に、源さんが怒鳴っていた。

「死ななかったと思うか！」

いつもの源さんではなかった。全く別の荒々しい男がそこにいた。いきなり双肌を脱いだ。昇運も好運もあっとなった。源さんの上半身は傷だらけだった。前にもうしろにも、無数の傷があった。それも悉く、矢傷、弾丸傷、刀槍の傷である。源さんはぴっちり巻いた腹巻をほどくのに夢中になっている。やがてとけた。引きむしるようにとった。その下に深々と横一文字に切られた傷痕があった。

「腹を切ったんだよ。深々とつき刺して、十分にひき廻して……腸がとび出したよ……これで死ねると思ったんだよ……」

源さんの目から涙が流れていた。大粒の涙があとからあとから湧いてはこぼれた。昇運も好運も口がきけなかった。それほど凄まじい傷痕だった。

「それなのに……それなのに……生き返っちまった。気がついたら、もう手当がすんでいた。これで大丈夫だと、薬樹院のお上人がいった……」

薬樹院のお上人とは、薬樹院全宗のことである。後に施薬院全宗とも徳運軒ともいった。甲賀の生れで、僧侶でありながら、死人をも甦らすか、とまでいわれた医学の大家だった。この年四十三歳。無動寺の詮舜とは、齢が十二も違うのに、肝胆相照らす莫逆の友だった。恐らく全宗の助けた源さんを詮舜が無動寺谷にひきとったのであろう。

「ちっとも大丈夫じゃなかったんだよ……わしを死なせてくれる方が、どんなに大丈夫だったかしれやしない……それを余計な事をして生かしちまって……だからこんなことになるんじゃないか……だからこんなことに……」

源さんの前身は武士に違いなかった。それも恐らく勇猛果敢な兵士だったのだろう。君主に信頼されて、危険な切所となると源さんにお鉢が廻ってくることになったのだろう。当然、そうした切所では、敵味方共に多くの死者を出したに違いない。それなのに源さん一人は、いつもしぶとく生き残ったのだろう。戦場にはそういう兵士がいるものである。不死身といわれ、不死鳥といわれる強運の兵士。だが源さんはあんまり多くの死人を見すぎた。今日でいう戦争神経症になったのである。それが自分は疫病神だという思いに固定した。人々は自分のために死ぬ。人を死なせないためには、自分が死ぬしかない。そう思いつめて、自殺した。それなのにまだ生きている。これほどやりきれぬ思いが、またとあろうか。昇運は慰めようもないままに、涙を浮かべ、真言を唱えながら、源さんの背をさすっていた。それこそ不動明王の化他行、つまり他人のために身を捧げる行なのだが、昇運は全く気づいていない。好運は蒼白の顔で源さんと昇運をただただ見つめていた。

人々の声に昇運は我に返った。境内にとび出してゆくと、妹の屍体を抱いた知一郎を先頭に、坂本の人々が群れていた。ほとんど女、子供、年寄りである。

「それは……！」

知一郎が抱いているのが屍体だと知って、昇運は叫んだ。

「まだ十四でした」

知一郎がいう。

「たった十四で、なんで死ぬんや！」

知一郎は腹の底から怒っているように見えた。

「お師匠さまを呼んで来る。すぐ供養を……」

「そんな暇はあらへん。すぐあとから、明智の軍勢が来とる」

銃声が鳴り響いた。次いで「わあーッ」という喚声。

「父たちが防いでますんや。わしも行かなならん。これを……」

妹の屍体をひょいと昇運に手渡した。

「頼んます。皆を案内して下さい。お山のどこか安全なところまで……」

もう走り出していた。

「わしらも後からゆきますさかい」

その背に昇運は喚いた。

「どこなんだ、安全なとこって?! そんなところがあると思うか！」

本気だった。お山に攻め登る気になった軍勢相手に、安全な場所なぞあろう筈がなかった。この頃の戦闘は必ず放火を伴う。そして全山を蔽う杉の木立がひとたび燃え上ったら、これを消すすべは絶対にない。自然に燃えつきるのを待つしか、なすすべはないのである。昇運が逆上するのも当然といえた。

「昇運」

詮舜がゆっくり出て来た。

「百日とはいえ行満の身が何事だ。落着きなさい」

さすがに堂々たる風格だった。昇運は一瞬にして我に返り、そして恥じた。

「米をもちなさい、源さん。好運もだ。薬樹院の山坊へゆくぞ」

詮舜はゆっくり坂本からの客たちを見渡した。

この日の織田軍団の配置についての記録はほとんどない。三万の軍勢が、あらゆる登り口から一斉に攻め登ったとも、山を冠状に押し囲み、法螺貝（ほらがい）の合図と共に包囲の輪を縮めていったともいう。信長の本陣が坂本から根本中堂に至る、いわゆる本坂を進み、明智光秀隊が同じ坂

本から無動寺道を、木下藤吉郎部隊が横川の安楽谷へと進んだことしか明らかではない。要するにそれは盛大な人間狩りであり皆殺しだった。通りすがりの堂舎には悉く火をかけ、ゆきあう人間は抵抗すれば殺し、抵抗しなければ信長の本陣へつれていって、これまた首を斬った。高名な学僧、清僧、女、子供については、さすが織田軍団の荒武者たちも斬るに忍びず、信長に助命を乞うたが信長は一切うけつけなかった。仏法に対する怒りと憎しみが、そうさせたといえる。『根切り』。それしかなかった。つまり皆殺しである。山上で実に三千人の僧俗が斬られたという。堂舎も仏像も悉く焼かれた。火と煙は全山を蔽い、遠く奈良からさえ遠望出来、人々の心を凍らせたという。

史家の中には、古来、この信長の所業を肯定し是認しようとする傾向がある。悪いのは腐敗堕落し、えこの沙汰をした叡山の僧侶であり、信長の行為は、仏法と政治とを分離しようとした近代的な是認出来る政策だというのである。だがこの時の信長の行為は皆殺しである。どんなに叡山が腐敗堕落していようと、仏法と政治の分離がどれほど近代的であろうと、それは皆殺しを容認させるに足るものではない。どんな理論もどんな信仰も、この事実を蔽うことは出来ない。信長はどこから見ても外道そのものであり、悪鬼羅刹以外の何者でもなかったと思う。

詮舜は薬樹院全宗のもとまで辿りつくことが出来なかった。南谷で、殺到して来た信長の本

隊とぶつかってしまったのである。本坂方面には、無動寺道のように、死を賭けて織田軍団の進出を阻止しようとする知一郎や良勢のような山門公人衆がいなかったために、信長の本陣は無人の野を駆けるように南谷まで達してしまったのである。

女・子供・老人たちは、血も凍るような悲鳴をあげながら、算を乱して逃げまどった。詮舜の制止も全くきかれなかった。さすがの詮舜にもこの人たちを救うことは出来なかった。

この時の源さんの奮闘は凄まじいの一語につきた。恐れげもなく敵に近づくと、無造作に槍を奪い取り、これを縦横にふるって、なぎ倒し、突き伏せ、織田軍団の一兵といえども詮舜の近くによせつけなかった。

「逃げて下さい、逃げて」

源さんは絶え間なく叫び続けた。

「わしのために死なんで下さい！　お願いだ！　一人くらい、疫病神の働きで、生き残って下さい！」

「好運！」

昇運は叫んだ。

「お師匠さまをおつれして逃げろ！　わしは源さんを……」

昇運はかついでいた知一郎の妹を木の根もとに置いた。合掌して詫びを告げると、落ちてい

た槍をつかみ、力一杯ふりまわした。源さんの背後に迫った兵が、その槍でけしとんだ。
「ならぬぞ、昇運！」
詮舜が叫んだ。
「行者がひとの生命を奪うことは断じて許されぬ。槍を捨てろ！」
「いやなことです！」
昇運は怒鳴り返した。また一人、今度は刺した。叫んだ。
「私は嘘をいった！」
「やはりそうか」
詮舜が、昇運のそばに立った。野のけもののような恐ろしい素早さだった。昇運に斬りかかろうとした武士を、力一杯つきとばした。
「目を伏せた時だな！　日吉のお社で何を祈ったかと訊いた時だ！」
昇運は一瞬口をつぐんだ。師匠の恐ろしい眼力に感嘆したのである。
「何を念じ、何を祈った?!　いえ！」
詮舜の言葉は、鞭のように昇運を打った。
「殺し給え！」
「なに?!」

「仏敵織田信長を殺し給え！」
昇運の言葉は、むしろ朗々と響いた。
「なんということを……」
「われ信長を呪う。不動明王のお力により、なにとぞ信長を殺し給え！」
「昇運！　お前の百日行満行をとり消すぞ！　二度と再び回峯行は許さぬ！」
「結構です！」
昇運は四人目の兵士を刺した。
「好運！　何をしてるんだ！　早くお師匠さまと逃げんか！　お師匠さまが亡くなれば、お前は一生阿闍梨にはなれないんだぞ！」
あまりの凄まじい情景に、半ば失神していた好運が、この昇運の言葉にぴくりと身体を慄わせた。いきなり、とびかかるようにして詮舜の腕をつかんだ。
「逃げましょう、お師匠さま！」
「何をいうか、好運！」
「逃げて下さいまし！　この疫病神のためにも、昇運さんのためにも！」
源さんが喚いた。既に全身、出血と返り血でまっ赤だった。
詮舜が愕然とその源さんを見つめた。そこには正しく赤不動がいた。詮舜は思わず合掌した。

好運がその尻に頭をつけるようにして、押しまくった。
「分った！　わしは生きるぞ、源さん！」
いうなり、詮舜は逆に好運の身体をつかみ、背に負った。
「ナーマク・サーマンダ・バーサラナン・センダンマーカロシャナ……」
朗々と真言を唱えながら、詮舜は杉木立の奥に向って走った。跳んだといった方がいいかもしれぬ。まさに鍛え抜いた北嶺回峯行者の、野獣のような走りだった。
「よかったァ！」
源さんは大口をあけて笑った。ついでに槍をふると、昇運の前の兵士を二人はねとばした。
「わしはもう疫病神じゃない！」
「そうとも」
昇運はよろめきながら叫んだ。そろそろ槍の重さがこたえて来ていた。
「源さんが疫病神だったことなんか……」
槍がけしとんだ。相手に払われたのである。源さんがその相手を、無造作にしとめた。
「源さんが疫病神だったことなんて……」
もう一度いった。
「一度もありゃあしないんだよッ！」

「馬鹿をいえ！　じゃあわしはなんだったんだ?!」
昇運は今度は長巻を拾った。こっちの方が軽そうだった。
「源さんはね……」
長巻をふるった。一人を斬った。
「ひとの死ぬのがこわい……」
二人目を斬った。
「臆病で……気のいい……男だったのさ」
「馬鹿にしやがって！」
源さんは本気で腹を立てたらしい。槍の石突きで、昇運の足を払った。
昇運は前のめりに倒れた。
「わしが臆病だと?!」
銃声が轟いた。鉄砲隊の一斉射撃が源さんを捉えた。
起き上りかけた昇運の上に、源さんの重い身体がどさっとかぶさって来た。昇運はつぶれた。
「ありがてえ。やっと死ねた！」
昇運はその奇妙な言葉をはっきりと聞いた。おまけに耳のうしろを、思い切りぶん殴られ

た。

（死人が殴るかね）

昇運はそれっきり気を失った。

観音寺

昇運が気がついた時は、夜になっていた。

源さんの屍体は、まだ昇運の上にあった。源さんはその屍体で昇運を守ってくれたことになる。信長軍団は、鉄砲組の一斉射撃で、二人とも死んだと思っていた。源さんが石突きで足を払ったのは、射撃の寸前だったからだ。それに二人とも血みどろだった。源さんは自分の血と返り血で、昇運は返り血と源さんの血で。誰一人、二人の死を疑った者はいなかった。

織田の兵士たちは、この化物のように強靱な男を、何度か槍で突いたりしてみたが、昇運まで届くことはなかった。

そのかわりというのも妙だが、源さんの下から脱けだすのに、昇運はいい加減、苦労した。とにかく重い。それに硬かった。やっと脱け出すと、用心深くあたりを見廻して立とうとした。眩暈が襲った。膝をつき、次いで横になった。暫く呼吸を整えて待った。源さんの右手が、まだ槍をつかんでいる。寝たままでひっぱった。簡単にとれた。槍を杖にしてやっと立った。

〈どうしてこんなに参ってるんだろう〉

身体を撫でまわしてみたが、傷はない。そのくせ、足に力が入らない。やがて合点した。腹が減っていたのである。考えてみれば、朝から米粒一つ口にしてはいなかった。

〈源さんが握り飯を運んでいた〉

さがそうとして蹴つまずき、四つん這いになる。ついた手にぐしゃりという感覚が伝わった。

〈……！〉

蹴つまずいたのも、突いた手の下にあるのも、屍体だった。

天を仰いだ。月がある筈だがまっ暗だった。たちこめている煙のせいだ。やむをえず這った。地は屍体で埋まっている。どこまでいっても土に触れない。しかも大方の屍体に首がなかった。僧衣の屍体。小袖の女の屍体。三、四歳の童女の屍体。赤子の屍体。そのどれにも首がついていない。

〈なんということを……〉

総毛だった。首のない屍体で、地べたは足の踏み場もない。屍体の上を這い進んで、ようやく杉林のあたりに辿りついた。この辺に知一郎の妹の屍体を置いて来た筈だった。奇妙な責任感が昇運の心をさいなんだ。必死にさがした。いくつもの屍体をもち上げ、地べたから引きはなし、積みあげた。ひとつひとつの屍体に申しわけないと思う。口の中で真言を唱え詫びのかわりにした。

あった！　知一郎の妹は朝方そこに置いたままの姿勢で横たわっていた。首もついたままだった。安堵感で昇運はへたりこんだ。屍体は腐敗が進んでいて、強烈な臭いを放っていたが、まわりじゅう同じ臭いなのだから、特にどうということはない。人は何にでも慣れるものだ。思いもかけぬ発見があった。源さんの担いで来た荷物が、知一郎の妹の枕もとにあった。開けてみると握り飯はそのままだった。

かぶりついた。うまかった。中に味噌が入っていて、なんともいえず香ばしかった。がつがつと三個まで喰って、はっとした。

〈こんな喰い方をすると腹をこわす〉

腹が痛くなっちゃ、たまらないな、と思った瞬間、おかしさがこみあげて来た。

屍体の山の中に埋もれて、ついさっきまで死んでいた身が、腹痛を恐れている。なんともたまらず可笑しかった。くっくっと笑った。抑えがきかなくなっていた。忍び笑いが、哄笑に変った。昇運は身をよじるようにして、笑いに笑った。

冷たいものが背後から首筋にあてられた。それが長巻の刃であることを、昇運は勘で知った。だがそれがどうしたというのだ。

「もう少し笑わせてくれよ」

いい捨てて尚も笑った。この可笑しさをこらえる方が、殺されるより辛かった。

長巻が首筋から離れたと思ったら、大きな影が前に廻ってぺたりと坐りこんだ。

「昇運さんか」

知一郎だった。乱髪で、軀は浴びたような血でねばっている。返り血のようだった。

「妹さんを返すよ」

昇運は自分の脇の屍体を指さした。

「ありがとう」

頭を下げながら、妹の屍体を手でさぐった。

「首がついとる！」

ほっとした声だった。昇運はうなずいて、握り飯をつきだした。

「喰うかね」

「飯か！　飯があるんか！　贅沢やな、昇運さんは」

かぶりつき二口で喰った。次のをさし出した。これも二口。三つ目は三口。四つ目でふっと手がとまった。心配そうに訊く。

「腹をこわさないかな」

もういけなかった。昇運はひっくり返り、足をばたばたいわせて、笑いに笑った。

知一郎は心配そうにそんな昇運を見つめていたが、やがて己れの言葉の可笑しさに気づいたらしい。これも軀を二つに折って笑いだした。

「変な生き物やな、人間なんて」

「ほんとだね」

突然、銃声が湧いた。見廻りの兵士が笑い声をききつけたらしい。めったやたらの射撃だから弾丸はどこにとんでいったか分りはしない。

「天狗笑いやぞォ」

知一郎が喚いた。

もう一発、銃声が湧き、続いて逃げてゆく足音がきこえた。

〈成程。天狗笑いか〉

昇運はまた笑った。

父の良勢が深手を負って近くで動けなくなっていると知一郎がいったので、昇運は握り飯の包みを下げて立った。知一郎は妹の屍体をかついでいる。母の屍体もさがすつもりで来たのだが、この屍体の山では無理だと諦めた。それにどうせ首はないだろう。

二人は良勢が背を凭せかけている岩のところまで歩いていった。良勢は重傷らしく、握り飯

をくう力もなかった。途中で汲んで来た山水を飲むのが精一杯だった。

「なんとしてでも舟をさがせ。湖を渡って観音寺まで落ちろ」

苦しい息の下で、良勢は憑かれたように喋った。湖東芦浦の観音寺は叡山の出先事務所のようなもので、琵琶湖の船頭や漁師から、通行料や漁獲物を召上げるのが役目である。ここの別当菜生勘兵衛は知一郎の叔父に当る。

「お前の菊一文字を……勘兵衛にくれてやれ。あいつは……欲しがっていた。お前にはこれを……」

苦労して陣刀をはずした。『中堂来』と呼ばれる谷ノ坊家伝家の宝刀である。三条小鍛冶宗近が根本中堂で宝剣を鍛えた時、僅かな疵のついたのを拝領したものだという。

「父上が持っとって下さい」

良勢は首を振った。

「これからわしの行く場所では……刀はいらへん」

気力をふりしぼって笑ってみせた。

「観音寺につれてゆくわ」

知一郎は怒ったようにいい、良勢の身体を紐で背中に縛りつけた。昇運も黙って、妹の屍体を自分の背に縛りつけた。

「すんまへん」

知一郎が深々と頭を下げた。

「十四だったものやから……」

まるで十四歳で死んだのが、すべての原因であるようないい方だった。

「舟は堅田だな」

「堅田も焼かれたそうや」

知一郎の声は暗い。

「却って浜坂本に出た方がいいかもしれませんな。まさかと思って油断しとるかもしれへん」

「駄目だな」

昇運はきっぱりといった。

「信長という男は、油断するような男じゃない」

そうかもしれない、と知一郎は思った。またしても盂蘭盆会の晩の天狗を思い出している。あの時も、たった一人、尾けて来たかもしれぬ相手をあくまでもさがし出すために、三人の武士を残していっている。見つけ出したら必ず斬れと命令していた。なんのために、とあの時は考え込んだものである。やがて理解した。尾けて来た者が敵の諜者だったら、信長が僅か五十騎の母衣衆をつれて京都に密行していることを、敵は知ることになる。そうなれば岐阜に戻

る途中を扼して奇襲をかけてくる可能性がある。いかに勇猛の将といえども、五十騎の兵で充分の戦いは望めない。信長は死ぬだろう。それを惧れたからこそ、あれほど執拗に探させたのであり、あれほどの速さで京を離脱していったのである。確かに油断するような男ではなかった。

「横川から堅田へぬける」

昇運はもう歩きはじめている。その動きに迷いがない。

一切の所作に迷いのなくなることが回峯行者の特徴である。阿闍梨と呼ばれる人々は、常住坐臥決然としている、といっていい。些細な行為一つにも迷いがないために、そう見えるのだ。その決然たる態度がいつか昇運の身について来ている。これは行の賜物ではなかった。百日行の行満ぐらいで、その境地に達することは難しい。昇運にその態度をとらせたものは、いくさだった。言語に絶する皆殺しの悲惨さだった。人間の正常な思念を大きく超えたこの事態が、昇運を変えたのである。

黎明。昇運と知一郎は、堅田近くの浜で、ようやく一艘の小舟を手に入れた。堅田も焼討ちをくっていたが、その炎熱地獄を辛うじて脱れた船頭の一人が、隠しておいた小舟を提供してくれたのである。船頭は怪我で舟を漕ぐことが出来なかった。自分も生きのびるために、知一

郎と昇運の体力と気力が必要だったのである。

知一郎は妹の屍体を舟底に寝かせた。それを囲むように、良勢と昇運と船頭が腰をおろし、知一郎が櫂を握った。

湖上には、かすかに靄が出ていたが、比叡のお山ははっきりと見えた。

本来、叡山は、琵琶湖に向いた山である。現在でもなお湖上から見る叡山が、角度からいって一番美しいという。

単調な櫂の音の続く中で、良勢は眠ったままいつか死んでいた。昇運はそれに気づいたが、知一郎にしらせようともしなかった。ただただ、くい入るように、叡山を見つめていた。山頂からまだ黒煙があがっている。中腹辺にちらりと火が見えた。堂宇の放火が続いているらしい。後できいたところでは、信長軍団は四日間にわたって、根こそぎ放火して廻ったという。信長の執念深さと慎重さを如実に見せた処置といえる。

「殺させ給え」

昇運の低く重い声が湖面に響いた。

「仏敵信長を殺させ給え」

真言がこれに続く。これは呪法だった。明らかな呪殺行だった。

「わが一身にかえて、信長を呪い殺させ給え」

知一郎は身を硬くして、この呪言を聞いていた。
舟は湖面をすべるように観音寺へと進んでいった。

髑髏の舌

白日の下に、悽愴の風が吹いていた。
これは異臭を運ぶ風である。
樹々の焼ける腥いような臭い。
木と金物の焦げる臭い。
人間の焼ける臭い。
そして人間の肉の腐ってゆく臭い。
焼けた人間と、放置され腐りはじめた人間と、どちらが倖せかと、見廻りの兵卒たちは、役にもたたぬ議論に、時をつぶした。骨も残さず焼き尽くされて、一握りの灰と化した方が、いっそさっぱりとあの世へゆけるのではないかと言う者がいる。いや、肉は腐り、烏どもの啄むに委せた方がいい。腐肉はやがて美しい白骨と化し、その手足や肋骨は吹き渡る風に鳴るだろう。朝焼けは骨を紅に染め、夕陽は金色に輝かせてくれる。人間として、これほど美しい死に

ざまがあろうか。そう言い張って譲らない者もいる。

つまらないことを、真剣に論じさせるのは、彼等がそこに、明日の自分を見るからである。自分たちが見知らぬ土地で斃れた時、その白骨の行方を思い見るからである。

この兵卒たちは、日向守明智光秀の手の者たちだった。

叡山焼討ちという古今未曾有の暴挙を敢行した織田信長は、この山を坂本と共に、明智光秀に与えた。そして、三千とも四千ともいわれた山上の屍を、一体といえども葬るべからず、と厳しく申し渡した。

信長はこの仏法にとって果てしなく聖なる山を、己れの生きている限り、死の山としたかったのである。天下布武を目ざす信長にとって、仏という自分以外の者に忠節を尽くすことを教える仏法は、生涯の敵である。この山はその人々へのみせしめだった。だからこそいつまでも死の山として留らなければならない。

この山の深い静謐を守っていた杉木立は、無慚な枯木立の姿を、いつまでも続けなければならぬ。新しい芽の生えることがあれば、切り落し、更に焼くべし。

百千の伽藍の焼跡に、一宇の小堂といえども再建を許してはならぬ。建てる者あらば斬れ。

まして惨殺された三千の僧俗の菩提を葬わんとする僧の入山は、一切これを許さぬ。山に登る僧は、悉く捕え首を刎ねよ。

これが信長の凄まじいまでの意志だった。偏執的といってもいいかもしれぬ。だが、この当時の信長は、偏執的にならざるをえないほどの危機に立っていた。そして、その危機の中核は、仏法だった。

戦国武将同士の戦いには、一種のルールがある。どんな名目を立てようと、彼等の戦いは所詮利分の戦いである。自分が得するためのいくさなのだ。だから総大将同士が、どちら側かが全滅するまでとことん闘う、といったことはほとんどない。全滅するのは、部下の一隊だけだ。これは示威のため、みせしめのために皆殺しにする。だが総大将同士でそれはない。

従って彼等には本当の意味での死兵という者がいない。誰が純粋に死だけを願って闘うだろうか。生きて栄耀を享受せんがために、死にもの狂いで闘うのではないか。だからよほど切羽詰まらない限り、武士が死兵となることはない。そこで死兵とは闘うべからず、という言葉が出て来る。死にもの狂いになった武士と闘うぐらい馬鹿馬鹿しいことはないからだ。死兵は戦いのルールをはずれているのである。

ところが仏法の者はちがう。特に、『百姓ノ持チタル国』を志し、門徒共和国建設を目ざす一向宗門徒たちは、全くちがう。

彼等は、武士の戦いのルールを大きく破るものだった。

『厭離穢土欣求浄土』

一向宗門徒の旗印はこれに尽きる。

この世は穢土なのである。苦しみ、のたうつだけの悲しみと貧困の地にすぎない。そんな地になんの未練があろうか。それが厭離だ。生きているのが厭なのである。早く離れたいのである。至福の浄土は死の向うにある。倖せを約束された土地に行くことを、欣んで求めるとは、死を欣んで求めるということになる。

つまり一向宗門徒たちは、初めから、文字通りの死兵なのである。死ねば極楽にゆけると約束され、護符までいただいている。この護符は所謂お守りではない。身の安全を保証してくれるものでは決してない。まさにその逆である。これは死へのパスポートであり、浄土へのパスポートなのだ。どんな死にざまでもいい。戦闘の中で死のうと、捕えられて斬首、磔の刑を受けようと、はたまた大鍋の中で焙り殺されようと、とにかく死ねばまっすぐに浄土にゆけることを保証する、それが護符なのである。

死ぬのが最大の願いという兵と闘うのは、武士にとって実に割りに合わない、いやな戦いということになるのは当然だった。

『南無阿弥陀仏』

六字の妙号をとなえながら、まっしぐらに突き進んでくる一向宗門徒たちの戦闘集団は、織田戦闘集団にとって、いやな相手であり、底しれぬ恐怖の対象でさえあった。

だが総大将である信長にとっては、いやな相手というだけではすまない。この相手を倒さなければ、彼の天下布武は完成しないのである。すり鉢の中ですりつぶすように、掃蕩しつくさねばならない敵であった。

叡山はその見本である。信長の皆殺し作戦のサンプルである。サンプルは永く展示されなければ意味がない。だからこそ、信長の明智光秀に対する現場保存命令は、厳重を極めた。

毎日三度、明智の巡察隊が、山に登る。死の山がまさしく死の山のままであることを確認するための巡察である。

或る夕べ、この日三度目の巡察を行っていた明智の手勢は、ありうべからざる声を聞いた。明らかに法華経の読経の声である。巡察隊は色めき立った。今、厳しい禁令が破られている。全員が走った。声の主を求めてかけずり廻った。彼等は信長という主君の恐ろしさをよく知っている。

『菩提を葬わんとする僧は、捕えて首を刎ねよ』

この命令を守らない、或いは守れなかった者に訪れるのは、死のみである。巡察隊全員が、この大胆不敵な僧に替って首を刎ねられるのは必至だった。なんとしても捕えねばならぬ！

巡察の武士たちは、東に走り、西に走った。その狼狽ぶりをあざ笑うように、読経の声はます

ます声量を増し朗々として来た。見事というしかない声明だった。到底一介の旅僧などの読経ではない。叡山の中でも名のある僧の声明に違いなかった。

だがみつからない。声明を唱える肝心の僧侶の姿が、どこにもないのである。

声の発している場所は分った。何度たぐっても同じ場所にゆきつく。

「ここはどこだ？」

巡察隊の隊長が、業を煮やして怒鳴った。ありうべからざることが起っている。声はすれども主は見えずという状態なのである。

登って姿を隠そうにも、木はすべて焼けただれた枯木である。葉が一枚もついていないのに、どうやって身を隠すか。まだ夜は落ちて来ていない。夕暮の残照が、すべてを赤々と照し出している。

焼け落ちた堂宇は、ほとんど灰になっており、身を隠すすべもない。念のため灰の堆積をつき崩させてみたが、誰一人もぐりこんでいる者はない。

「華芳ヶ峯の御廟のあったところです」

兵卒の一人が図面を見ながら答えた。御廟とは第十八代天台座主慈恵大師良源の廟所だそうです、といった。

「どこだろうとこんな馬鹿なことがあってたまるか！」

声明は今やあたりを圧せんばかりの大きさになり、隊長の悲鳴のような喚き声さえかき消す勢いだった。

突然、兵卒の一人が叫んだ。

「あれは?!」

顔色が紙のように白かった。目が引裂かれんばかりに瞠かれている。ぶるぶると慄える指が、地べたに倒れている、八角形の異様な石の卒塔婆の根もとを、差していた。

一個の髑髏があった。石の卒塔婆の根もとに、僅かに頭部を埋め、ぽかりとあいた眼の部分がまっすぐに天を仰いでいる。

その髑髏の口の中で、何かが動いていた。赤い、というより桃色である。それがひらひらと恐ろしい早さで動いている。よく見ると舌だった。舌だけが、髑髏と化した顔の中で、まだ生き続け、声明を唱えているのだった。

「慈恵大師さまの髑髏だ！」

さっきこの場所を御廟だと告げた兵卒が、恐れにつぶれたような低い声で呟いた。

「卒塔婆が倒れたので、この世に出て来られたんだ」

慈恵大師は性奔放不羈、卓抜した呪力を持つ僧だったと言われる。叡山から分れて敵対関係に入った三井寺の千手院を焼払おうとして、朝廷の命令でとりやめさせられたことがあった。

慈恵はこの調停にあきたらず、死後、亡霊となって自ら甲冑を着こみ、三井寺を攻め千手院を焼き払ったと伝説にある。

巡察隊一同、魔に魅入られたかのように、暫くはひらひらと動く桃色の舌を見つめ、その声明にききいっていた。金縛りにあったように身体が動かなかったのである。やがて我に返ると、いずれも歴戦のつわもの共が女子供のような悲鳴をあげて、我先に逃げ散った。

報告を受けた明智光秀は一瞬蒼白になったが、きびしく口外を禁じたという。

処　刑

琵琶湖の東岸芦浦にある観音寺別当の屋敷で、昇運と知一郎にこの髑髏の話をしてくれたのは、堅田の船頭だった。

観音寺別当は叡山の出先事務所の性格をもち、叡山が古来もっていた琵琶湖の湖上権益の総元締の地位にあった。琵琶湖で生計をたてるすべての船頭や水夫たちが、この観音寺別当の支配下にあった。その船頭たちが、都や岐阜の情報を日毎この屋敷にもたらしてくれる。ここにいる限り、天下の形勢は僅か数日の遅れで分る仕組になっていた。

昇運は叡山を離れたのは初めてだった。師の正教坊詮舜が厳しくて、『籠山十二年』、叡山に十二年間は籠り切って山を降りるな、という始祖伝教大師の教えを自らも堅く守り、弟子たちにも強いたからである。

五つの主峰からなる比叡連峰のやまなみが、この東岸からだと、実にはっきりと見える。やまなみは左にのびると三井寺から音羽に続き、右にのびると比良連峰につながる。

髑髏の話をきいた日の夕方、昇運は知一郎と一緒に湖岸に立った。死の山と化し、慈恵大師のしゃれこうべしか、放置された死者たちを回向する僧侶のいない叡山を眺めるためである。

落日だった。

日は叡山の向うに沈もうとしている。

落日を負った比叡連峰がシルエットになって、くっきりと映っている。

山と湖の色が刻々と変りながら、静かに一日が暮れてゆく。

なんとも荘厳で、美しかった。

やはり大比叡のたそがれだった。

決して死の山のたそがれではなかった。

五つの峯に三千の屍を抱き、今も烏が腐肉を啄んでいる山々ではなかった。

「お山って、あんなに綺麗だったんだな」

昇運がむせぶように言った。

「わしは外からお山を見たことがなかったんだよ」

返事がないので、振り返って見ると、知一郎は泣いていた。身長六尺を越え、樽のような胴廻りをした大男が、べしょべしょと泣いている図は、不思議と頑是無い子供を思わせた。なんともいえず哀れだった。

〈こんな子を泣かせるなんて……〉

改めて信長を憎んだ。

「おい」

背後から声がかかる。これは知一郎の叔父の勘兵衛だった。身体つきが知一郎に似て、すさまじいまでの肥満体だった。現在観音寺別当をつとめている。勘兵衛は何もいわず知一郎の父を埋葬し、二人を屋敷においてくれていた。

「お山が……夕焼けです」

知一郎が指をさしながら言った。

確かに血のように赤い夕焼けだった。

「そうやな」

勘兵衛が気がなさそうに応えた。知一郎が咎めるように見た。

「わしはあの日も、一日ここに立ってお山を見ていたんや」

勘兵衛がいいわけするように言った。

「どこもかしこも煙が上ってなあ。火も見えたわ。夜になると、火だらけで、そりゃァ綺麗やった。あの上で皆殺しがあったなんて思えんほど綺麗やった」

暫くとぎれた。やがてぽつんと言った。

「それからは、成るべくお山を見んことにしとる。切なすぎるんや」
大きな身体をすくめるようにしている。
〈こんな人でも辛いんだ〉
確かに、勘兵衛は何があっても驚かないといった不敵な面だましいの男だった。年は四十五。男としての脂の乗りきった齢である。船頭たちは勘兵衛を恐れ、また頼りにしていた。彼等への指図もてきぱきしていて、いかにもこの仕事に精通しているという安心感と逞しさがあった。
それほどの男が、切ない、と言う。
焼けたお山を見るのが辛い、と言う。
無意識に、拳を白くなるほど握りしめていた。
「そうや。肝心のことや」
いつものしたたかな顔に戻って、勘兵衛が怒鳴った。
「二人共、すぐ越前へゆくんや」
「越前ですって?!」
知一郎が素っ頓狂な声をあげた。
「寒いんでしょう? これからは、雪ばかりで、身動きもとれないんじゃないんですか」
「何かあったんでしょうか?」

知一郎を抑えながら、昇運がきいた。
「織田が来る」
「ここへ、ですか?」
「そうや。湖の権利までとり上げるつもりやろうが、そうはいかへん。信長なんて男は、鉄砲にはくわしいかもしれんが、舟のことも湖のことも、何にも知りゃァせん。湖のことを知らん者に、船頭衆がついてゆくわけがないやないか」
狡猾そうにへらへらと笑ってみせた。
「まァお山へ納める金の幾分かを、織田に廻すようにすれば、ことはすむやろ。けどお前らはあかん。二人共、大分あばれとるようやし、ひょっとして、顔をおぼえとる侍がおるかもしれへん。そやから明日の朝、早うに落ちろいうんや」
勘兵衛のいうことは、筋が通っていた。ただ何故越前なのか、それが分らない。
「この近間で、お山の落人をかくまってくれるところなんかあるわけがないやろ。越前が一番近いんや。知り合いもいるし……」
師の正教坊詮舜はじめ、生き残った僧侶たちは皆、京へ逃げている。
「それは闘わなかった僧侶だけや。もともと公家衆と縁戚のお方が多いことやし……」
比叡山の僧たちを総称して『一山大衆』という。この大衆は大きくわけて衆徒と堂衆と山

徒の三つになる。このうち、衆徒とは生れつき家柄が高く、学問の出来る人々で、器量次第で天台座主にもなれる。堂衆は生れつきの門地が高くない子弟たちで、三塔の寺塔に配されて堂守りをする。第二ランクといえば分りやすいかもしれない。第三の山徒というのが、知一郎や勘兵衛のような人々のことだ。山に仕える門徒という意味での山徒である。公人衆とも呼ばれ、叡山を運営してゆく上での様々な事務を担当する役割である。各地の荘園の年貢の徴集から、山上での消費物資の世話までする。僧兵になるのは、この山徒だった。

衆徒が戦いをするわけがなかった。仏者はどんな理由があっても、人を殺すことは許されないのだから、これは当然であろう。堂衆の中には、山徒をひきいて戦う者もいた。門地が低く、高位を獲得出来ぬ不満を、そういう形で発散させる人々である。だがこのクラスの僧も、大半は戦闘に参加しない。その人々は衆徒を守って一緒に行動した筈である。衆徒たちは京に身内を持つものが多い。そこを勘兵衛はいうのである。

「もっとも、公家だからいうて油断は出来へん。あんた、竹内季治が殺されたのを知っとるか」

昇運には初耳である。正三位竹内季治の名前だけは聞いていた。法華の信者で激烈な論客として高名な人物だった。

竹内季治は久我家の家宰である。永正十五年（一五一八）生れ、永禄五年（一五六二）に正

三位に叙せられている。久我家の領地乙訓郡久我荘の荘官として同荘預所職に任ぜられ、その差配をすると同時に、同じ場所に広大な土地を買い集め名主となってもいる。自身が富豪であり、久我家という権勢の庇護もあり、朝廷でもかなりの発言権を持っていたらしい。

だが竹内三位を高名にしたのはそんなことではない。当時の洛内法華宗を代表する強信者としてであった。これも高名な普伝日門と並び称される戦闘的折伏説教の大家だったのである。竹内三位は切支丹にとって最大の敵だった。彼の運動のお蔭で耶蘇会は何度京都を追われたか分らない。あの温厚な宣教師ルイス・フロイスが、法華宗に対してだけは極度の憎悪を抱き、その耶蘇会への通信文の中で口を極めて罵倒している理由は、この竹内三位と普伝日門の二人にあった。

その竹内季治がとんでもない失言をした。それも将軍義昭の前でである。

『信長の勝利、勢力及び地位は、既にその極に達したれば、熟したる無花果の如く、木より地上に落つるの外なし』

これがフロイスが耶蘇会へあてた通信の中で書いた竹内季治の言葉である。喋った時期は元亀元年の末か元亀二年の春かと思われる。確かにこの時期、信長はその最大の軍事的危機の中にあった。北に朝倉と浅井、南に本願寺と三好党、東に武田、西に毛利の大敵が控えている。法華大名松永久秀の動きも微妙であり、近江一向一揆と六角義賢が絶えず膝もとの近江路を荒

らしている。それだけに説得性があった。まして語り手は折伏の大家竹内三位である。噂は忽ちのうちに禁裏から上京あたりの町衆にまで、一気に拡がっていった。そして当然、信長の耳に入った。信長は激怒した。

竹内季治ほどの男が、これくらいのことを予測しなかったわけがない。予測したのに敢て喋ったのは、どこかでたかを括っていたからである。季治は久我家の家宰だ。いうなれば最も有力な公家の家老である。朝廷に対してあれほどつくしている信長が、久我家の家宰で、主上の御覚えもめでたい自分を斬るわけがない。季治はそう思いこんでいた。信長が朝廷につくしたのは恩を売ったにすぎず、それも厄介な事態に遭遇した場合、天皇の力を利用してやろうという魂胆から出たものであることを、季治は全く知らなかった。

季治は直ちに逮捕され、彼の所有になる寺は破却された。だが不思議なことに、すぐには処刑されなかった。

ここで又、季治はたかを括ったと思う。やはり久我家の家宰は斬れないのだ。久我家や町衆からの助命運動も起っている。法華宗からも詫びが入った。織田家はもともと法華の信者だったのである。時が来れば放免されるにきまっている。

そしてその時が来た。叡山焼討ちから恰度七日目。元亀二年九月十八日。京から岐阜に帰ろうとしていた信長は、近江永原で季治を呼び出し、一言の口を利く暇も与えず、首を斬りとばした。宙に舞った季治の首は、強く驚愕の表情を浮かべていたという。

信長は季治の処刑をこの時期まで延ばしたのには、意味がある。先ず叡山を焼く必要があった。朝廷・公家衆、諸宗の僧侶たちの胆を一気に奪う必要があった。次に季治である。この首をとばすことは、富裕な法華信者である上京の町衆や、堺の商人たちに激烈な衝撃を与える筈だった。叡山といい、季治といい、一種のみせしめだったわけである……。

昇運は長いこと黙って勘兵衛の話を聞いていた。実は昇運は叡山に戻ることを考えていた。焼けただれたといっても、お山はお山である。それにお山のことなら、すみからすみまで知っている。死体があったら供養しよう。焼跡の掃除もしよう。それをしながら、本式に信長呪殺のための行をしよう。そう思い決していた。

だが堅田の船頭と勘兵衛の話を信ずる限り、叡山復帰は少なくとも当分の間、不可能であろう。そうかといって、この芦浦で便々と日を重ねることは出来ぬ。信長呪殺行は、生命を賭けた荒行による以外に、成就出来るとは思えなかった。芦浦は到底行場には成りえない。近くには葛川明王院の行場があるが、これは余りにも有名すぎて織田軍団の捜索を受けやすいし、十中八九師の正教坊詮舜がとじ籠る場所だった。詮舜に会うことは出来なかった。何人もの織田兵を殺戮した自分を、師はもう僧侶とは認めてくれまい。その上、北嶺修験道の聖なる行場

を、こともあろうに禁じられた呪殺行のために使うなぞ、許してくれるわけがなかった。

とするとこの近くでの有力な行場は、立山と白山しかない。白山は信長の分国、美濃に近すぎる。それに、何故か立山を男山、白山を女山という。呪殺行のきびしさは、やはり男山のものではないか。

昇運の心はきまった。越前まで知一郎と共にゆこう。そこで別れて、自分は立山に入ろう。五穀を断って、呪殺行にうちこもう。

知一郎を見た。この谷ノ坊家のたった一人の生き残りは大きな図体をかがめて、ひたすら耳を掻いている。これは困惑のしるしだった。よほど寒さに弱いにちがいない。

「そんなに越前はいやかい？」

昇運がきく。

「うん。どうもなァ……」

まだふん切りがつかないらしい。

「昇運さんは、どないする？」

「私は喜んで行くよ。途中で知一郎さんと別れて、立山に行く。あそこを行場にして修行するんだ」

「立山？」

知一郎は目を瞠った。

「寒いで、あそこは。生きながら凍った僧がいるそうや」

「その時はその時のことさ。今から先を読んだところで、どうにもなりはしないよ」

「……！」

昇運の勢いに押されたかのように、知一郎は無言だった。

「知一郎さんが行きたくないのなら、無理強いはしないよ。知一郎さんの目的は行をすることじゃないからね。坂本を昔通りに復興することだろ？　それなら出来るだけ坂本の近くにいたい筈だからね」

「殺されたいんか、知一郎！」

勘兵衛が吼えた。

「坂本には明智が城を築くいう話や。お前は明智の軍勢も殺しとるんやないか」

それでもまだ知一郎は迷っている。口は噤んだままだ。

「どうしても坂本へ帰るいうんなら、その中堂来置いてゆけ。どうせ殺されてとり上げられるんやったら、わしに貰われた方が、刀も嬉しいやろ」

知一郎が背中にはすにかけた刀を指さしてそういった。

具体的な品物の名があがったためか、知一郎は急激に我に返った。

「叔父さんには菊一文字あげたやないですか」
「死ぬのに刀が要るか。勿体ない思わんのか」
勘兵衛も喚き返す。
「坂本へ行かないいんやろ。越前へゆくがな！」
これでやっと話がきまった。
大比叡はすっかり暮れて、山上にちらちらと灯が動いていた。巡察隊の松明であろう。
〈もう二度と、このお山を見ることは出来ないかもしれない〉
昇運は、暗がりに向って目を凝らした。
大比叡は霞んで見えた。昇運の涙のためである。

ウルガン伴天連

十五歳の好運は托鉢姿で、都大路を歩いていた。師の詮舜に命じられたのである。
「出家は一日一日が行でなければならぬ。歩いて来なさい」
日の暮れるまで、寄宿先である烏丸光広の屋敷へ帰ることは許されない。泣きたくなるような思いだった。この明日のない戦乱の世に、托鉢僧に施行しようなどと思う、奇特な人間がいるわけがない。両手で捧げた木の鉢の中は、いつまでたっても空っぽだった。
〈こんなんで帰るわけにはいかんなァ。みっともないやないか〉
好運にも奇妙な見栄がある。
〈お母んに頼もうかしらん〉
大原に住む母親の姿が、ちらりと脳裏を掠めた。六人の子持ちで、亭主はとうにいない。三好勢にいくさに狩りだされたまま、もう十年も帰って来ない。どこかの戦場で野たれ死したにきまっていた。

〈お母んに銭があるわけがないわな〉

三男の好運は口べらしのため、僧侶にされたのである。家を出る時、母親がはっきりそういった。

「ごめんな。お母んには、六人たべさせてゆける才覚がないねん。四人で精一杯やねん」

もう一人、好運のすぐ下の妹が、親戚の家へ貰われてゆくことになっていた。妹は一日中、泣いてばかりいた。そしてふっといなくなった。どんな親戚やらしれたものではなかった。残された兄姉は、冷たい目で好運を見て、別れの挨拶一つしてくれなかった。好運は消えた妹の顔を虚空に描こうとした。描けなかった。すっかり顔形を忘れてしまっている。

〈こんなもんなんやなァ〉

自分が格別冷たいとは思わなかった。

〈どこで何しとるやら〉

生きていれば十三になる筈だった。

〈わしは阿呆なことしとるわ〉

気をとり直して、経文を唱えた。

「お布施あげる」

突然の声に驚いて振返ると、少女が一人立っている。妹より小さい。まだ七つぐらいか。美人というのではないが、透きとおるような白い肌に、黒い大きな目だった。前髪を切り揃えて、首をかしげるたびに、さらさらと揺れる。さしのべた手に一文銭を二枚もっていた。それが木鉢に乾いた音をたてて落ちた。

「おおきに」

少女がぷっと笑った。

「おかしな坊さま」

「どうして？」

つい釣込まれて訊き返した。

「お坊さまは、おおきに、なんていわないわ」

また笑った。花が開いたような笑い顔だった。

「こんなもん貰うてええんか？　後で困らへんか？」

「私は平気。困るとしたらウルガンさんよ」

少女が指さした。

異形の男が立っていた。外国人である。身の丈、六尺を遥かに越える長身。鶴のように痩せている。それが日本の小袖をだらしなく着て、すりきれそうな草履をはいている。手に数珠のようにコンタツを下げていた。

男の名はオルガンティーノ・ニェッキ。去年日本へやって来た宣教師である。日本人は世界で最も賢明な国民に属し、喜んで理性に従う国民である、という高い日本人評価を持ち、出来るだけ日本人に順応する方向で布教をすすめていた。日本の食事をたべ、日本の着物を着、一年にわたって、もと仏僧だった者から法華経を学んだ。たった一年で通訳なしに信者の懺悔をきくことが出来るようになったという。そうした努力が実を結んで、やがて京童から『ウルガン伴天連』と呼ばれて愛されるようになった。ウルガンは勿論オルガンティーノの略である。

そのウルガンがにっこり会釈すると、二人の方へ大股に歩いて来た。

「どうかしましたか、鈴さん」

「なんでもありません。こんなに沢山銭を貰って困らないか、ってこの人が訊いてたんです」

ウルガンがうなずいて、好運にいった。

「銭二枚、大丈夫です。あなたも私も貧乏同じです」

懐から巾着を出し、自分の掌の上へあけた。一文銭が二枚、大きな掌の上に転げ出た。

「私、切支丹、二文。あなた、仏法、二文。同じですね」

豪快に笑った。好運も釣られて笑う。

鈴さんと呼ばれた少女が、首をかしげ、微笑を浮かべて、二人を見ていた。

「ウルガン。お祈りの時間になるわ」

「そうですね。教会に帰りましょう」

二文の銭を大事そうに巾着にしまうと、好運を見た。

「教会に来てみませんか。ほれ……ええと……後学の、ために」

好運は笑っていた。まさかそんなことが出来るわけがなかった。

少女が好運の手をとった。ひやっと冷たい手だった。

「行こうよ、坊さん。面白いわよ」

「だけどね……」

好運が躊躇うのを、強引に引っぱった。

「見るだけぐらいなんですか」

〈まさか改宗させるつもりじゃないんだろうな〉

ちらりと恐怖心のようなものが湧き上って来たが、少女の冷たい小さな手にさからうことが出来なかった。まるで、消えた妹にひっぱられているような錯覚があった。

「ええがな。ゆくがな。手はなしてんか。坊さんが女の子に手をひかれとったら、格好がつかんやないか」

少女はきいていないように、ぐんぐん引っぱってゆく。

さすがの好運が驚いた。山を降りてから、毎日都の中を托鉢して歩いていたので、随分ひどい痛みようの家も、何軒も見て来たが、これほど凄まじいぼろ家は初めてだった。

ウルガンが慎重にドアに手をかけ、そろそろと引きあけた。中には一応祭壇が築かれ、二十人ほどの信者が坐れるだけの粗末なベンチが並んでいた。よくよく見ると明らかに素人の手製である。一つ一つ歪つで、自分の存在を告げしらせているような趣きがある。十人あまりの信者が、そのベンチに並んでいた。男もいれば女もいる。驚いたことに、武士までいた。

礼拝が始まった。

好運にはわけの分らない言葉と儀式が続く。

少女は終始にこにこと好運を見ていたが、突然、注意を屋根に移した。

屋根が揺れている。風の音がきこえて来る。

今や建物全体が揺れている。

儀式を進めながら、ウルガンも、信者たちも、じっと屋根をみつめている。

奇妙な光景だった。

風に揺れる教会堂に集まった、宣教師と信者たち。宣教師の着た和服は、次第にどうしようもなく弛んで来、だらしなくなっている。その宣教師も信者たちも一様に天井を見つめ、気もそぞろに、それでも儀式だけは恐らく正確に進行させている。

天井裏のきしみが大きくなり、風の音も強さを増して来た。

少女が低く囁くようにいった。

「もう駄目よ。逃げ出して」

ウルガンが平然といった。慣れている感じだった。

「皆さん。又、風です、そうっとそうっと出て下さい。順番に、お願いします」

宣教師が慣れていれば、信者たちもまた慣れていた。端から一人ずつ、そっと立って出てゆく。最後の一人が出終ると、ウルガンが少女にうなずいてみせた。少女はまた好運の手を握って、足音をたてずに表につれ出した。最後にウルガンが蠟燭を一本一本吹き消しながら出て来る。

教会の横が空地だった。全員この隅に集まって、強い風の音をききながら、ぎしぎし揺れる教会の屋根を見つめている。

「皆さん、祈禱を続けましょう」

ウルガンが音頭をとって、さっきの儀式の続きが行われてゆく。

屋根はぎしぎしときしみ続け、祈禱もいつ終るともなく続いた。

まるで屋根と祈禱が力を競い合っているかのようだった。

不意に、ぱたりと風が熄んだ。

「熄んだ。今日もつぶれなかった」
少女が叫んだ。
ウルガンが微笑しながら跪いた。
「皆さん、今日も無事にすみました。神さまに感謝の言葉を送りましょう」
信者たちも跪いて祈りだした。少女も跪いて祈っていた。
好運は黙然とただ見て立っていた。奇妙に感動していた。

少女の家は上京だという。
ウルガンが好運に、送ってやってくれますか、と訊いた。いつもは自分が送ってゆくのだが、今日は出来ないからという。梯子を借りて来て、屋根と天井を補修しなければならない。今日の様子はちょっと危なすぎたという。好運は承知して歩きだした。
上京まではかなりの道のりである。少女はまるで体重などないかのように、軽々と、時に翔ぶように歩いた。
「名前は鈴いうんか」
「美鈴。美しい鈴」
「ウルガン伴天連は鈴いうとったけど……」

「ウルガンさん、びすずっていうんだもの」
「はあ、ビスズなァ」
ぐふ、ぐふ、と好運が苦しそうに笑った。
「やだわ、だらしない笑い方」
「堪忍や。けど、ビスズ……」
「送っていらないよ、もう。道わかってるんだから」
「堪忍堪忍。もういわん」
すねたように少女は暫く口を利かなかった。
「おとうもお母んも切支丹か」
「法華」
上京は富裕な町衆の町である。町衆を一つにまとめているのが法華信仰だった。法華宗は一向宗の逆である。来世を説くことなく『現世利益』を説く。現世で富み栄え安心を得るための宗教である。まさに商人的といえた。美鈴の父母もその法華宗徒だという。だが法華は別して切支丹を嫌っている筈だ。しかも戦闘的な折伏宗団である。実の娘といえども、切支丹を放っておくわけがなかった。
「ようなんもいわんなア」

「いうよ」
平然とそういう。好運は少々毒気をぬかれた。
「それで平気か？」
「平気じゃないよ」
「しかしそれじゃ大変やないか」
「大変だよ」
「どないするんや、そういう時」
「なんにも。黙って顔見てるだけ」
「顔を？」
「そう」
「見てるとどうなる？」
「黙ってしまう」
「ふーん」
「それでおしまい」
嬉しそうに、にこっと笑った。
好運にも父母の気持が分るような気がした。こんな邪気のない娘に、じっと顔をみつめられ

て、折伏なんか出来るわけがない。逆効果である。自分の言葉がすべて贋物であることが、この娘の目を見ているうちに曝露されてくる。少女はまるで試金石だ。少女にぶつけて色あせる言葉は、すべて贋物ということになる。何度折伏を試みても、その度毎に、自分の言葉が贋物にすぎない、安い金めっきをした鉛の小判にすぎないと判明した時、親は一体どうしたらいいのか。好運は少女の父母が可哀相になって来た。
「なんでそんなに切支丹がええんや」
「お雪さまが好きなの」
「お雪さまってなんや」
「知らないの。雪のマリアさまのこと、お雪さまっていうのよ」
「ああ、マリアさまならきいたことがあるわ」
「マリアさまのお堂を建てようとしたんですって。それでどこに建てたらいいか、伺ったんですって。そしたら夏に雪の降る場所に、ってお告げがあったの」
「夏に雪が降る場所？　そんなとこあるわけがないやないか」
「その人もそう思って諦めたんですって。そうしたらその夏本当に街に雪が降ったんですって。それも一つの区域だけ」
「……！」

「だからそこにお堂をたてて、おまつりしたマリアさまを、雪のマリアさまって呼ぶようになったの」

「それがお雪さまか」

「そう。その絵が教会にあったのに」

「そうか。ほな明日見せて貰いにゆくわ」

「変なお坊さま」

少女がいって、くすりと笑った。

次の日、好運は本当に明るいうちに教会に出かけていった。どうせ、朝から托鉢に出なければならないのだから、同じことだった。

ウルガン伴天連が見せてくれた聖母マリアは、なんと日本人の描いた絵だった。確かに、背後には降りしきる雪があった。その意味で間違いなくお雪さまだった。だがこのお雪さまは上臈のいでたちで、しかも旅姿だった。手甲脚絆に草鞋ばき、長い杖をさして今しも降りしきる雪の中に歩み出そうとしている姿なのである。

「これ、旅に出ること、違いますか」

好運が訊くと、

「そう。旅立ちのマリアともいいます」

とウルガンがいう。

「どこへ旅立つんですか」

「はて」

ウルガンは腕を組んで、暫く絵を睨んでいたが、

「はらいそへ」

「はらいそ」

「天国のことです。仏教の浄土ね」

「じゃァ浄土へ旅立つお雪さま」

「そう」

「死出の旅路や。これ、死装束や」

「そうかもしれません」

「なんであの子、この絵が好きなんやろ。七つの子が、なんで死んでゆくお雪さまが、好きなんやろ」

ウルガンが首を横に振った。宣教師だって、答えられないこともあるのだ、と好運は思った。

傀儡子女

谷ノ坊知一郎は、気の抜けたような顔で街道を歩いていた。辞退するのを無理矢理立山の麓まで昇運を送って別れて来たところだった。芦浦から立山まで、どんより曇った鈍色の空の下を旅しながら、昇運の顔が一日一日と変ってゆくのが、知一郎にもはっきり分った。刻々と気力が充実し、贅肉が落ち、次第次第に狼の顔になってゆくのである。恐らく一日じゅう歩きながら、信長呪殺の行のやり方について思案をこらしているのであろう。その行への一筋の思念が、昇運の頬を痩せさせ、狼の鋭さに変貌させていっているのではないか。今頃はもう本物の一匹狼と化して、立山の稀薄で透明な大気の中を、獣の敏捷さで自由にとび廻っているのではなかろうか。

今、知一郎を腑抜けのような顔にさせているのは、その昇運と自分との比較から来る一種のやり切れなさが原因だった。

善悪は別問題として、昇運には確たる目的がある。信長を呪い殺すという、凄絶ともいうべき大きな目的がある。昇運は今やその目的に対して全精神を集中させようとしている。信長の五臓六腑を噛み破る、一匹の狼と化すことを己れに命じ、気一つで信長を斃そうとしているのだ。

その昇運に較べて、自分はなんだ。目的がないとはいわぬ。叡山の再興、坂本の復活がそれであることは確かだ。だが昇運の鮮明な目的に較べて、これは余りにも茫漠とした目的ではないか。現に今、自分は何をしたらいいのか、何から始めたらいいのか、全く分っていないではないか。昇運のように、一匹の狼と化すことを己れに命ずるという、単純直截な方法がみつからない。口に叡山・坂本の復興を唱えながら、いたずらに日を消し、月を送ることになり果てるのではないか。それでは結局、目的を持たないのと同じことになる。それが知一郎の最も恐れている事態である。なすべきことを持たぬ十九歳。便々と棚から落ちるぼた餅を待っているだけの青春。やりきれなかった。そんな思いだけはしたくない。この俺に何かをさせてくれ。せめて何をなすべきかを教えてくれ。知一郎は全身全霊をあげて、悲鳴を上げているようなものだった。

知一郎の足がふっととまった。耳をすませた。

どこからか、陽気な音がきこえて来る。鼓、太鼓、笛。そして脳天に響くような高音の歌声。

街道ではなかった。音は山の方向から来る。

知一郎は躊躇った。既に黄昏が迫っている。宿をとろうと思えば、歩度をのばして、次の宿場に向わねばならない。わけの分らぬ歌声にひかれて、山中にわけ入っては、野宿することになりかねなかった。越の国の十月末は、野宿には辛い寒さである。いや、実のところ、寒さ自体がそれほどこたえるわけではない。寒さとつれだってくる、そこはかとないもの淋しさ。それがいやなのである。なんのわけもなく、たまらなくなって来るのが、なんともやりきれないのだった。

だがこの音はなんだ？　淋しさがないわけではない。だがそれを蔽ってあまりある陽気さがある。

いつの間にか知一郎の足は、街道をはずれていた。村の中の小道を辿り、次第に斜面を上ってゆく。音が大きくなって来る。林の切れ目に出た。広い林間の空地。そこに彼等はいた。

〈傀儡子か〉

知一郎も彼等の存在は知っている。傀儡人形を舞わせ、小さな袋から牛をひき出してみせ、夥しい短剣を同時に宙に躍らせ、火を食い、面縛して踊り、そして女たちは気が向けば淫をひさぐという。ほとんど一所に定住することなく、旅から旅を流浪する特殊な人々である。

珍しくかなりの大人数だった。祭礼の時に限って坂本や大津などに現れる傀儡子たちは、ほとんどの場合十人から十五人ぐらいの小集団である。それがここには最低七十人はいる。何カ

所も焚火をたき、赤々とした焔の中で酒を酌み、楽器を鳴らし、歌を唱い、傀儡人形を舞わせ、何人かは立って、人形と同じ振りで巧みに踊っている。大宴会といってよかった。陽気で当り前だと、知一郎は苦笑した。

不意に踊っていた女が一人、こちらを指さして何か叫んだ。忽ち数人の、傀儡子たちが、猪槍、半弓、長巻などを握って、こちらに向って走って来る。

知一郎は一瞬逃げかけたが、思い返してやめた。傀儡子に対して何も悪いことをした覚えはない。それに身の軽い彼等に追われて逃げおおせるものでもなかった。

知一郎はこの一党の長らしい老人のところに連れてゆかれた。素姓とここに来た理由を問われた。嘘をつくなどという七面倒くさいことは出来ない。だから真実を語った。長は昇運についてだけ、興味を示し、根ほり葉ほり訊いたが、こればかりは応えようがない。まさか狼に化するために、立山に入ったともいえないではないか。質問はそれで終りだった。忽ち酒が運ばれ、肴が運ばれた。肴は獣と鳥の肉であり、あとは山菜だった。うまかった。

いつの間にか、女が知一郎のそばに、ぴったりくっついて坐っていた。さっき踊りながら知一郎を見つけ、男たちに教えた女である。知一郎に女の齢は分らないが、自分より年上なことだけは確かだった。恐ろしく長い黒髪を、一個所くくって、背に垂らしている。浅黒い肌がつやつやしていて、歯の白さが鮮やかだった。目は細く切れ上っている。

女はお蘭と名乗った。しきりに酒をすすめ自分も飲んだ。酒は底なしのようだった。
夜に入り、宴はますます盛り上って来た。
「今日はなんのお祭りや」
「お祭りじゃないわ」
お蘭が鮮やかな歯を見せて答えた。舌が桃色に濡れている。
「じゃアいつもこんなに騒ぐんか」
「まさか」
お蘭は気兼するようにあたりを眺め廻してから、知一郎の耳に口をつけるようにしていった。
「きいても知らん顔してるのよ。いいわね。今日は出陣式」
「ええッ、出……」
「しーッ」
お蘭の指が素早く知一郎の口を塞いだ。
「もう。知らない顔っていったでしょ」
お蘭の指はいい匂いがした。腕をあげた時、脇の下からも、そそるような強い匂いがしていた。
「でも傀儡子なんやろ。傀儡子がどうしていくさをするんや」

「馬鹿ね、こんなとこでいえますか」
ひどくなまめかしい流し目が、知一郎のみぞおちに、ずきんとこたえた。
「そうか」
ほとんど呟いた。声を出す力がなくなっている。頭の中がもやもやしていた。お蘭のいい匂いだけが、こたえた。
「駄目な人」
お蘭が笑った。
「はあ？」
「いらっしゃい。みんな教えてあげる」
知一郎はまたお蘭に手をひかれて立ち上った。林を奥へ奥へとつれこまれる。乾いた苔に蔽われた斜面に出た。
「坐って」
尻餅をつくように坐った。
「先ず話してあげるわね。傀儡子一族が何故、誰に対して戦うことにしたか」
「誰や、相手は」
「敵は悪鬼羅刹、織田信長。戦う場所は伊勢長島」

知一郎は仰天した。酔いが一気にすっとんだ。
「長島やて?!　それやったら傀儡子は一向門徒か」
「全然見当違いね。あたし達は今が好き。来世なんかどうなってもいいの」
「けどそれやったら……」
「川内のワタリという人たちがいるの。海の民なのね。舟を使っての運送なんかをするんだけど……長島一揆は本当はこの人たちが中心なのね」
「……？」
「そうして、この人たちはあたしたち傀儡子と兄弟のような関係にあるの」
何が何だか分らないでいる知一郎に、お蘭は中世以来の『道々の輩』、無縁となって天下を放浪し、一切の関渡津泊、つまり街道の関所も港も、すべて通行税を払うことなく、手形もなしで通行することを許された自由の民について語った。『上ナシ』を標榜し、一切の支配を認めないこの自由の民たちが、天下布武を標榜する織田信長と、どれほど決定的に対決せざるをえないかを語った。伊勢長島の一揆は農民一揆でもなく、単なる一宗門の戦いでもない。それは自由の民と専制君主の決定的な戦いであること、だからこそ傀儡子たちもワタリたちに協力して戦うことにきめたのだということを語った。
知一郎の血がたぎり、あふれて来た。身体が震え、昂奮で顔が染まった。喚いた。

「つれてってくれや」
やっぱりといった顔でお蘭は知一郎を見た。
「よかった！　やっとどうすればいいか分った！　信長と戦えばいいんや！　一向宗とか法華とかにこだわることは、ちっともないんや。要は力を合せて、信長を倒せばいいんや」
「そうよ」
「つれてってくれへんか。俺、何でもする。俺、強いんや」
「そう」
お蘭がにこっと笑った。いい匂いのする手が滑らかに動き、忽ち知一郎の衣服をはいでいった。
「なにすんねん？」
「強いんでしょ、あんた。先ずそれをあたしに見せてくれなくちゃ」
自分もあっという間に裸になった。
肌をよせるとなんともいえずすべすべしてつややかだった。
「俺……」
知一郎は呻くようにいう。
「分ってます。初めてなんでしょ」

お蘭が胡坐した知一郎の膝に乗った。首に手を絡め、あわあわと口を吸った。口もいい匂いがした。桃色の舌が絡み、吸われた。屹立した知一郎のものが、いつの間にか淡いお蘭のかげりの中に吸いこまれてゆく。律動が刻まれた。動いているのはお蘭であり、強力に吸いこんでいるのもお蘭である。知一郎の大きな手が、いつかお蘭のすべすべした尻をしかと摑んでいる。律動が早まり、高まり、不意に終った。

天が落ち、星が砕けて散った。

地獄谷

昇運は地獄を見下して立っている。

血のような朝焼けが、何も彼も真紅に染め上げていた。

ごぼごぼ、ごぼごぼ。

絶えざる呟きが、地獄から洩れる。

熱湯の泡が、到る処に湧きはじけている。

がーん。

爆発が起り、熱湯とどろどろの泥土が吹き上げられる。それは荒寥たる谷間に展開される、絶えざる噴火現象だ。

これが越中立山の地獄谷である。そこは、古来、日本国中の亡霊が落ちこむ地獄であると信じられて来た。

全国の霊山に地獄と名づけられた場所は多いが、真の仏典に描かれた地獄の実相を現ずるの

は、この立山の地獄に優るものはないといわれる。悪因悪果、浄土欣求の根拠となるものといわれた地獄の形相は、ここに現存している。八大地獄、十六別所、一百三十六地獄の形相はそのままに存在し、三途の川あり、死出の山あり、針の山、餓鬼の塔、賽の河原、はては血の汚れによって女人の陥るといわれる血の池地獄まで、ここで目のあたりに見ることが出来るという。

〈正しく地獄だ〉

昇運はこの谷から目を離すことが出来ない。

峰の本社が祀られたこの立山の山頂は、日と月の相会する聖地であり、そこへは二十五菩薩を従えた阿弥陀如来が来迎するという。来迎仏は五色に輝く雲に乗り、妙なる音楽の合奏をともなう。五色ヶ原には色とりどりの花が美しく咲き乱れ、鳥の啼声も永遠の共鳴鳥だという。

まさしくこの山頂は至福の土地なのだろうが、昇運にとっては気重い場所でしかなかった。

〈わしは既に人を殺した〉

どんな理由であれ、人を殺した破戒僧が、五色に輝く弥陀の来迎を迎えることがどうして出来よう。ここを至福の場所といえる人は、生来倖せな人なのではないか。人を殺す必要もなく、罪を犯す機会も持たなかった人々は、この山頂に立つがいい。

人殺しはそこに立つことが出来ぬ。殺人者が安心して立つことの出来るのはここ地獄谷しか

ないのではないか。愛する人が死んで極楽へゆけるとは限らない。愛する人が地獄に落ちたに違いないと思い、それでも遭いたいと思うなら、ここへ来るがよいといわれる。

〈わしの居場所は正しくここだ。そして信長の居場所もここしかない筈だ〉

この凄まじい焦熱地獄を目のあたりに見ているだけで、昇運の胸の中にふつふつと滾って来るものがある。

〈お前もここに居るべきだ。わしと一緒にここに立っているべきなんだよ〉

無意識に幻の信長に語りかけていた。

〈お前がここに立ったら、この熱泥の底に沈んでいるすべての悪霊が爆発と共に甦り、一人一人、お前の悪業を責め立てるだろう。その時こそわしは、お前の汚れた肉体をこの双の手で抱きしめ、もろともに、この厚い泥流の中に身を投じてやる。お前の肉が熱の中でどろどろと熔解し、お前の耳が鼻が目が焼けとけてゆく様を、最後までこの目で見届けてやる〉

昇運の眼は、熔け崩れてゆく信長の顔を現実に見据えている。

〈火だぞ、信長！　お前にふさわしいのはこの焦熱地獄だけだ！　俺はお前を必ずじわじわと焼き熔かして殺してやる！〉

昇運は九字を切った。

「不動明王さま。お願い出来る資格を失った者ではございますが、なにとぞこの志を哀れと思

し召し、われに怨敵呪殺の力を与え給え」

合掌の手が震える。真言が口をつく。

「ナーマク・サーマンダ・バーサラナン・センダンマーカロシャナ・ソワタヤ・ウン・タラタ・カン・マン」

〈わしの行場はここだ。悪鬼羅刹といわばいえ。わしはこの地獄谷で、地獄の修験道を、必ず必ず満行してみせるぞ〉

朝焼けに、昇運の顔はまさに血を浴びたように赤かった。

思えば奇妙な青春である。

昇運はまだ十八歳。その顔に稚なさが残り、青春が匂っていて当然の齢頃である。

だが今の昇運の顔に稚なさはまったくなく、青春の甘い香りも払底している。

肉をすべて削ぎとられたような頬、何物かへの敵意で異常に鋭くなった眼。それは正しく狼の顔だった。その痩せた肩に、悪戯のつもりで背後から手を置く者がもしいたとしたら、今の昇運は恐らく振り返りざま噛みつくのではないか。その歯は相手の柔らかい咽喉の肉を噛み破り、一瞬に死を招来するのではないか。そう思わせるほど、昇運の全身には殺気がみなぎっていた。

無残ともいえる変貌である。

人は自ら望んでこんな変貌を遂げることは出来ない。また誰が十八歳で狼に変貌することを望むだろうか。

すべては苛酷な現実が人に強いたものである。

昇運にとっては、思っても見なかった叡山焼亡が、信長の皆殺し作戦が、その苛酷な現実だった。この合戦が——あれが合戦といえるものかどうか、昇運は疑っていたが——昇運を否応なく変貌させたのである。

だが人は大いなる現実を拒否することは出来ない。起ったことは起ったことであり、変えることは出来ない。もしそれを変えることが出来たら、どんなにいいだろう。昇運は気の弱った時、ふと思うことがある。だがそれは夢である。人は夢見て生涯を過すことは出来まい。

昇運にとっては何よりも、自分が人を殺したという現実が、断乎として夢見ることを許してはくれないのだった。

人を殺した人間は、正にその殺した瞬間に、全く別の世界に入りこむことになる、といったのはドストエフスキイである。人を殺した人間と、殺したことのない人間は、一見同じ世界に棲みながら、完全に別個の生き物になる。両者が心の底から融け合うことは不可能である。人殺しの眼に映るこの世の風景は、人を殺したことのない者の見る風景とは截然と異っている。

己れの心に正直であればあるほど、この現実を否定することは出来ない。

昇運はたった十八歳で、人殺しの世界に入った。決して自ら望んだことではないが、現実にそういうことになった。この現実を変えることが出来ないのならば、積極的にこの現実を生きてゆくしかないではないか。そしてそこにこそ、一般にいわれる意味とは違っているとしても、昇運の青春があるのではないか。

いわば狼の青春である。人殺しの青春である。それは何物かを噛み破り、何者かを殺戮することを願う青春である。昇運にとって、それは大魔王織田弾正ノ忠信長にほかならなかった。信長呪殺こそ昇運の青春だった。

川内（かわうち）

〈これはなんだ！　水しかないじゃないか〉

傀儡子一族と共に、伊勢長島に到着した谷ノ坊知一郎の、長島に対する第一印象がこれだった。

『長島および一江島七村をさして川内という。……長島の郷、四方河にして中に包む、故にこの名あり』

と地誌にある。これを織田信長側から見ると次のようになる。『信長記』はいう。

『長島には一向宗修行の僧徒籠りけるが、ところは四方節所（要害の意）にて、二、三里の間、大河三重四重引廻しければ、地利に自慢して、鉄の楯と心得、近国の徒ら者ども相集め、山賊、海賊などを業とし、征伐の妨をなし、いささかの利を見ては是非を顧るに能はず、逆意に募り、王政をも恐れざる……』

この近国の徒ら者どもというのが、知一郎や傀儡子の徒をさし、海賊がワタリの人々、山賊

とは木地師、金掘り、鍛冶などをさしていることは明白である。専制君主政体というものが、何ごとに対しても、どれほど手前勝手な理屈をつけ、どれだけ実相とちがった命名によって事実を葬るものであるかという、見本のような文章ではないか。

とにかくこの土地は、しょっちゅう氾濫しては土砂を盛り上げるいくつもの大河を逆用し、その盛り上げた泥土をつなぎ合わせて輪をつくり（だから輪中地帯という）これに堤防の役をつとめさせ、住民はその中に高床の家をつくって住んでいた、特殊な地域なのである。

家々をつなぐ道路もなく、従って各家が数艘の小舟を所有し、一切の用はこの舟を使ってすますという大デルタ地帯だった。知一郎が「水ばかりじゃないか」と呆れても当然のいわば水漬けの地形だったのである。

だがこのデルタ地帯は、東海と畿内をつなぐ陸海流通の大動脈だった。

この輪中に築かれた長島坊願証寺は、本願寺教団中の名門として『河内御堂』と呼ばれ、川内の象徴ともいうべき一向宗の寺だったのである。

実に四年の長きにわたって、専制君主信長に抵抗し、ほとんど五分の戦いを戦い切った長島の栄光は、長島土着の門徒衆だけでなく、知一郎やお蘭のような渡り者の助人の力によるところも大きかった。

「こんな小っぽけな村まで、いくさでぶんどらなきゃならないなんて、信長ってのもけちな男だね」

このお蘭の言葉は勿論、間違っている。

坂本で生れ育った知一郎には、それがよく分る。琵琶湖の水運がなければ坂本の町は成立たず、坂本がなければ比叡山もまた成立たないのだから、水運の重要性は一目で分るのである。

それにしてもこれはなんという光景であるか。この地帯の合戦は、陸づたいでは不可能である。必ず舟に乗って、移動しながらの攻撃になり防禦になる筈だった。

〈舟の多い方が勝つ〉

それはこの地域では自明のことだ。信長の弟信興の敗戦と死も、それに続く信長の第一回長島攻撃に際しての無残な敗北も、すべてこの認識を欠いたことに起因している。この元亀二年五月の第一回攻撃はなんと五日間の戦いで織田軍団の敗走に終っている。

〈面白いな。ここなら小勢の者が多勢の者に勝つことが出来る。舟の扱いに慣れている方が勝つ〉

知一郎は舟が巧みである。来るべき合戦の日を思って、知一郎の巨大な身体が武者震いをした。お蘭がそんな知一郎を、可愛くてたまらないというように、目を細めて見ていた。

知一郎が傀儡子一族と共にこの川内に来ることを許されたのは、呆れたことにお蘭の男という名目によってだった。

傀儡子一族はもともと異民族であり、朝鮮半島を経由してこの国に移って来た人種である。ジプシーの一族だともいい、朝鮮の山林に棲む一族だともいう。今となっては正確なことは分らないが、彼等のなりわいとする表芸が遠く西域、或いは中国のものであることは明らかだった。それだけに種族間の結束がかたく、容易に他民族をうけ入れない面がある。

その傀儡子一族が最も寛容に人を許す部分は、色恋だった。他の部分では断乎として異種族を弾き返す彼等が、この一面では極めて脆いのである。惚れたんだから仕方がない、という一言が、彼等には万能のパスポートなのである。

傀儡子一族にも勿論夫婦の関係はある。だが夫婦と呼ばれても、夫が妻を、妻が夫を独占するということにはならない。それぞれが全く自由な個人なのである。それでなくては、妻がゆきずりの男と褥を共にするのを、亭主が平然と見ているなどということが、ありうる筈がなかった。この種の性交は、実質的には金銭或いは食物を得るための売淫にほかならないとしても、少なくとも建前としては、一時の恋愛なのである。つまり妻が他人に惚れたのである。そして、惚れたんだから仕方がない、ということになる。亭主といえども、女の惚れる自由を束縛することは出来ない。

これは男女同権というより、むしろ母系家族のありように近い。女の方が男より上位にある。そしてそれは同時に、自種族同士の結びつきによる血液の濃厚さに対する自浄作用だったといえるかもしれない。血の濃い者同士の性交が、歪んだ種族を作る原因であることを、彼等は本能的に知っていたのではないか。

とにかく谷ノ坊知一郎は、この、惚れたんだから仕方がない、という傀儡子一族の掟によって、一族の一人とみなされ、旅を重ねてこの川内の地に辿りついたのだった。そして今の川内が待つものは、弟の復讐に燃え立つ織田信長の攻撃であり、知一郎が望むものは昇運と同じく、信長の生命だった。叡山を焼きつくし、数千の僧俗を皆殺しにした大魔王の首を、自らの長巻で刎ねとばすことだった。

知一郎は満足だった。これで自分にも昇運に負けない目的と方法が出来た。知一郎もまた昇運同様に、既に多くの人を殺している。殺人者であり、常人とは別世界の人間である。だが倖せなことに、彼の周囲にいる傀儡子一族は、男女を問わず、ほとんどが人殺しの経験があった。お蘭でさえ、匕首を、或は長巻を振って、七人の男を殺しているという。その意味でここは別世界そのものだった。だから知一郎は、別段人殺しであることに悩むこともなく、気楽に日々を過すことが出来た。なにもかも、お蘭との爛れるような日毎の情交さえ、信長と戦うという一事のために正当化されるように、知一郎には思えた。

こうして元亀二年は、様々な青春の思惑のうちに、ようやく終らんとしていた。

鬼嘯

一年余の歳月が流れた。

元亀四年正月。越の国は極寒である。

まして越中立山の山中は、正しく氷地獄だった。行をしていた僧が、生きながら氷像と化したという伝説さえある。

立山の中腹に轟々と断崖絶壁を落ちる滝がある。高さ四十八丈。東洋一の瀑布だという。この極寒の中でも凍ることなく、凄まじい地響きをたてて落下し、ために称名滝の名をえている。この峡谷に立つと、いかに大声を張り上げても、人間の声などまったく聞えることがない。それはこの谷に、称名滝ばかりか更に雄神滝・叔羅の滝があるためだ。この叔羅の滝は地獄の結界と呼ばれ、その瀬には世に在りし時、慳貪吝欲の衆生、業報の悪人が群生して、餓鬼道を現出しているといわれる。

今、その人語など聞える筈のない峡谷に、明らかに人間のものと分る声が朗々と響き渡っていた。或いは高く、或いは低く、さながら仏者の声明のようだ。だがそこには言葉はない。声だけあって、言葉がない。従って声明とはいえない。経文を誦えているわけではないからである。だが抑揚は声明に似ている。これを何といえばいいのか。

中国に嘯というものがある。特定の意味内容を含まず、言語としての意味を全くもたない、純粋の音声だけの口技であり、声を長く引くために長嘯と呼ばれる。口技即ち芸としての長嘯は魏晋時代から唐代にかけて、名士の間に流行したらしい。唐時代の孫広という人の書いた『嘯旨』なる書物によると、嘯の技術には外激・内激・含・蔵・散越・大沈・小沈・疋・叱・五太などの十二法があるという。例えば、外激の法とは、

『舌を以ってその上歯の裏を約し、大いに両唇を開きてその気を激し、それをして出でしむ、これを外激と謂ふなり』

とあり、また内激の法とは、

『舌を用ひ、前の法を以って両唇を閉じ、一角において少し啓くこと麦芒の如し、その気を通じて声をば内に在らしむ、これを内激と謂ふなり』

とある（いずれも沢田瑞穂先生の『中国の呪法』による）。

注目すべきは、同書にあげてある十四種の曲目である。非常に難しい名前なので、一々写す

ことは避けるが、例えば『深渓虎』という曲目がある。これは谷で虎の声をきいてこれを写したものだという。また『空林夜鬼』というのがあって、夜、林を過ぎてこの林の声を写したものだという。つまりほとんどが自然界の物音または声を写したものなのである。

この芸は、後代になると『象声』という民間の雑芸に堕した。所謂ものまねであるが、それでも我が国のものまねとは様相を異にしている。芸人が隣室にあってこの芸を演ずるのだが、男女のひそやかな対話、器のふれ合う音から交媾のベッドのきしむ音、赤ン坊の泣き声、更には市場の雑踏、合戦の物音、風雲雷雨まで活写するという。一篇のストーリイがあって、それに附随するあらゆる音響を真似るのである。日本の単純なものまねの到底及ぶところではない。

この嘯というもの、実は古代においては芸ではなかった。本来は招魂の呪法だったのである。術士が嘯によって霊魂または鬼を呼び出すのである。

日本でも夜、口笛を吹いてはいけないという禁忌があった。これは、夜は、鬼魅・妖怪・悪霊が跳梁する時だから、口笛を吹くことによって、そのつもりがなくても、それら『怪しのもの』を呼び寄せてしまう危険があるからだ。

幽鬼は暗夜に異様な叫び声をあげて仲間を呼ぶという。それを『鬼哭啾々』といい、『鬼嘯』という。それを真似たのがこの嘯の本来の姿だったといえよう。

立山称名渓谷に響き渡っている声は、その呪法としての長嘯だった。長く短く、高く低く、嘯が続く。凄まじい声量であり、驚くべき澄明な声だった。

声の主は、称名滝の滝壺に臨む岩に結跏趺坐していた。木綿の行衣の上に狼の皮に首の通る穴をあけた、メキシコのポンチョの長いもののようなのを羽織っている。頭髪も髭ものび放題で、一見したところでは齢のほども人相も不明だが、これは廿歳になった昇運だった。

一昨年、元亀二年の暮に、単身立山に入った昇運は、生れてはじめて地獄谷を見て、ここを己れの行場ときめた。信長呪殺のためにどんな行をしていいか皆目分らぬままに、五穀を絶ち、山の草ばかり食し、地獄谷の更に下にあるこの称名滝にうたれた。真冬の立山で滝にうたれて生きていられるわけがない。忽ち昇運は凍え死んだ。死んだ昇運を蘇生させてくれたのは老いた山人である。

息を吹き返した瞬間、昇運は自分が死んで魔界にいると信じた。山人の容貌が天狗に酷似していたからである。この時代、山人は前鬼・後鬼というように『鬼』と呼ばれ、或は『天狗』と呼ばれたが、それは彼等が異人種だったためだ。鼻高く、とがり、身の丈は高く、まさに天狗の様相だった。

山人は親切であり、山のことをよく知っていた。彼等から見れば昇運のような男は、山の恐

ろしさを知らず、山をなめて無謀な行為をする愚かな平地人の典型にすぎない。冬山に二枚重ねとはいえ、木綿の行衣だけで食糧も暖房具もなく登るといったら、現代の山男だって呆れ、叱責するだろう。まして滝にうたれたのである。自殺行為としか思われなかった。

だが昇運は、山人の折角煮てくれた粥を一口も食おうとしなかった。行のために五穀を絶っていることを告げ、叮嚀にことわった。

それが山人の昇運を見る目を変えさせたらしい。なんの目的あっての、どんな種類の行だと尋ねた。

隠すべきいわれはない。昇運は淡々と起ったことを語った。どんな種類の行をすればいいか分らず、闇雲にわが身を痛めつけるために滝にうたれたことも告げた。

その時、山人の教えてくれたのが、この嘯だった。

「本来仏法に呪殺の法があるわけがない」

この老いた山人は、立山に住んでいるためか、意外に仏法に詳しかった。

「呪殺の法はこの国古来の、物部氏の伝えた呪法と、唐から来た道教の呪法があるだけだろう。長嘯の呪法は、彼の地でも仏法の声明と混り合って一つになったともいう。それに……」

山人はにやっと笑った。

「わしが知っているのは、その呪法だけだ。何人かに試みてみたが、効いたとも効かぬとも分らぬ。呪法は使う者の力量次第なのだよ。わしにはその力量がなかったらしい。正直にいって、お主で試してみたいという気持はある」

「教えて下さい」

昇運は熱くなっていった。確かに叡山修験道の行で、呪殺が出来るとは思えなかった。叡山修験の目的は、自らが不動明王になることによって、他者を救うことにある。絶対に他者を殺すことではない。そして今の昇運には、たとえそれが異国異端の呪術でも、信長を殺すためには受け容れようという心の用意があった。それほど切羽詰まっていた。

「教えるというほどのことじゃない。嘯の声の発し方、気の整え方、その他、こまごまとしたことだけだ。それが鬼を招く力を持つかどうかは、あくまでもお主次第だな」

そのこまごましたことの修得に、なんと半歳かかった。

「もういいだろう」

山人がそういったのは夏のはじめだった。それから本当の意味での昇運の修行が始まったのである。

昇運は回峯行中と同じように立山山中を歩き廻り、到る処で長嘯した。称名滝にうたれこでも滝の音に負けじと長嘯する。最後に地獄谷を降り、熔岩の轟音の中で長嘯を繰り返した。

もとより幽鬼一匹、現れてはくれなかった。

織田信長が、三方ヶ原の戦いで武田信玄に敗れたこと、それでも悪運強く、信玄の病気のため、武田勢の追撃をまぬがれたこと、長島に続いて石山本願寺の蹶起にあい、苦戦を余儀なくされていることなどが、風の便りで、こんな山中深くまで聞えて来てはいたが、昇運は些かも動揺することはなかった。

昇運の眼から見れば信長は大魔王である。大魔王が俗世の軍隊などに敗れるわけがなかった。局地的な戦いで負けることはあるだろう。だがそんなものは、信長にとって些々たる事である。負ければ退けばいい。また勝機を見て、戦いを挑めばいい。大魔王の魔力がうせるまでは、信長自身の身に死が訪れることは絶対にあるまい。文字通り不老不死であろう。先年の千草越えの時、根来の杉谷善住坊という鉄砲の上手が佐々木承禎に頼まれて至近距離から信長を狙い撃って、僅かに小袖の袖を掠めたにすぎなかったという。即座に捕えられた杉谷善住坊は茫然自失していたそうだ。起ったことが信じられなかったからである。この時の距離、二、三間（四・五メートル）。善住坊の腕をもってすれば、はずれる方が不思議なのだ。そしてその不思議が起った。

「いかなる天魔、信長を守るか」

と善住坊は言った。その時になって初めて、善住坊は信長の正体を知ったのである。信長の

魔に気づいたのである。だが遅すぎた。あたら鉄砲の名手が、首をとばされる直前に、それに気づいたとは。

だから昇運は焦らない。魔王信長を倒すためには、自分も信長を上廻る魔物になるしかない。それがかなわなければ、多くの小悪魔を招び集め、それらの力を結集して大魔王に勝つしかない。それには自分の長嘯が彼等を招集出来る力を持たねばならぬ。

昇運は耐えに耐え、忍びに忍んだ。相変らず五穀を絶ち、山の植物しか食さない。冬になれば当然植物は姿を消す。氷を割り、凍った土を掘って根を探すしかなくなる。口にものを入れる機会は減り、身体は衰えたが、気力は一向に衰えなかった。寧ろ前より盛んになってゆくようだった。もう前の年のような無茶はしない。毛皮を着ているのも、その証拠だった。狼の毛皮である。もとより昇運が捕獲し、剝いだものではない。山人の贈り物である。狼の毛皮は、風を防ぎ、水を防いだ。雨も雪も霰も滝の飛沫も防いでくれる。

軀は痩せたが筋肉は落ちず、巌のような堅固な肉体になった。感覚が鋭敏になり、視覚も聴覚も嗅覚も、以前の数倍の鋭さになった。手の爪は長くのび、自然の武器となったが、昇運がそれを使うことはない。山の獣たちは決して昇運を襲うことはなかった。吹雪の夜、猿たちと身を寄せ合って眠ったこともある。彼等は最初、狼の毛皮の臭いを恐れたが、やがて昇運の臭いの方に慣れたようだった。そんな猿たちを昇運は可愛いと思ったが、厳しく気を引き締め

て、情愛に溺れる自分を律した。今の昇運の心に、情の入る余地はない。憎しみと怨みだけがあれば足りる。

昇運の長嘯は次第に悽愴の感を増していった。山峡に響くその声は、眠っている狼たちを起こし、不安に身震いさせるほどになった。昇運自身はそれを知らない。

今日も未明から、昇運はこの称名滝へ来ている。

長く短く、高くまた低く、昇運は長嘯を繰り返して倦きることがない。いつか午を過ぎ、やがて黄昏に入ったが、それさえ昇運は気づいていなかった。完全な三昧境に入りこんでいた。

なん度もつぶれ、血を吐いた咽喉は、今ではぶっ通しで二日でも三日でも嘯し続けることの出来る頑強さに変っている。それにつれて声も変った。どちらかといえば細い、涼やかな声だったのが、いつの間にか野太い塩辛声になっている。声だけ聞いたら、とても廿歳の若者のものとは思われまい。まるっきり四十男の声だった。それも戦場で鍛えあげたしたたかな武将の声だ。昇運の青春は先ず咽喉から失われていったといえようか。

黄昏の色が次第に濃くなり、星も見えぬ暗黒が地上を蔽おうとしている。

その時、それが起った。

ざわざわ

漣のような音を、昇運は聞いたと思った。

ひたひた

ひたひた

裸足の足音のような音が、それに続く。

〈なにかな？〉

とも昇運は思わない。山中の不思議な物音には、慣れっこになっていた。山の静寂などというのは嘘の皮だった。山は絶えずなんらかの音をたてている。お喋り、といってもいいくらいである。それも風の音、樹々の音など素姓の知れた音ばかりではない。いや、むしろ、素姓の知れない音の方が多いのである。だから気にもかけなかったのだが……。

〈ン？〉

何かが昇運に触った。触ったといっても、たとえば手でなでた、触った、そんなものではない。何か、身体じゅうで触った。たとえば、猫が身体をすりつけてくるように、全身で昇運に触った。

また触った。別のものであり、昇運の身体の別の側面だった。

まただ。今度はうしろ。

そして同時に前にも来た。顔にぺたっと触った。ひどく冷たく、ぬらっとした感触。そして硫黄の臭い。

〈なんだ、これは？〉

昇運にとって初体験である。

また触る。左脇腹。

また触る。背中。

また触る。また顔だ。

昇運は手を上げて、顔を拭いた。ぬらりとしたものが、手にもついた。そしてやっぱり硫黄の臭い。だが、前の者とは違っている。前の者？　ではこれは人間なのか?!

はっとした。人間がこんなに硫黄臭いわけがない。そしてこの立山で硫黄の臭いのする場所は一個所しかない。地獄谷。

地獄谷から来た人間たち。地獄谷の熔岩の底から来た人間たち。それは一種類しかない筈である。地獄に堕ちた亡者たち。

何かぶつぶつと呟いた。

ぶつぶつ。

ぶつぶつ。

呟きが増えてゆく。声ではない。何を言っているかは分らない。ただ不満そうだった。文句を言っているのだ。それだけははっきり分る。約束が違うじゃないか。なんでやめるんだ。そう言っているかのようだった。やめる?!　はっと気づいた。昇運はいつか長嘯を熄めている。このえたいの知れぬ亡者たちに気をとられて、思わず長嘯を忘れていた。

息を深く吸い込んだ。それをゆっくりと吐きだす。

あ、あ、あ、あ

お、お、お、お

長嘯になった。

ぶつぶついう音が熄んだ。

満足そうな息づかいが感じられる。

何かが肩に触った。

誰かが背中に触った。

親愛のしるしのようだった。

少なくとも邪慳ではなかった。

身体のあちこちを触られた。

みんなで触っている。

そうか、お前はこんな身体をしているのか。
そういわれているような触感だった。
亡者たち！　正にそれだった。それに違いなかった。
わが懐かしの亡者たちよ。
とうとう出て来てくれたのか。
私の長嘯に、やっと応える気になってくれたのか。
ああ、私の亡者たちよ！
長嘯の音は高く低く続き、昇運の頬は濡れた。

小　猿

きっ、きっ、きっ。
小猿が跳ぶように走った。
美鈴が投げた鞠をとりに行ったのである。
この小猿は信者がウルガン伴天連に寄進したものだが、不思議なことに美鈴だけになつき、他のどの信者にもなつかなかった。ウルガンでさえ、餌をやろうとして、いやというほど手を噛まれている。従って餌をやるのは美鈴の係りになり、やがて日がな一日、美鈴と行動を共にするようになった。普段は美鈴の肩にちょこなんととまっていたり、懐ろに抱かれていたりしている。
行脚姿の好運は、地べたに足を投げ出して飽きもせず鞠と遊んでいる美鈴と小猿とを眺めていた。
四条坊門通り姥柳町、現在の蛸薬師室町西入ルの、耶蘇会が永禄四年の春、京で初めて買

い求め、改装を施した会堂の表である。十二年もたったこの会堂は文字通り荒れ果てて、強風が吹くと今にも倒れそうに揺れた。新しい会堂を買うか建てるかするのが急務だったが、耶蘇会にはとてもそれだけの金はなかった。京都近郊の信者は次第にその数を増して来たが、妨害の激しい京では、まだ数百の信者しかいなかったのである。

二年たって、美鈴は九歳になっている。益々透き通るような美しさを増している。それは見る人を不安におとし入れるような美しさだった。あんまり綺麗すぎて、とてもこのまま長くは続くまいと思わざるをえないのである。何か起る。何か無残なことが起るにきまっている。そう思わせ、辛い思いをさせるような美しさだった。

〈天使やったかな……それとも天徒やったかな〉

好運はウルガン伴天連のいった言葉を思い出そうとしている。美鈴に惹かれて倒れそうな会堂に通っているうちに、かなりの切支丹の通になっていた。

〈とにかくそれや、美鈴はんは。人間の世界では綺麗すぎる。神に仕えるように……いや、神や仏に仕えるように作られとるんや〉

とにかく見ていて飽きることがない。何をしていても、或いは何もしていなくとも、この少女は可愛いのだった。

〈えらい子におうてもうたわ〉

好運は時々そう思う。下手をすると、美鈴のお蔭で、切支丹に改宗させられかねない、と思う。

叡山の復興が一向にはかどらないのもいけなかった。

好運の師、正教坊詮舜は主として朝廷に働きかけ、薬樹院全宗は俗に戻って医師となり主として京都奉行をつとめる木下藤吉郎に働きかけていたが、信長はこの問題については執拗で、断乎として叡山の復興を認めず、廃墟のままにしておくように厳しく命じた。業を煮やした正覚院豪盛のような僧は、はるばる甲斐までゆき、武田信玄に叡山の復興を依頼したが、信玄として一朝一夕に都を落し入れるわけにはゆかない。かわりに身延山の久遠寺を移転させ、そこへ叡山を招いて復興を試みてはどうかといったが、結局この話は沙汰やみになった。叡山はやはりどこまでも京のものであり、近江のものだったのである。たとえ無人の焼野原と化しても、甲州へ移るわけにはゆかなかった。

好運はお山へ帰りたかった。京の町はこの十七歳の少年僧には暗すぎた。華やかでいて同時に暗い。静穏というものが、そこには一切なかった。

去年（元亀三年）の九月、信長が将軍義昭に十七ヶ条の『異見書』をつきつけて以来、この二人の仲は険悪の一途を辿っている。将軍義昭は各地の武将に内書を送って蹶起を促し、自らは居城の二条城の守りを固め、兄義輝殺しの下手人である松永久秀や三好三人衆とさえ手を握

り、打倒信長の意気に燃えているという。早晩この京でいくさが起るのは必定(ひつじょう)だった。

「いややなァ」

好運は思わず声を出して言ってしまった。

「なにがいやなの？」

美鈴が聞き咎(とが)めて尋ねた。

「またいくさになるのが、いややなァ、いうたんや」

「いくさなんか、しょっちゅうやないの」

美鈴はけろっとしている。

「今更どういうことないわ」

ずっと京の町に住んでいる美鈴にとっては真実そんな感じなのかもしれない。いくさはほとんど常にあった。美鈴はいくさと共に育ったようなものである。

だが好運はちがう。子供の頃から叡山に入った。焼討ちという暴挙が起るまで、いくさは話でしかきいたことがなかった。それにその最初のいくさが、なんともはや凄まじいまでに残忍な、皆殺し(ジェノサイド)だった。足の踏み場もないほど地面を埋めつくした、首のない屍(しかばね)ばかりの光景は、好運を震え上がらせるに充分だった。もう二度とごめんだと好運は思う。二度とあんな光景は見とうない。

血みどろの源さんと、兄弟子の昇運の姿が浮かんで消えた。

〈どこで何してはるのやろ？〉

昇運の不運さをつくづく気の毒だと思った。

〈折角百日回峯を満行しはったのに……〉

叡山回峯行の苦しさは、そばで見ていた者にしか分りはしない。よくぞあそこまで、と思う。とても今の自分に出来るとは思えなかった。

「あかんなァ。わしは」

また声になった。

「悩んでるのね、好運さん。告解したら？　きっと気持が楽になるよ」

「冗談いわんとき。わしは天台やぜ。痩せても枯れても、回峯行者のはしくれや。なにが悲しゅうて、切支丹に入るか」

「天台にも告解はあるの？」

「あほなこと……」

いいかけてやめた。考えてみれば、天台に限らず仏教各派には、人の悩みをきいてくれるような優しさはない。ひょっとして優しいのは死者に対してだけではないか。

不意に好運はなんとなく悲しくなった。特に自分の身が悲しいわけではない。師匠の詮舜も、

兄弟子の昇運も、死んだ源さんも、先行きどうしたらいいのかさっぱり分らない自分も、この世には美しすぎる美鈴も、なにもかもひっくるめて悲しかった。

〈生きているって、なんて悲しいんだろう〉

そう思いながら好運は、いつの間にか泣いていた。美鈴の前で、という禁忌も何も失って、ただ泣いた。

「可哀そうな好運さん」

美鈴が好運の涙を着物の袖で拭いてくれた。驚いたことに美鈴も一緒に泣いている。その優しさがぞくっと身に沁みた。

〈生れてから今日の日まで、こんなに優しくされたことがあっただろうか〉

無意識に美鈴の手を押しいただくように握っていた。雪のように冷たくすべらかな手だった。

〈サンタ・マリアの雪殿！〉

いつか美鈴の言った言葉が思い出されて来た。死出の旅路に向う『旅立ちのマリア』の画も反射的に思い出された。

〈美鈴こそサンタ・マリアの雪殿やないか〉

その思いが、不意にぞっとするほど、不吉なものに好運には思えた。

「痛いわ、好運さん」

美鈴が小さな悲鳴をあげた。

好運は自分が、死出の旅路に出るのをひきとめるように、力一杯、美鈴の手を握りしめていることに気づいた。

きっ、きっ。

小猿が嘲笑うように歯をむいた。

輪中

「ああ、いい気持」
お蘭が呻いた。
伊勢長島の輪中の中に築かれた砦である。鉄砲玉よけの青竹の柵に両手でつかまって、思い切り尻をつき出すようにしているお蘭を、知一郎は背後から抱えるようにして犯していた。
白い豊満な尻が、波のように輪を描いてくねる。思わず放射しかけるのを、知一郎は歯をくいしばってこらえた。半ば抜くようにして、自分の方も輪を描くようにする。
「たまらないよ」
お蘭が切羽つまった声をあげる。
「まだまだ」
また深く一気に貫いた。
お蘭が絶叫を噛み殺す。

「すっかり巧者になっちまって……」
大きく喘ぎながら、お蘭が甘えるように言った。
「誰のせいや」
深く浅く、知一郎は律動を繰り返した。
「傀儡子殺しっていうんだ、知さんみたいなの」
また貪欲にむさぼりながらお蘭が応えた。
「だから誰のせいやと訊いてるんやないか」
知一郎は二十になった。背丈も胸や胴廻りも一廻り大きくなって、どこから見ても、暗闇では顔を合わせたくないような巨漢になっている。房々した頬髭まではやして、正に堂々たるつわもの顔だった。天性なのか、お蘭の教育がよかったのか、性技の方も抜群で、しかも精力絶倫、さすがのお蘭をして悲鳴をあげさせるような男になっている。
「あたしの自慢の種なんだからね、知さんは。いくさなんかで死んじゃ駄目だよ。いいね。死なないって約束して」
お蘭は何度目かの絶頂にのぼりつめようと夢中で尻をふりたてながら、うわ言のように切れ切れにそういった。
「いくさなんか起きんやないか。退屈で仕様がないわ。いっそ早ういくさがしたいわい」

知一郎が不満げにいった通り、傀儡子一族と共にこの長島に来て以来、信長は一度も攻撃して来ない。傀儡子たちは防柵を築く果てしない使役にかり出されるばかりで、知一郎ならずとも不満の声をあげたくもなろうというものだった。

だが信長は単に忙しかっただけのことである。武田信玄の上洛に備え、三方ヶ原の敗戦を甘受し、獅子身中の虫ともいうべき将軍義昭の勝手な振舞に一々対策を練っていた。信長のような男が、弟を殺され、自分も僅か五日で敗退したような相手を忘れるわけがなかった。しかも一向宗の総本山石山本願寺は信長を法敵とみなして、全国に一向一揆の指令を発している。本願寺は必ず討たねばならず、そのためには、まず長島を潰しておく必要があった。

お蘭はそのことを知っている。義昭との決着がつき次第、直ちに信長は長島を襲う。その時はこの前のようなわけにはゆくまい。長島が水軍の援助なしには攻め切れぬ土地であることを、信長はいやというほどしらされている。そして、本願寺を攻撃するためには、長島を無にしておかねばならぬ。つまり全滅作戦をとる必要がある。当時の言葉でいえば、『根切り』である。その熾烈な戦いの中で、知一郎のようにまっすぐな男が生き残れる確率はゼロに近い。お蘭はそれを恐れている。いくさに生き残るには狡猾さがいる。サバイバルとしての狡猾さが必要である。叡山で襲われ、たった一度しか戦ったことのない知一郎に、そんな狡猾さがあるわけがなかった。

お蘭にはそれがある。何よりも女であり、生きて来た年数も長い。戦闘だって知一郎より知っている。自分の狡猾さで知一郎を助けねばならぬ。お蘭はそう決心していた。知一郎はお蘭の手づくりの、男としての傑作である。どうしても生き永らえさせねばならぬ男である。たとえ、そのために自分が死ぬことになっても知一郎は殺させない。

お蘭は自分が知一郎の身替りになって死んでゆく光景を想像してうっとりした。だから最後の絶頂感は、恍惚の極みだった。お蘭の絶叫は、川内の水面を長く尾を曳いて響き渡った。

上京焼討ち

正教坊詮舜は不機嫌だった。

元亀四年四月三日の昼下りである。太陽暦でいえば五月四日。若葉薫る陽春の一日だった。爽やかに風は吹き渡り、都大路は春まっさかりというのに、詮舜はこの上なく不機嫌であり、ほとんど絶望していた。

実はこの日、朝廷にはかり知れない勢力を持つという噂の公家を朝から訪ね、叡山再興の願い文を主上に提出して貰おうと思ったのだが、ぬらりくらりと逃げられてしまったのである。この公家も要は信長がこわいのである。朝廷での力など今やたかの知れたものに過ぎなかった。天皇といえども、信長の機嫌を損うことを何よりも恐れていられるのである。公家は責任をのがれることに汲々としていた。

詮舜は足をとめた。

突然だったので、お伴について来た好運は危く師の坊にぶつかりそうになった。

詮舜は叡山を仰いでいた。廃墟と化したお山である。うち棄てられた、首のない屍は、大方烏についばみつくされているだろう。頂上に空しくうち伏している累々たる白骨が、詮舜の眼に明確に映った。

〈お山に帰ろう〉

唐突に詮舜は決心した。見張りの兵たちにつかまり、殺されるならそれもいい。とにかく、自分が居るべき場所はこの京の町ではない。この腐りきった町ではない。あそこだ。あのお山だ。だが身一つで行くわけにはゆかない。食糧や必需品を運んでくれる公人衆はいないのである。少なくとも一年の山籠りに耐えられる物資を、一度でしかも自らの手で運び上げねばならぬ。

その手だてを考えている詮舜の耳に、好運の突拍子もない声がとびこんで来た。

「あれ、あの煙！　なんでしょうか、お師匠さま」

好運のいう通りだった。洛外とおぼしきあたりに濃密な煙が立ちのぼっている。

「火事のようだな」

詮舜は眉をひそめながらそう言った。

それは正しく火事だった。二条城に籠って今やはっきりと反信長の旗印を掲げた将軍義昭に

対する信長の恫喝だった。

信長は部下の織田軍団を、白川、粟田口、祇園、清水、六波羅、鳥羽、竹田に配置し、京を遠巻きにした上で、自らは知恩院に陣をとり、洛外の民家に放火し、義昭を脅迫したのである。和平に応じなければ、洛中にも放火するぞ、という示威だった。

ルイス・フロイスの手紙に言う。

『信長の使者は公方様若し和解せずば兵力を悉して来り、都を焼き火と血に委ねんと決したる旨を告げたり。当市に於て起りたる騒擾の非常なりしことは尊師想像せらるべし。庶民は直に家財を集め、一日に二千の荷物都を出で、兵士等は或は都の中にて或は公道に於て、隊をなし家財を掠奪し、又は槍或は銃を用ひて之を奪ひたり……』

義昭はこの和平の勧告に応じなかった。

だが京の市民たちは、信長の決断を恐れた。

同じフロイスの手紙に言う。

『上及び下の都（上京と下京）の住民は日本六十六ヶ国の頭にして又名誉たる都を焼く時は、被害全国に及ぶ故に極力之を焼払わざらんことを信長に請ひ、上の都は之が為め銀千三百枚を、下の都は五百枚を信長に、三百枚をその部将に贈りたり』

金額は上京の方が多かったが、その態度が違ったという。

『我等の主は無限の御慈悲を以てキリシタン全部の居住せる都の部分（下京）に於ては交渉の手段を解し、謙遜服従及び好情を以て信長を動かすことを得させ給へり。上の都（上京）の人は富み且傲慢なるが故に条件を好くして却つて信長の不快を招き、殊に建築に着手せる宮殿の周壁を破壊したることに依り其怒に触れたり』

そこで信長は、下京に対しては町を焼かないという書付を与え、しかも八百枚の銀は返してよこした。もっともそれは下京の人々の態度がよかったからばかりではない。下京が食糧品、軍需品の市場だったということも考慮されたのであろう。

その夜、奇妙な光景が展開された。

三十人ばかりの男たちが徒党を組み、上京の自分の家や隣家に火を放って廻ったというのである。これはフロイスの記述によるのだが、上京の人々が自分の家、自分の町に放火するわけがない。恐らく信長のはなった忍びの一隊ではなかっただろうか。

とにかくこれで上京の三分の一は、この夜のうちに炎上した。

「上京が燃えています」

夜に入って、好運が目の色を変えてしらせに来た時、詮舜はまだ起きていた。叡山に戻る手だてについて、果てしない思案にふけっていたのである。

「誰ぞ知人でもいるのか」
好運の様子が只ごとでなかったので詮舜は尋ねた。
「いえ」
好運は目を伏せた。美鈴の家は上京なのである。詮舜から見れば、何か隠しているのは明白だった。托鉢の間に友達でも出来たのかと思ったが、深く詮索はしなかった。他に考えることが多すぎた。この好運の身の上についても、あれこれ思案をしていたところだった。
「まあ、お坐り」
ついでに片をつける気になった。好運はいわれた通り正坐したが、どこか落着かない。尻をもじもじさせていた。
「お前のことをずっと考えていたんだよ。これから先どうしようかと思ってね」
好運が怪訝そうな顔になった。
「薬樹院の和尚に頼もうかとも思ったが、今では医師になってしまわれたし……」
「なんでですねん。わし、お師匠さまとおったらいかんのですか」
はっきり不安な表情になっている。
「わしが鈍くさいよって、見放さらはったんですか」
口ぐせの鈍くさいが出た。自分はお師匠さまに棄てられようとしている。その思いだけが好

運の心を占領している。一時、上京の火事のことも、美鈴のことも忘れた。
「そうじゃない。この上わしと一緒にいると、死ぬことになるかもしれんのだ」
詮舜はお山へ戻るという決意を、淡々と語った。織田の兵に見つかれば、即座に斬られることは明らかだった。そんな危険を好運に冒させていいものかどうか、そこが分らないので迷っているのだ。
好運は返事が出来ない。お山に戻る、という一言で、あの凄まじい皆殺しの光景が甦り、忽ち震え上ってしまったのである。織田軍に殺されるということより、あの場の情景がただただ恐ろしかった。あれから一年半。死体はすべて白骨と化しているだろう。だが葬られることのなかった死者たちの怨念は、いまだに全山にたちこめている筈である。焼け落ちた御堂。焼けて枯れはてた杉木立。そして累々たる白骨。どうしてそんなところへお師匠さまは戻っていこうとお思いになるのか。食べ物もない。雨露をしのぐ場所もない。それにやがて厳しい冬が来る。木を焚くことも出来ずに、どうやってあの苛酷な寒さに耐えればいいのか。
「ま、そう心配することはない」
好運のおびえを詮舜は誤解している。捕えられ殺されることへの恐怖だと考えていた。
「豪盛和尚も、もうすぐ甲斐から戻って来られる。とにかく、お前の行く先をきめるまでは、わしはここにいる」

〈違うんや。死ぬのがこわいのと違います〉

好運は師に抗議したかったが、言葉にならなかった。身体が自然にぶるっと大きく震えた。

〈まだ十七になったばかりだ。恐ろしいのは当り前やろ〉

詮舜はそう思い、もう一人の不幸な弟子を思った。

〈生きているか、昇運〉

心ならずも人殺しの破戒僧になってしまった昇運への、深い哀惜の念が湧き上って来た。

〈可哀そうに。ゆくゆくは大阿闍梨になれた男だったのに〉

戦争は多くの者の運命を狂わす魔物である。たとえ生命は拾っても、『信長呪殺行』に取り憑かれたこの若者に、明るい未来があるわけがなかった。無残であり、無念だった。

〈明日は昇運のために護摩を焚こう〉

詮舜はそう思った。

朝もまだ暗いうちに、好運は烏丸光広の屋敷をとび出していた。上京の美鈴の実家へいって見ようと思ったが、織田の兵卒が隙間なく上京一帯をとり囲んでいて、容易には入りこめそうもない。やむをえず下京の耶蘇会の会堂に向った。

ウルガン伴天連は相変らず梯子に登って、まるで賽の河原で石を積むような、たいして役に立たぬ建物の補強工事をしていた。

「鈴さんは、昨夜ずっと教会にいましたよ。私が引きとめておいたんです」

ウルガンの言葉に好運はほっとしたが、

「ついさっき、帰ってゆきました。いくら意地悪をされても、親は親だから、といいましてね」

上京をとり囲んだ織田軍団の兵卒たちのごつい無情そうな顔が脳裏を掠めた。なんとなく不安になった。

「ちょっと様子を見て来ますわ」

と言うと、ウルガンも一緒にゆくと梯子をおりて来た。

上京に近づくと、まず煙が見えた。次いで煙の臭い。人々の叫喚。ぱちぱちと木のはぜる音。

さっきまでただ包囲していた織田兵たちが、昨夜の火事で焼け残った家々に、片っぱしから放火していた。富裕な商家が多いので、火事に強いようによく塗り籠められた倉が多かったが、織田兵たちはその扉を壊し、掠奪した上で火をかけている。無事な倉は一つもなく、上京一帯が悲鳴をあげて逃げまどう町衆たちの家族と、その荷物を片っぱしから奪い取る兵卒たちとでごった返し、煙が渦巻いていた。

好運とウルガンは走った。美鈴の実家も燃えさかる火の中にあった。
「美鈴はーん」
「鈴さーん」
かわるがわる名を呼んだが、この叫喚と怒号の中できこえるとは思われない。
不意に、茶色いかたまりが好運の胸にとびついて来た。
小猿だった。おびえきって、ぶるぶる震えている。
「お前か。美鈴はんはどこや。知らんのか」
小猿は益々おびえたように、きっきっと啼き、燃えさかる家の横手の空地を見た。思いがけず歯をむいた。
〈何かあった！〉
好運は空地へ走った。ウルガンも続く。
美鈴はそこにいた。
まっ白な顔を天に向け、ガラスのような目を瞠いている。
下半身は裸に剝かれ、髭面の雑兵が貫いて動いていた。
きっき。
小猿が雑兵の顔にとびかかった。雑兵は手を振ってはじきとばす。

好運は燃えかすの丸太を拾った。走り寄ると、雑兵の頭にふりおろした。雑兵が腕を上げて丸太を受けた。
「貴様」
美鈴から離れて立った。
美鈴の稚い秘所が、好運の眼を射た。血に塗れている。雑兵の陽物も血塗れだった。隠そうともしない。異常な巨根だった。
「いいところを邪魔しくさって」
長い陣刀を抜いた。一歩、近づいた。好運は丸太を構えながら、死を覚悟した。
その時、雑兵の顔が恐怖に歪むのを、好運は見た。
背後から声がかかった。
「どうした？」
振り返ると騎馬の武将である。側近らしい騎馬の鎧武者が、まわりをかためている。武将は鎧をつけていない。
〈信長だ！〉
好運は直感した。
「お答えせんか、売僧」

側近の一人が、鞭で好運の肩を殴った。激痛と共に、ひどく理不尽な感じが襲った。
「こ、この外道……子、子供を、犯しよったんや」
好運は雑兵を指さした。
美鈴を抱き起していたウルガンが、沈痛な声で言った。
「殺して、犯しました」
あッと、好運は見た。
がっくり仰向いた美鈴の首に、黒い鬱血した指の痕があった。
ウルガンがそっと美鈴の目を閉じてやった。
「こ、こ、この……」
好運は再び丸太ン棒で雑兵を殴った。
ぐらりと揺れたが、倒れない。よほど屈強な身体らしかった。
「長巻」
信長が言った。側近の一人が、持っていた長巻を渡す。馬を三歩進めると、片手で長巻を振った。
「ぎゃーっ！」
絶叫と共に雑兵が前を抑えてがくっと膝を折った。

同時に好運の前に何かがとんで来て落ちた。ばかでかい陽物だった。睾丸もついたままだ。
次いで信長が好運を見た。射抜くような鋭さである。
「織田の兵を外道と呼んだな」
「外、外道……にちがいないわ。なんぼでもいうたるわ。……この子は天使やった。天使のように浄らかで、マリアさまのように、優しかったんや」
「坊主がマリアさまというのか」
信長はおかしそうに天を仰いで笑った。側近たちも笑う。
「では一生クルスを負ってゆけ」
長巻が二度閃いた。
好運は左頬に鋭い痛みを感じた。さわってみて、そこに深々と十字が刻まれたことを知った。
信長は高笑いと共に去った。
奇妙にも好運の心に、信長に対する怒りも怨みもなかった。もっと奥深い、世の成行きについての、大きないきどおりと悲しみがあった。氷のように冷たく、しかも煮え滾っているような思い。好運は、自分が今、この一瞬に変ったのを感じた。もう何も恐ろしくはなかった。
「ナーマク・サーマンダ・バーサラナン・センダンマーカロシャナ・ソワタヤ・ウン・タラタ・カン・マン」

無意識に合掌し、無意識に真言を称えていた。

それは一人美鈴の鎮魂のためではなかった。この火事で生命を落したすべての人々、いや、この不条理な戦乱の時代に、心ならずも生命を奪われたあらゆる人々への鎮魂のためだった。誰よりも好運自身が、そのことをはっきり感じていた。

真言を和する声があった。

詮舜だった。上京の火事の様子を見に来て、好運の動きの一部終始を見ることになったのである。

「お師匠さま！」

好運は問いかけた。

「頬にクルスを刻んで、大阿闍梨になれるもんでっしゃろか」

好運にとっては、一生を決する問いかけだった。

「お前がなれると思えば、なれる」

詮舜は即座に言い、逆に問いかけた。

「どうや。なれると思うか」

「思います」

きっぱりと答えた。

「お山へお伴しますわ、わしも」

詮舜は黙って頷いた。

将軍義昭はこの時、正親町天皇のとりなしで、一旦、信長と和睦したが、七月、二条御所を棄てて宇治の真木島城に走り、反信長の兵を挙げた。ここが破られると、三好義継の居城である河内国若江城に入る。だがこれで将軍は追放されたことになり、ここに室町幕府は事実上消滅した。

左顧右嘯

昇運の長嘯は立山を次第次第に変えていっている。

昇運自身はそれを知らない。

呪法としての長嘯は、ただに招魂の呪術というだけではない。実に様々なものを呼ぶ働きをする。

例えば鼠を呼ぶ。趙侯という術者が、貯えた白米を鼠共に盗まれたので腹を立てて、地べたに刀で線を引いて牢獄となし、東に向って長嘯すると、夥しい鼠がぞろぞろ集まって来て、みなこの牢獄の中に閉じこめられてしまった、という。

雀を呼んだ例もある。上虞の孫浚の家の奴僕がこの術をよく使い、空に向って長嘯すれば群雀来り集ったという。鳥寄せである。

この男はまた蚊も呼んだらしい。夜、蚊を呪するに悉く側に死んだ、とある。

水中の精怪を呼んだという例もあり、風や雲を呼んだともある。雲を呼べば、当然雨も呼ぶことになる。

そういえば、今年の立山は、異常に雨が多かった。

一日、例の老いた山人が昇運の前に立った。なんとなく困ったような顔をしている。

「その後どうだ」

と山人が訊く。

「同じです」

と昇運は答えた。地獄谷の亡者らしい者たちとの接触については、人に伝える気がなかった。第一、まだ感触だけで、姿を見たわけでもなく、言葉を交わしたわけでもない。

『視鬼』或いは『見鬼』という言葉がある。まず鬼を見なければならぬ。見てこそはじめて鬼を使うことが出来る。自分はまだその段階に達していないと昇運は信じていた。

「本当かね」

山人はきなくさい顔をした。

「お主の顔が変ったぞ。その顔は、鬼を知った顔だよ」

昇運はどきっとしたが、頑なに否定を続けた。

「まあ、それはいい」

山人は手をふってその話題をうち切った。そして立山における異変の数々を語った。

「鬼を呼びだすのはいい。他の余計なものは呼びださないようには出来ないか」

昇運は困惑した。これは自分のまったくあずかり知らぬことである。立山の天候が悪くなり、鼠が急に増えたといわれても、それが長嘯を原因としたものかどうか分るわけがないではないか。

山人は益々困ったように、耳なぞひっぱってみたりしている。

「それはそうだ。だがわしには分るのだよ。それらがすべてお主の長嘯のせいだということがな。いや……」

山人は手をあげて昇運の抗議を抑えた。

「わしは文句をいいに来たわけじゃないんだ。そうではなくて、もっと確実に、死者の魂のみ呼び出せる法を教えようと思って来たんだよ」

「どうして今までそれを……」

昇運の声に非難する臭いを嗅いだらしく、山人が珍しく照れたように微笑った。

「人間というものは、何も彼も、根っきり葉っきり他人に伝えるのが、いやなものなんだよ。つまりはけちなんだね。最後の最後って奴は、そっと自分だけにとっておこうとする。それが人間のさがなのさ」

そうして山人は、その最後の最後という秘術を伝えてくれた。聞いて見れば、なんだ、と思うようなつまらないことである。それ嘯を行う際に左を見るようにしろ、そうしながら右に向けて嘯を発するのだという。

「これを左顧右嘯という」

『後漢書』及び『神仙伝』に劉根という方術士のことが書かれている。その劉根を太守の史祈という者が妖妄として捕え、お前の術は何だと問い、自分の前でその術を見せろと迫った。

劉根は答えた。

「よく人をして鬼を見せしむ」

そして左顧して嘯した。忽ちこの太守の亡父や近親数十人がみな反縛して太守の眼前に出現した、という。劉根の嘯は亡者の魂を招いたというよりも、部下の鬼兵に命じて亡者を現出させたのである。この場合の嘯はその鬼兵に命ずる合図の声だった……。

そして山人は、実際の左顧右嘯の方法を、ことこまかに伝授してくれた。

その晩、昇運は地獄谷に立った。

山人の伝授の細部を一つ一つ確かめるようにしてくり返すと、やがて気を入れて長嘯を始めた。

荒寥たる谷間に熔岩がとけ、熱湯の奔出する轟音が鳴り轟く中を、昇運の長嘯はその轟音に少しも邪魔されることなく、それこそ轟音の間隙を縫って、深く長く鳴り渡ってゆく。

昇運は、左を向き、地獄谷に横顔をさらすようにしている。左を観ながら、右側にいる者にきかせる心で嘯している。

高く低く、強く弱く、長嘯は続く。何時間も絶えることなく続いてゆく。

やがて昇運は左顧も右嘯も忘れた。忘我の中で長嘯に没頭する。だが昇運はいつの間にか本能的に左顧右嘯しているのだった。

ざわざわ

ざわざわ

音が聞えてくる。いつもの亡霊の足音がきこえてくる。だが今夜はちがう物音がまじっている。それはかしましいばかりの夥しい人語だった。何か果てしなく喋り合っているらしい。だがその意味を摑むことは出来なかった。嘯を途切らすことなく耳を澄ます。同じだった。矢張り言葉の意味を摑むことは出来ない。昇運は焦った。何とかしてこの耳で彼等の語らいを聞きたかった。長いこと試みて、諦めが来た。やはりまだ修行が足りないのである。もっともっと術の力を増すことが出来れば、いずれは亡者たちの話の内容を知ることも出来るだろう。肩に入っていた力を抜いた。一足さがるような感じで、平穏さが感じられる嘯に変えた。

その時、突然、それが見えた。

正しく亡者たちだった。それも戦いの亡者だった。半分以上の亡者に、首がなかった。胴体と手足だけなのである。首のあたりから、ごぼごぼというような音をたてているのは、何事かを語っているに違いなかった。首がないから、口がないから、語っていることが分らないのである。

顔も手足も身体も、真黒な亡者がいた。これは焼き殺された亡者たちである。裏も表も分らないほど焼けただれた者もいた。彼等のいうこともまた、よく分らない。口が焼けただれてしまったからであろうか。

木乃伊のように痩せ細って干からびたような者は、干殺しにされた亡者にちがいない。飢え死、渇え死した亡者である。彼等の声もまるで囁くようでよく聞えない。

盲がいる。片目のとび出したのがいる。頭の凹んだの、鼻や耳の削がれたのがいる。手足や指のないのは無数にいた。四肢がなく、胴体だけで、芋虫のように身体をくねらせることしか出来ない者もいた。

不思議に、気味悪くはなかった。首もなく、手足がなくても、それはそれで完全だった。充足していた。それぞれが、己れの個性（？）を強調し訴えているかのようだった。

更に不思議なことに、彼等は美しかった。無残は無残なりに、美しく、そして悲しかった。

なんともいえぬ哀しみが、昇運の心を満たした。

どうしてこれらの亡者たちは地獄にいるのか。地獄に堕ちるべき、どのような悪業をしたというのか。いや、果してこの世に、人を極楽に導く善行と、地獄につき落す悪行との区別があるのか。みんなそれなりに懸命に生きようとして来ただけではないか。成行きで悪業を犯し、成行きで善行を積んだ……ただそれだけのことなのではないか。だから、見てみるがいい。彼等地獄の住人の美しさを。

〈そうじゃないんだよ〉

どこかで囁きが聞える。誰の声かは分らなかった。そして誰もが語り手だと云ってもおかしくはなかった。

〈何がそうじゃないんですか！〉

昇運は抗議する。自分は間違ってはいない。正しくこの地獄の住人たちは、美しい。

〈だからそれは違うんだよ〉

また声がする。さっきの声と同じかどうかも分らない。

〈あんたは間違っている。あべこべなんだよ。地獄にいるからこそ、わしらは美しいのだよ〉

はっとした。これは昇運が思ってもみなかった解釈だったのである。

〈地獄にいるからこそ美しいですって?!〉

〈きまってるじゃないか。地獄こそ人間の棲家なんだからね。人間だから美しいんじゃないか〉

昇運は戸まどっている。

〈極楽浄土は美しい必要なんかないじゃないか。それは平和で倖せな世界、退屈な静穏の世界なんだろ？　それ以上、何が必要なんだね。灰色だって、まっ暗闇だって、それだけのものがあれば沢山じゃないか〉

声は嘲るように高くまた低く続いた。

〈地獄はそうはいかない。あんたも知っての通り、生きることの辛い世界だ。平穏もなければ倖せもない。正しく今の浮世と同じだよ〉

声は切々という感じになった。

〈だからこそ美しくなくてはならないのさ。その美しさを、わしらはせめてもの誇りに思う。地獄にこそ誇りは必要なんだ。誇りがなければ、生きてゆけない世界なのだよ〉

声は今や鬼哭啾々ということが出来た。なんとも切なく辛く、昇運の胸に滲み入り、かきむしるのだった。

川内根切り

知一郎とお蘭は長島輪中の堡塁に立って、茫然と川を眺めていた。

天正二年七月。

また一年たっていた。知一郎とお蘭の長島暮らしも三年目に入っている。

昨年の九月。知一郎は生涯で二度目の合戦を経験した。将軍義昭を追い、永年の宿敵浅井・朝倉の連合軍を滅ぼした信長は、鋒を変えて一気に長島をはじめとする川内輪中地帯の攻略にとりかかったのである。

信長自身が桑名に出陣、佐久間、羽柴、蜂屋、丹羽など圧倒的多数の軍勢を投入して、先ず西別所（現在桑名市）にたて籠る一揆勢を破り、十月に入って東別所に進み、伊坂・萱生・赤堀・多奈閉・桑部・南部、千草・長深などの村々を激しく攻めたててこれを下した。要害の矢田（桑名市）に砦をつくり滝川一益を配した上で、一気に川内を下そうと、十月二十五日、信長自身北伊勢から出馬した時、川内一揆衆が強烈な反撃に出た。

『信長公記』のこの部分の記述は簡にして要を得ているので、引用させて貰う。

『十月廿五日、信長北伊勢より御馬を納れられ、左は多芸山茂りたる高山なり。右手は入川（長良川の入江で淵深いあたり）足入多くあって茂りたる事大方ならず。山下に道一筋めぐり廻って節所（要害）なり。

信長のかせられ候を見申し、御跡へ河内の奴原、弓、鉄砲にて山々先々へ移りまはり、道の節所を支へ、伊賀、甲賀のよき射手の者共馳せ来って、さしつめ引つめ散々に射たをすこと際限なし。雨つよく降って、鉄炮は互に入らざる物なり。（中略）信長公の一長林新次郎残し置かせられ、数度追払ひ、節所のつまりにては相支へ、火花をちらし相戦ひ、林新次郎ならびに家子郎党枕をならべて討死なり。

林与力に賀藤次郎左衛門と申す者、尾張国久々取合ひの内、ここはといふ時にはよき矢を仕候て、人々存知たる射手なり。此度も先へ懸る武者をば射倒し、林新次郎と一所に討死。名誉といふこと愚なり。其日は午刻より薄暮に及び、もってのほか風雨にて、下々人足など寒死候き。夜に入って大柿城まで御出。十月廿六日岐阜御帰陣なり』

要するに織田軍団の惨憺たる敗北であり、信長は多くの戦死者と凍死した者まで出して、生命からがら岐阜へ逃げ帰ったのであった。

この十月二十五日の緒戦から知一郎もお蘭も参加している。川内側の一斉射撃は完全に織田

軍団の意表をついた。山下の一本道をえんえんたる縦隊で進んで来る信長軍を、知一郎は台地の上、深い草叢の中に完全に身を隠して狙撃したのである。冷たい雨が降りしきっていて、将も兵も顔を伏せ、台地の上に目をやっていなかった。

とり返しのつかぬ油断といっていい。こうした地形では必ず台地の上に斥候を出すのが定石である。この手の地形は北支にも多く、信長軍のように山際の道を辿る日本軍は、しばしば山の上からの手榴弾攻撃に曝され、死傷者を出したものだ。だから斥候を出す。斥候が登れないほど切り立った山の場合は、指揮官は絶えず山の上を見ている。ちらりとでも影が動いたと思ったら、直ちに先制攻撃の猛射をあびせかける。同時に、部下を安全な場所に退避させなければならない。

旧暦十月廿五日、太陽暦でいえば十一月末の、凍えるような雨が、この惨劇を生んだといっていい。

緒戦の銃撃戦は一揆方の完全な勝利だった。伊賀・甲賀の一向一揆衆から派遣された、選りすぐった狙撃手の功績も大きかった。雨で大方の鉄砲隊の火縄も火薬も濡れしょびれ、物の用に立たなくなった時でも、この精妙な狙撃手たちは射撃を続けることが出来た。火薬と火縄と火種の保存について、独特の秘伝を伝えていたからである。

それでも雨が激しくなるにつれて、戦闘は弓と刀槍による白兵戦になった。

織田軍団はこの種の白兵戦に弱い。常に大軍で戦う習慣がついているために、鉄砲の数に物をいわせ、集団の力に頼るようになり、一人対一人の槍、長巻、刀をふるっての闘いにねばりがなかった。白兵戦は所詮一人一人がねばり強い方が勝つ。自明の理である。この点でも、豪雨が織田方に不利に働いたことになる。

白兵戦は知一郎の独壇場だった。その凄まじい戦いぶりは敵も味方も舌をまく態のものであり、後々までの語り草となった。重い槍を軽々とふり廻し、叩き伏せ、突き刺し、長巻のように薙ぎ倒す。休みなくその動きを繰り返しながら、前へ前へと進むのである。お蘭の気苦労は大変なものだった。あんまり知一郎の前進の速度が早いので、味方が追いつけなくなることが屢々あるのだ。当然、知一郎は敵中で孤立することになる。いかに知一郎が強力でも、敵中に孤立して生きのびられるわけがない。その知一郎の進撃を抑え、敵に囲まれれば半弓の速射で知一郎を救い出すのがお蘭の役割だった。お蘭がいなければ十中八九まで知一郎は死んでいたに違いなかった。

戦いが終ってから、くたびれ果てたお蘭は懇々と知一郎に説教した。

いくさは独りで闘うものではないこと。

常に味方を視野の端しに入れて闘うべきこと。

休息をとる時は、常に楯となる物の蔭に入り、身を屈めること。

知一郎はうんうんと頷いていたが、何にも分っちゃいない、とお蘭は判断していた。この若者は危険音痴である。肉体が強壮すぎて、危険に対して不感症になっている。

〈えらいものしょいこんじゃった〉

これからの戦闘のことを考えて、お蘭は溜息をついた。そのくせ、この手間のかかる男が、なんともいとしかった。丸一日の戦闘にくたびれ果てて、仲間の者が死んだように眠りこけている時に、三度ものしかかって来る呆れ返った若者が、限りなくいとおしかった。

そして一年たった今、お蘭と知一郎は、呆けたように川を見つめている。

そこには川はなかった。

あるのは舟ばかりだった。

〈一体全体、どこからこれだけの舟を集めて来たんだろう〉

お蘭がそう思ったほどの数である。

この日、天正二年、七月十五日、信長は前二回の敗戦を徹底的に研究し、今回は海上封鎖作戦をもって川内を襲ったのである。

信長がどれほどの舟を集めたか、『信長公記』の記述を見てみよう。

『十五日に、九鬼右馬允（嘉隆。志摩の九鬼水軍の頭梁）あたけ舟（安宅船。軍用の大船）、滝川左近・伊藤三丞・水野監物、是等もあたけ舟、嶋田所助・林佐度守両人も囲舟を拵へ、其外浦々の舟をよせ、蟹江（愛知県海部郡）・あらこ（名古屋市中川区荒子町）・熱田・大高・木多（東海市横須賀町木田）・寺本・大野（常滑市）・とこなべ（常滑）・野間（知多郡美浜町野間）・内海（知多郡南知多町）・桑名・白子（鈴鹿市）・平尾（四日市市）・高松（三重県三重郡川越町高松）・阿濃の津・楠（三重郡楠町）・ほそくみ（細頸・松阪市松崎浦町）、国司お茶筅公、垂水・鳥屋野尾・大東・小作・田丸・坂奈井・是等を武者大将として召列れられ、大船に取乗り候て参陣なり』

『此外尾州の舟数百艘乗入れ、海上所なく……』

『此外勢州の舟大船数百艘乗入れ、海上所なく……』

ここに引用したように、『海上所なく』をしきりに繰返しているのは、実感だったからだろうと思われる。九鬼水軍の使用した安宅船とは、乗員十余名、片舷二十五挺立ての大型船で、大砲も備えていたようだ。

信長のすることは、中途半端ではない。文字通り川内の水面という水面を、舟で埋めつくしてしまったのである。

これは川内の一揆衆に壊滅的な打撃を与えるものだった。

今までの川内一向一揆衆の強みは、その河川の利用の巧みさと、小舟を使っての機動性にあ

った。いわば海上ゲリラ戦である。それが、頼みとする川の表面を、すべて舟で埋められてしまっては、ゲリラ戦もへったくれもない。とにかく自分たちの小舟を動かすことが全く不可能になってしまったのである。

舟が使えないということは、食糧弾薬を補給することも出来ないということであり、七つの島に分れた（すぐ五つの砦に減ってしまったが）一揆衆の連絡さえとれないということである。攻撃するにしても、こう分断されていては、小人数での戦いしか出来ない。結局は身動きのとれぬままに籠城にならざるをえなかったわけである。つまりは篠橋・大鳥居・中江・長島・屋長島の砦に全員が逃げこんで籠城ということになった。一揆勢がこれらの砦に逃げこむ時には、織田軍は鉄砲も射たず弓も射ない。砦の人数が増えることは、大歓迎なのである。その分だけ急速に食糧が減ることになるからだ。ただ包囲を強化し、時々大鉄砲を射って櫓をぶち壊し、女子供をおどかすだけで、敢て決戦を挑もうとはしない。正に典型的な干殺し作戦（餓死作戦）である。

さすがの川内一向一揆衆がこれには音をあげた。大鳥居、篠橋の砦から『御赦免のお詫言』つまりは降伏の申込みがあったが、信長は断乎として拒否している。

信長の意図は叡山の場合と同様だった。皆殺しである。川内一向一揆は皆殺しにしなければならない。それが全国に一揆を呼びかけた石山本願寺へのみせしめになる。いや、単にみせし

めばかりではなく、それは信長の欲求でもあったのだろうと思う。一人一人をとってみれば、一文の値打ちもない、虫けらにもひとしい下人たちが、天才信長の『天下布武』の前に立塞がるとは何事であるか。不遜であり、無礼であり、おぞましい越権行為である。地べたを這う虫けらが、貴人信長の足を刺したようなものだ。踏みつぶし踏みにじり、一匹残らず殺してくれる！　あの世でもう一度、自分たちの分際というものを考え直してみるがいい。そうした苛立ちと憎悪の念が信長の心中に燃えさかっていたことは間違いない。

この三カ月にわたる川内一向一揆攻撃中の信長の手紙を、藤木久志氏が並べられた表がある。信長の気持が極めてストレートに伝わってくると思われるので、引用させていただく。

七月二十三日（開戦以来十二日）
種々と一揆ども懇望つかまつり候へども、この刻、根切りにすべきことに候の間、その咎を免ぜず（河尻秀隆宛）

七月二十四日
河内一揆退治について在陣……ことごとく存分をもって申付け、長嶋一城にいよいよ詰陣候（筒井順慶宛）

七月二十九日
篠橋といふ所、また大鳥居、この両所、昨今いよいよとりまき（詫びを入れること）候。

両所ながら兵粮一円になきこと、たしかに相聞こえ候。五、三日までは、相延ぶべからず。……これをさへ攻め崩し候へば、根本の長嶋、同前に候。長嶋のことも、おもひの外、雑人ばら逃げ入り候て……はや城中に男女の餓死、ことのほか多きよし（明智光秀宛）

八月五日

大鳥居といふ所、三日に落城候。首数のこと注するに及ばず（この日、男女千人余りが斬り殺されている）（長岡藤孝宛）

八月七日

河うち敵城ども……男女ことごとく撫切りに申付け候。身を投げて死に候ものも多く候よし申し候。願証寺（長島坊願証寺。河内御堂ともいう。川内一向衆の中心）、これも落居ほどあるまじく候。色々わびに音参し候。なかなか取り上げまじ（河尻秀隆宛）

八月十七日

篠橋落居以来、いよいよ押し詰め……大坂坊主（顕如のこと）迷惑せしむ（長岡藤孝宛）

僕は初めてこの表を読んだ時、思わず鳥肌が立って来たことを白状する。手紙の内容の凄まじさにではない。その語り口の明るさ、陽気さに、である。こんなに陽気に、数万の人間の殺害について語れる男の心とは、どんな心なのか。それを思って慄然としたのである。

天正二年九月二十九日。

長島の砦は遂に降伏の決意を固めた。食糧はとうに底をつき、「過半餓死仕候」と『信長公記』に書かれたような状態だった。

知一郎には別してこの食糧攻めがこたえた。身体の大きな者は、大体こうなる。身体を動かすのも大儀で、終日寝ころんでばかりいた。お蘭が来て、知一郎の口を吸った。ものうげに知一郎が言った。

「お蘭さんは……元気やなァ」

「あんたが意気地がなさすぎるんだよ。さァ、起きて」

「無理や。起きたら死んでまう」

「起きなきゃ死ぬんだよ。今日じゅうに砦を出なきゃならないんだから」

「いよいよ降伏でっか」

知一郎もおおよそは知っている。

「けどどうやろな。無事に砦を出れるのかいな」

「無事じゃないだろうね。信長のことだもの」

「それでも出る？」

「だからあたしら傀儡子は、終り頃に出ることにきめたのさ。さァ、起きて。少し動いておか

ないと、いざという時、ひどい目にあうよ」

知一郎はひだるい身体を起した。

「無理や。とても歩けそうにないわ」

「鎧をお脱ぎ。着物も何も彼も」

「すっ裸で逃げるんか」

知一郎は仰天した。

「それじゃ襲いかかられたら、ひとたまりもないやないか」

「歩けないよりましだろ。槍を一本、杖のかわりに持ってゆくさ。あたしも裸だよ」

「あかん。男どもが黙ってへん」

「男がみんな、知さんみたいに助平なわけじゃないんだよ」

「助平でない男は、男やない」

「信長をごらん。あいつは女には一切興味がないんだってよ」

「だから、あいつは男やない。人間でもない。自分で第六天の魔王言うとるそうやないか」

信長は自分がまさしく魔王であることを、この長島の降伏で証明することになった。

降伏した一揆勢が、長良川から引きこまれた掘割から、舟に乗って退散することを許してお

いて、実際には舟に乗りこむのを待って鉄砲の一斉射撃を浴びせかけたのである。さながら阿鼻叫喚の地獄図になり、大方は射殺され、或いは岸に泳ぎついたところを斬り殺された。それはまるで射的だった。人間を人形がわりにした射的だった。織田方の兵士たちは、楽しみながら一揆勢を射ち殺した。

「もぐれ！」

一斉射撃が先頭の一揆勢を射ち倒した刹那、知一郎は無意識にお蘭を水の中に押し込み、自分も水底まで潜った。傀儡子の頭が同じ命令を喚き、素っ裸の傀儡子一族は全員、武器を持ったまま水中に沈んだ。

一瞬だが知一郎はどちらに泳いでゆくべきか迷った。織田方に向って進むか、退いて砦にとって返すべきか。砦に引き返すことは無意味だった。傀儡子一族だけで砦が守れるわけはなく、忽ち皆殺しになるのは自明の理である。進むとしたら織田軍の方向しかない。それも出来るだけ信長のいる本陣の近くに浮き上るのがいい。

知一郎は夥しい旗差物を並べたてた信長の本陣の位置を記憶に辿り、その方向に向って片手で必死に水をかいた。片手はしっかりとお蘭を抱いている。周囲の水の中を見廻すと、傀儡子一族は全員知一郎と同じ方向に泳いでいる。

倒れこんで来る死人・手負いで、水はみるみる鮮血に染まり、その人々で水面が蔽われた。

それがはからずも弾丸よけになってくれた。傀儡子たちはその下を泳いでいるからだ。だが同時に、その身体が邪魔になって、二度と水面に浮かび上ることは出来ないのではないかと云う恐怖が、知一郎の心をよぎった。

〈ままよ〉

と知一郎は思った。弾丸に当って死のうと、溺れ死しようと、死に変りはない。今はただ息をつめて、泳ぎに泳ぐしかなかった。

知一郎にかかえられたお蘭が、がぼりと水を呑んだ。息が続かなくなって来たのだ。

〈我慢しろ　お蘭！〉

声をかけるかわりに、かき抱いた腕に力を籠めた。

いつか頭上に、一揆勢の死体がなくなっている。織田方の水面に近づいた証拠だった。

お蘭がもがきはじめている。気管に水が入ったに相違なかった。

〈あと一息〉

知一郎はお蘭の口を捕え、息を吹きこんでやりたかった。だが知一郎の方も息が尽きかけていた。

不意に、水をかいている手が、固い土にぶつかった。岸に着いたのである。

知一郎は素早く水中を見廻し、傀儡子一族がついて来ていることを確かめると、急速に浮上していった。

水面にぽかりと顔が出た。

お蘭が笛のような音をたてて、空気を吸っている。まわりで同じ音がたて続けに上る。傀儡子の仲間たちが浮上したのだ。

狙い通り、そこは信長の本陣に最も近い岸辺だった。

〈行くぞ！〉

知一郎は全身の気を集めて吼えた。

「うおーっ！」

空腹も、全身の倦怠も、消えていた。生き伸びようという意志と、欺し討ちを計った織田軍への火のような怒りだけが、全身に燃えていた。

知一郎は一息で岸にとび上り、眼前に呆けたように立っている織田方の鎧武者たちに向って槍を振った。

槍は正確に五人の鎧武者の顔を斬った。鎧武者の最も防備の薄い部分である。思わず顔を蔽う鎧武者を、体当りで弾きとばすと、知一郎はびゅんびゅん槍を振りながら、すぐ近くに見える信長の本陣に突進した。

横に廻ろうとした武者が、長巻に脚を払われて横転した。お蘭である。知一郎に並ぶと叫ん

だ。

「皆と一緒よっ、知！」

喚声が上った。全員、岸にはね上った傀儡子一族が一団となって織田軍に突入したのである。それは異様な光景だった。

男も女も全裸で褌一本しめていない。その集団が槍・長巻・大太刀の武器だけをかたく握りしめて、鎧兜に身をかためた武者たちに襲いかかってゆくのである。重い鎧をつけた武者たちの動きは鈍く、素っ裸の傀儡子たちの軽捷さに及ぶべくもない。みるみる斬られ、刺され、算を乱して崩れた。

織田方は完全に不意をつかれた。彼等は一揆勢が、食糧の欠乏によって、歩くのがやっとだろうと思いこんでいた。極限まで追いこまれた人間の、体力を越えた気力の凄まじさを知らなかったのである。

更に全裸というのが効いた。鎧をつけた自分が、素っ裸で秘所まで露わにした男や女に殺されるわけがない。なんとなくそんな気になってしまうのである。本気で闘うべき相手ではない。或いは、こんなのと本気で闘っては武士がすたる。そんな甘い考えが、傀儡子たちの殺人に慣れた刀槍によって、みるみるつき崩されていった。銃撃に生き残ったワタリの男たちも傀儡子族の果敢な闘いぶりをまのあたりに見て奮起した。傀儡子たちに倣って、着ているものをかなぐり棄て、全裸に刀槍をふりかざして、一斉に織田軍の本陣を襲った。その数、七、八百人という。驚いたことに、この襲撃で織田軍に戦死者が続出した。『信長公記』を引こう。

『九月廿九日、御詫言申し、長嶋明退き候。余多の舟に取乗り候を、鉄炮を揃へうたせられ、際限なく川へ切りすてられ候。其中に心ある者どもはだかになり、抜刀ばかりにて七、八百ばかり切て懸り、伐り崩し、御一門（信長の親戚衆）を初め奉り歴々（名ある武士たち）数多討死。小口へ相働き留守のこやこや（無人の小屋）へ乱れ入り、思程支度仕候て、それより川を越し多芸山・北伊勢口へちりぢりに罷退き、大坂へ逃入るなり』

大坂とは石山本願寺のことを言う。全裸の一揆衆の凄まじい働きが目に見えるようではないか。

知一郎とお蘭は、こうして傀儡子一族と共に無事石山本願寺に辿りつくことが出来た。

思わぬ不覚をとった信長は怒り狂い、残った中江・屋長島の砦の周囲を厳重に柵で囲み、四方から同時に火を放って、一揆勢男女二万人を一人残らず焼き殺した。凄惨の一語に尽きる。

長島坊願証寺五代の証忍・顕忍兄弟も戦死し、ここに川内一向一揆は終る。信長の『天下布武』の野望に対する、実に四年にわたる勇猛果敢な抵抗だった。川内一揆の名は、権力者の野望に対する、自由な民衆の熱い戦いとして、人間の歴史ある限り、永く語り続けられると思う。

叡山再見

爽やかに風が渡る。

天正八年、春四月。

無残に焼けただれた樹々も芽を吹き、自然の生命の強靱さを教えている。

ここ、比叡の頂上でも、朝晩の冷え込みこそきついが、日中は汗ばむほどの暖かさで、薫る風が肌に快かった。

何故ともなく胸が騒ぐ。やるせない思いが心を嚙む。僧侶の身だからといって、例外ではない。ちらりと、美鈴の面影が掠めた。生きていれば、十六になっている筈だ。さぞかし人々の心をかきむしる、美しい花になっていたことだろうと、思っただけでも吐息が洩れる。そんな無垢な美しさを、たった九歳で滅してしまう無情な世の中の流れが、好運には今もって不可解だった。

だが、不可解なものは不可解なままで、理解しなければならないということが、好運にもな

んとなく分って来た。

好運は既に二百日の回峯修験行を果たしていた。一昨年の天正六年、百日回峯を満行した時、好運はもういつ死んでもいい、と思った。兄弟子の昇運と同じ修験を果たしたのである。好運は廿二歳になっていた。

〈これで鈍くさいわしも、やっと一人前の僧侶になれた〉

沁々とそう思った。そして、この段階でお山を降りなければならなかった昇運の不運を思った。師の正教坊詮舜は、一切昇運の話をしない。だが、心の片隅にいつでも昇運がいることを、好運は感じている。

元亀四年五月、師と共にひそかに叡山に戻った好運を待っていたのは、文字通りの地獄図だった。建物は一宇も残さず焼け崩れ、地べたは白骨で足の踏み場もない。焼け焦げた樹々に、烏の数ばかり異常に増えていた。

「先ずお骨を拾わにゃならんな」

詮舜がそういった。

その日から、二人のお骨拾いが始った。ただ拾い集めるのではない。絶え間なく、鎮魂の経を唱えながら、お骨を一つ一つ、綺麗に拭き清めては運ぶのである。

「手を抜いたらあかん。お骨は怨み怒ってはる。それを鎮めるように、一つ一つ、優しゅう拭

いてあげないかん。怨みも怒りも、所詮この世のことや。はかないこの世の、かりそめのことや。何も彼も忘れて、成仏しなはれや。そない言いもって、優しゅう綺麗にしてあげるんや」

そんな悠長なことをしていたら、ほとんど全山に散らかったお骨のすべてを集めるのに、何年かかるか見当もつかない。

「かまへん。何年かかってもええ。お骨は待ってくれはる」

詮舜は更に恐ろしいことを言った。

「ええ加減なことしよると、お骨の思いがお前に残ることになるぞ。お骨の怨みと怒りが、お前に乗り移るんや。そないなったら、とても正気ではおれへんやろなあ。まず間違いなく狂うで」

好運は腹の底からぞっとして、師に言われた通り、叮嚀に優しく、鎮魂の思いを籠めてお骨を処理していった。

倖いなことに、この頃には明智軍団の見廻りも絶えていた。いつまでもこの怪異に満ちた山を、それこそ白骨を踏んで巡察することは、合戦の中で死に慣れたいくさ人たちにとっても、さすがにこたえることだったのだろう。それにこんな山に登って来る物好きがいるわけがなかった。食糧もなく、雨露をしのぐ場所もない。白骨をしとねに、何日も野宿出来るほど神経の太い人間がいるとは思えなかった。坂本さえ抑えておけば叡山に人の入ることはない。明智の

兵たちはそう信じていた。

確かに今の叡山で暮そうというのは、気違い沙汰だった。暮す、ということだけのために、莫大なエネルギーを必要とするのである。ここには何一つなかった。小屋を建てようと思えば、柱も板もすべて人力で運び上げなければならない。釘も道具もない。そして何とか小屋は建ったとしても、今度は食糧がない。せめて月に一度は、それもまた人力で運ばなければならない。水だけはあったが、それさえも谷底まで降りていって汲み上げ、山の上まで運ぶのである。詮舜や好運のように、その作業の一つ一つを修行だと思っている男たちにしか、出来ることではなかった。

かたつむりが這うように、それでも徐々に、徐々に、白骨の整理は進んでいった。それがほぼ終ったのは、天正五年の半ばである。四年の歳月が流れていた。

この間に、好運は奇妙なことに気がついた。鳥が啼かないのである。叡山の鳥は樹々や焼跡にとまったまま、黙然とただただその不吉な姿を曝していた。

〈あれは白骨たちの亡魂なのではないか〉

好運はそう思った。果てしなく続く、師と自分、二人だけの作業を、首をなくし、白骨と化した人々の亡き魂が、じっと見守っているのではないか。

気のせいか、白骨が片づいてゆくにつれて、鳥の数も減って来たように思われた。

白骨が片づいても、まだ焼跡の清掃が残っていた。二人の知っているお山は、毎日の丹念な清掃で、いつも塵一つ落ちていず、箒の目のみ美しく目立つ清浄の地である。再びその姿に戻さなければならない。

その作業にまた半年かかった。

そしてようやくお山が清浄の地の俤をとり戻した時、詮舜が百日回峯行の許しをくれたのである。

その時、詮舜が言った。

「ええ顔になった。その顔なら行に入っても何とかいけるやろ」

好運は自分の顔が変ったとは知らない。ただ、気持が少しは強くなったのを感じていた。

もう、何十羽という烏が黙然ととまっている不気味な樹々の間を歩いても、たいしてこわいとは思わなくなった。何百という髑髏ばかりの山を見ても、痛ましいと思う一方で、人間はなんでこんな無駄なことをするんだろう、と訝しく思えるようにもなった。これは無論、斬りとった首だが、こんなものを集めて何にするのか。飢饉にあった村の子供たちは、髑髏を毬のかわりにして遊ぶというが、こんなに夥しい数では遊びもなるまい。結局はこうして投げ棄てゆくだけのことではないか。

好運は大抵のことには驚かなくなった。それにつれて顔の方も、一種強靱な、手ごたえのあるものに変って来た。それはもう少年の顔ではなかった。正しく鍛え上げられた戦士の顔に似ていた。

だが好運が本当に自分が変ったらしいと思い出したのは、去年、二百日の行を満行した時である。

もう、死んでもいい、というような気持はなくなった。辛いことに変りはなかったが、百日の時よりも平静な気持で、その辛さを受けとめることが出来た。

そして好運は今、三年目の行に入っている。

ちなみに言う。千日回峯行とは、ぶっつづけに千日間叡山を歩くことでは勿論ない。七年の歳月をかけて、総計で千日、距離にして九千七百十四里（三万八千八百五十六キロ）を歩くのである。ただ歩くのではない。毎日二百数十カ所もの札場を礼拝・遥拝し、それぞれの場所で、それぞれの定められた呪文を唱え、定められた礼拝の仕方をしなければならない。礼拝の順路もきめられていて、そのため山を下りまた登り、また下っては登る。

今日行われている千日回峯行のきまりを書いておく。

初年度。

百日間。一日七里半（三十キロ）。起床一時。修法の後、二時出発。七時帰院。また修法。足袋の着用を許さず。

第二年度。
百日間。初年度に同じ。
第三年度。
百日間。初年度に同じ。
第四年度。
百日間ずつ二回。つまり年間二百日。歩行距離・所用時間は初年度と同じ。この年から足袋着用を許す。これを了えると、『下根満行者』『白帯行者』と呼ばれる。
第五年度。
四年度に同じ。終って、九日間の『堂入り』に入る。無動寺の明王堂に籠り、九日間、全くの断食断水不眠不臥。八千枚の護摩を焚き続ける。これをやりとげると、『当行満』と呼ばれる。
第六年度。
百日間。一日十五里（六十キロ）。毎日京都側（西坂本）に降り、赤山禅院に詣でるので、この百日間を『赤山苦行』と呼ぶ。
第七年度。
百日間。一日廿一里（八十四キロ）。『大回り』と称し、京都の街を一回りする。この間、睡眠時間は二時間という。
百日間。一日七里半（三十キロ）。これを終って『大行満』と呼ばれる。（ほかに年一度二十一里の『大回り』がある）

この行は始めたら一日の空白も許されないきまりである。だから身体の具合が悪くても休めない。休んだら今までの行はすべて無効となり、しかも改めて初めからやり直すことは許されない。何も彼もすべて終りになる。つまり七年間、無病息災でいなければならぬ。勿論、天候は関係ない。雨が降っても、吹雪が吹いても、台風が来ていても関わりなく、毎日の行を続ける。だから行の途中で死ぬ者も出るという。

好運はその第三年度の回峯行修験を、どちらかといえば淡々と遂行中だった。もうあの小心翼々たる、鈍くさくて少々小ずるい好運はいない。

〈あの少女だな〉

詮舜は、そう見ている。

〈あの少女の死が好運を変えた〉

少女が生き続けたら好運はどうなっていただろうかと考えることがある。

〈切支丹になっていたかもしれぬ〉

少女は切支丹だった。だから自然に切支丹になっても、不思議はない。それが少女の死によって、初めて本物の僧侶になった。そして今、本物の行者になろうとしている。信長によって、その頬に大きく『くるす』の傷を刻まれながら、大行満大阿闍梨への道を、ひたひたと歩いている。

詮舜は少女のために祈った。

本願寺焼亡

この同じ天正八年四月九日。

石山本願寺法主顕如は大坂を退去し、紀州雑賀の鷺森御坊へ落ちていった。

実に十一年にわたる石山戦争の終焉の姿である。この年の三月から始められた正親町天皇の叡慮による勅命講和をうけ入れた結果だった。

この叡慮について、朝廷が本気で石山本願寺の行末を心配した結果であるという説と、信長が朝廷を利用したのだという説とがあるが、僕はどちらかと言えば後者だと思う。

信長の性格から見て、彼が真に朝廷を尊んでいたとは思えないからである。彼は将軍義昭を利用したと同様に、朝廷の精神的権威を利用したのだと思う。

この石山本願寺との講和にしても、仮りに信長が直接講和を持ち出しても、絶対に成立する筈がなかった。信長はあまりにも人を殺しすぎた。これほどの大量殺人者が『惣赦免』即ち一向一揆全員の生命を保証する、と言っても、誰が信じる筈があろうか。信じるには信長の手は

血に塗れすぎていた。天皇の叡慮だからこそ、顕如も信じたのである。或いは信じるふりが出来たのである。ふりをしていたとすれば、顕如もまた叡慮を利用したことになる。

要するに信長も顕如も、うんざりしていたのだ。果てしなく続く流血のいくさに、倦き倦きしていたのだ。信長も根切りによって一揆を絶滅しつくすことが不可能なことを痛感していたし、顕如も門徒衆を果てしなく死なせ続けてはゆけないことを感じていた。それに本願寺側は敗戦を予想していた。長島で水面という水面を舟で埋めたてた信長の作戦は、大坂でも同じ効果を現わしはじめていたからである。どうせ敗れるなら、一人でも多くの門徒の生命を救いたい。宗門の長がそう考えても不思議ではない。信長は天皇をひき出すことで、その顕如の気持に踏んぎりをつけさせたわけだ。十年を越える一向一揆との絶えざる戦いから、信長もそれだけのことは学んだといえようか。

当然のことだが、あくまで実質上の敗戦を認めない門徒衆がいた。彼等は法主顕如に逆らい、徹底的抗戦を主張した。顕如自身が『内輪の乱』と呼んだような、激烈な内紛だった。この『内輪の乱』の中心は、顕如の跡継ぎである二十三歳の息子・教如だった。教如は知られる限りでも五十通を超える檄文を書いて諸国に送った。

『数代聖人のご座所を、かのものどもの馬のひづめに汚し果てんこと、余りにあまりに口惜しく、歎き入り候。雑賀衆、寺内の輩も、数年の籠城、がたがたにくたびれ、すでに続きがたきこと、もちろんながら、なにとぞ、いま一たび、成るべきほど当寺相抱え、聖人御座所にて相果つべき覚悟にて候。……』

切々たる訴えである。

父の顕如はこの切々たる訴えを無視した。教如と父子の縁を切り、教如の腹違いの弟光昭を嗣子とした。これが准如である。これが後に本願寺が西と東に分れる原因となったが、本願寺の後継者の地位を失った教如に、諸国の門徒を説得する権威も力もなく、顕如退去後三カ月、天正八年七月十三日、信長は大軍をもって本願寺に迫り、蟻の這い出る隙間もないほど厳重に囲んだ。明かに皆殺しの態勢である。伊勢長島の凄惨な最期の様が、寺内の門徒たちの脳裡を掠めた。抵抗のすべては奪われていた。一同、死を覚悟した。その中に傀儡子一族と谷ノ坊知一郎もいた。

「また素ッ裸で逃げるかね」

知一郎はお蘭に言った。

「今度は無理だね。信長に二度は効かないよ」

「じゃあ死ぬか」

「それしかなさそうだね」

口ではあっさりと言ってのけたが、お蘭の眼は涙で一杯だった。

「到頭、知さんは、傀儡子らしい暮しを一度も知らずにすんじまったね」
戦さが終ったら、知一郎は傀儡子一族と共に放浪する約束を、お蘭とかわしていた。
「そりゃあ楽しいんだから。あたしたちと一緒だったら、金輪際退屈するなんてことはないからね。一日があって間にすんじまうんだから。時にはたべ物がないなんてこともあるけどさ。それはそれで面白いんだ。持物の中でたべられる物をさがすんだよ。草鞋をたべてみたり、小袖の袂をかじってみたり」
「俺はお蘭のあそこでいいな」
「馬鹿。助平」
それにしても傀儡子一族の放浪生活は、聞いているだけでも自由奔放で楽しげだった。それもこれも、ここで終りか。だが不足はなかった。
「お蘭さん」
「なんだい、急に、さんなんてつけて」
「礼がいいたかったんだよ。お蘭さんのお蔭で、毎日楽しかったよ。死んでも悔いはないよ」
「よしとくれ」
お蘭の血相が変った。
「あんた、まだ死にやしないよ。冗談じゃないよ」

「自分でいったんだぜ、死ぬって」
「考えが変ったんだ。死んでたまるかい。まだまだ知さんとしたりないよ。未練ですんなり浄土にゆけないよ」
「好きだなあ、お蘭さんて」
知一郎はお蘭を引き寄せながら言った。これが最期のつもりだった。
でも結局、お蘭の言った通りになった。
教如が屈したのである。
月を超えて八月二日の真昼どき。教如は淡路、雑賀の迎船数百艘に守られて本願寺を出た。惣赦免を許された門徒たちも、次々に寺内を出た。
その一行が漸く途切れようとした時、寺内から火が出た。またたく間に全伽藍に廻り、石山本願寺は一宇も残さず、焼け落ちた。
最後まで寺内に残って、火を放ったのは、傀儡子一族である。勿論、教如の命令だった。
お蘭は感情が激して半狂乱になり、大声で泣き喚きながら、建物という建物に片っぱしから火をつけて廻った。
知一郎は黙々とそのお蘭についていった。お蘭の気持がよく分った。叡山焼亡の日のことが、しきりに思い出された。だがここには死体がないだけまだいい。みんな、まだ首がついている

じゃないか。

あんまりあたり構わず火をつけるので、お蘭は時々、自分のつけた火に囲まれそうになった。その度に知一郎はお蘭をひっかかえて逃げ出さねばならない。お蘭が泣き疲れ、走り疲れて、遂に坐り込んでしまった時は、二人共、煙と汗で真黒になっていた。暫く呆けたように坐りこんでいたお蘭が、我に返ったように知一郎を見て、ぷっと吹き出した。

知一郎はぎょっとした。狂ったのか、と思った。お蘭は笑いながら知一郎の顔を拭いた。

「ひどい顔。ねえ、信長に献上された黒人って、知さんみたいな顔かしら」

いつものお蘭だった。知一郎は安堵してやり返した。

「似たもの夫婦っていうだろ」

「あらあ、あたしもなの?!」

お蘭の慌てようといったらなかった。遮二無二、小袖の袖で拭くのだが、その小袖が既に煤だらけなのだから、益々汚れるばかりである。

「顔、洗いにゆこ。あっち」

お蘭が川の方を指さした。

「いいとも。どうせ舟に乗るんだ」

「いやだなあ。こんな顔、人に見られたくないよ」

寺内を見廻したが、もうどこもかしこも火である。

「皆より先にいって洗お」

お蘭が走り出した。

知一郎が追う。

お蘭は足が早い。羚羊のような見事な走りっぷりを見せる。知一郎が本気で追っても、仲々追いつけない。それをいいことにお蘭がからかう。時々足をとめては、裾をもち上げて怪しげな格好などして見せて、知一郎を誘う。餓鬼が二人、鬼ごっこでもしているような形になった。

お蘭はいつもこうだった。いや、お蘭ばかりではない。傀儡子一族に共通した性質なのかもしれなかった。辛い時、悲しい時に、逆に滑稽な、或いは色気たっぷりな仕草をする。それで悲しさ辛さを追い払う気なのかもしれない。なんとこの一族の間では、辛い時ほど笑いが多いのである。

二人はその遊びの気分のまま、舟着場に走り出た。やっぱりお蘭の方が先だった。知一郎は最後に馬力を出して、やっと水際でお蘭をつかまえた。

左手に十艘余りの舟が舫っている。これは雑賀の舟だ。最後に傀儡子の輩を運ぶために、待機しているのである。

そしてその向うに織田の水軍がいた。無数とも思える安宅船、小舟を連ねて、本願寺をとり

囲んでいる。

お蘭にも知一郎にも、そんなものは目に入らない。今、この瞬間に、この世には知一郎とお蘭の二人しか存在していないのだった。

お蘭が知一郎に抱きすくめられながら、上体をそらせて大声で笑った。

笑い声は、しんと静まり返った水の上を渡ってゆく。織田水軍にまで届いたに違いなかった。傍若無人といえばいえた。これは悲痛な落城の図ではない。いかに背後に黒煙と紅蓮の炎が立ち籠めていようと、この舟着場の一角だけは、まことにのどかな春の趣だった。見ていて微笑ましくなるような、若い男女の痴戯だった。いくさ人たちがふといくさを忘れて笑いこける、そんな瞬間だった筈だ。

だーん。

その時、鉄砲が鳴った。たった一発である。暴発かもしれない。ふと嫉妬を感じた武士のいたずらだったかもしれなかった。

だが、お蘭は、抱きすくめている知一郎の腕の中で、急に一切の力を失い、ずるずると崩れていった。

お蘭の背に廻した知一郎の手が、なま温かい血の流出を感じた。

「お蘭！」

知一郎の叫び声に、お蘭がうっすら目を開けた。立っている力はなく、知一郎の腕の力だけで支えられていた。

「いい気分」

お蘭が掠れた声で囁いた。

「一遍、こういう風に、死んでみたかったの」

「お蘭！」

「抱いてって。置いてったら、承知しないから」

「連れてゆくとも！　誰が置いてゆくか！」

「どこまでもよ。知さんのゆくところへは、どこでも……」

「きまってるだろ！　俺はお蘭と日本国中流れるんじゃないか」

お蘭はもう返事をしなかった。

がっくりと仰のいて、こと切れていた。

「お蘭！」

知一郎は、その仰のいた顔をひきよせた。強く口を吸った。いつものように、吸い返しては来ない。唇が塩からかった。知一郎はそれが自分の涙なのに気づいた。

「お蘭！」

傀儡子たちがとび出して来た。知一郎に抱かれたお蘭を一目見るなり、事態を悟った傀儡子の長は、顔色を変えて火縄に火を点じた。傀儡子一族のすべてが、長にならった。とり囲んだ織田水軍に、本気で鉄砲を射ちかける気でいた。

傀儡子一族の結びつきは、それほど強かった。誰もが家族の一員のようなものだった。家族を殺されて、やみやみと引き下ることは出来ない。たとえ一族枕を並べて討死することになろうとも、殺した者に償いをさせねばならない。

「やめてくれ」

知一郎が囁くようにいった。

「やめてくれ。頼むよ。いくさは終ったんだ」

教如と門徒衆を乗せた舟は、もう姿を消している。

「いくさが終ったのに死ぬなんて、犬死じゃないか」

傀儡子の長が一瞬ひるんだ。確かに合戦が終った後になって、一族を犬死させるのは辛いことだった。

「お蘭は倖せに死んだよ。倖せに犬死したよ。でも、皆は倖せにゃ死ねない」

知一郎の心の中で、何かが、ぽっきり音を立てて折れた。もう沢山だ。そう思った。もう人殺しは沢山だ。お蘭だって、自分の死のために、傀儡子一族を皆殺しにしたくはあるまい。犬死で結構じゃないか。要は倖せに死んだかどうかである。お蘭は倖せだった。神かけて倖せだった。知一郎は何の名にかけても、それを誓うことが出来る。何故だと言うのか。それは俺が倖せだったからだ！　ほかならぬ、この俺が倖せだったんだ！　どうしてお蘭が倖せでなかった筈があろうか！

知一郎はお蘭を抱き上げた。今や纜をといて、舟着場に進んで来た舟に歩み寄った。

「舟に乗ってくれ、みんな」

長が手を振った。傀儡子たちは火縄の火を消し、緩慢な動きで、一人また一人と舟に乗った。

知一郎は、最後の舟に乗り込んだ。お蘭をしっかりと抱いている。

「抱いてって。置いてったら、承知しないから」

お蘭の声がきこえた。

「一生、抱いてってやるよ、お蘭」

知一郎は呟いた。何故か、もう傀儡子一族とは一緒にいれないな、と思った。お蘭のいない傀儡子一族と流れてゆくのはあんまり辛すぎる。

〈坂本に帰ろう〉

唐突にそう決心した。

〈二度と再び槍は持つまい〉

叡山が再興され一山大衆がお山に戻らない限り、山徒である公人衆もない。それでも構わない、と知一郎は思った。船頭でも物売りでも、何でもしよう。何をしたって、食ってゆくくらいのことは出来る。

〈毎朝、お山が仰げれば、それでいい〉

お蘭も文句は言うまい、と知一郎は思った。

舟が揺れて、舟着場を離れた。石山本願寺を出てゆく最後の舟である。

知一郎は振り返って本願寺を見た。自分とお蘭の奇妙な倖せの場所が、そこにあった。その倖せの場所が燃えている。

八十二歳の蓮如が隠居所として『大坂トイフ在所』にこの石山御堂を建ててから八十五年。証如が山科から移って来て以来四十九年。

『加賀の国より城作りを召し寄せ、方八町に相構え、真中に高き地形あり、ここに一派、水中の御堂をこうこうと建立し、前には池水を湛え、一蓮托生の蓮を生じ、後には弘誓の舟を浮かべ、仏前に光明を輝かす……』

と『信長公記』に書かれた一向宗門徒の象徴が黒煙をあげて燃えている。

火は夜昼三日燃えつづけたと、同じ『信長公記』は伝えている。

奈良興福寺の多聞院英俊は、その日記に、

『渡テ後、ヤクル様ニ用意シケルカ』

と書き、『家忠日記』にも、

『自焼候て、船にて退き候由……』

と書いた。

教如の行方は不明である。越前の穴馬の谷、飛騨の白川郷、越中の五箇山（後の加賀藩の流刑地）に身をひそめていたという噂がある。

とにかく教如は、以後、信長が死ぬまで、世に出て来ることはなかった。

そして谷ノ坊知一郎の姿も、傀儡子一族の中から忽然と消えた。お蘭の遺骨と遺髪を抱き、飄然と消えたと言う。

そして、故郷坂本でも知一郎の姿を見た者はいなかったのである。

御馬揃え

翌天正九年二月二十八日、織田信長は御馬揃えに参集することを己れの分国中に朱印状をもって伝えさせた。御馬揃えとは、一種のパレードであり、織田軍団の軍事的デモンストレーションだった。

内裏の東に北から南へ八町に馬場を設け、御所東門の築地に、正親町天皇はじめ公卿、殿上人が出座、左右に桟敷をつくって観覧をする。この馬場は現在の寺町通りであろう。

信長は本能寺を辰刻（午前八時）に出て、室町通りをのぼり、一条を東へ進んで馬場に入った。

それから一番隊、丹羽長秀と摂州衆・若州衆・西岡の河島の面々。二番隊、蜂屋兵庫頭頼隆をはじめ河内衆・和泉衆・根来寺の大ヶ塚・佐野衆。三番隊、明智日向守光秀をはじめ大和・上山城衆。四番隊、村井貞成と根来上山城衆。続いて御連枝衆、つまり織田信忠はじめ美濃衆・尾張衆、織田信雄はじめ、伊勢衆、織田信兼、信孝、信澄など。更に近衛前久と正親町、

烏丸、日野、高倉、細川昭元はじめ細川、伊勢、一色、小笠原の公家衆。更に御馬廻御小姓衆が続き、最後に柴田勝家を筆頭とする不破、前田、金森らの越前衆と、御弓衆・御中間衆・坊主衆・御小人衆。そして信長がその颯爽たる姿を見せる。信長の後には津軽をはじめ全国から集められた名馬がひかれてゆく。

信長はじめ武者たちは、ここを先途と綺羅を飾り、その華やかさ、いわん方なかったと言う。尚、この御馬揃えの中に羽柴秀吉の名がないのは、播州の戦場にいたためである。

信長はこういう時は実によく目立つ。もともと長身の細そりした華奢ともいえる身体が、世にきこえた舞いの名手としての風雅に支えられれば、目立たないのがおかしいくらいだろう。それにあのすっきりとした美貌である。これが自ら第六天の魔王だと宣言したような、残忍非道のもののふとは、誰の目にも見えなかったにちがいない。

当日、信長は高砂大夫のいでたちだったと伝えられている。高砂大夫とは婚礼の時に謡曲を歌う大夫である。信長はおどけているのである。

小袖は紅梅に白のだん、桐につる草がはった模様（桐唐草）で、その上に蜀江の錦の小袖、袖口には金を縒ったものがついている。肩衣は紅緞子に桐唐草、袴も同じ。腰に牡丹の造花をつけ、吊った太刀も脇差も熨斗付きである。鞭を差していた。手袋は白革に桐の紋、靴（沓）は猩々緋（黒っぽい深い紅色の毛織物）で上部は唐錦だった。

首に白梅の枝を折って差していたと言う。馬が歩むにつれて、白い花びらがこぼれた。『二月ノ雪、衣ニ落ツ心カ』と『信長公記』は書いている。二月の雪とは春雪のことだ。どれほど信長の姿が華やかで、どれほど信長の心がはずんでいたか、この姿ひとつから、僕たちは容易に想像することが出来る。

今日の豪華けんらんたる能衣裳は、この当時の武士の普通の服装である。武士といえば江戸時代の黒を基調としたくすんだ色彩を思い浮かべるのは大変な間違いだ。『信長公記』には、その他の武将の服装について細かい記述がある。読んでいると、実にさまざまな色彩が眼前に渦巻き、酔ったような気分になって来る。その中だからこそ、一枝の白梅を首筋にさした信長の姿が、余計映えるのである。

この御馬揃えは、後年の秀吉の醍醐の花見と同様、信長の力を誇示する大パレードだったと同時に、信長のわがこと成れり、という得意の様を想像させる。石山本願寺を下したことが、この結果を呼んだ。逆にいえば、本願寺と一向一揆の圧力は、それほどの強さで、信長の心にのしかかっていたといえようか。

この御馬揃えの中で、小さな椿事が起こった。

しゃっきり背筋をのばして、威風あたりを払う様で乗馬にまたがっていた信長が、一瞬、よろめき、落馬しそうに、身体を前に折ったのである。何か強烈な力で、後頭部を殴られたような、そんな具合だった。

側近の者が仰天して、

「殿！」

と呼びかけたが、信長は即座に立ち直り、元の姿勢に戻った。余計なことをいうな、というように手を振りかけて、ふと尋ねた。

「あの声が聞えるか」

「は？」

側近の者には何も聞えない。いや、聞えないというのは語弊がある。音は聞えている。見物の人々の凄まじいまでの喚声、馬の勇む声、蹄の音。むしろ聞えすぎて、何も聞えないのである。

「どんな声でしょう？」

「聞えぬのか」

途端に信長の顔が不機嫌に歪んだ。

「あれほどの声が聞えぬか！　耳を洗って参れ」

ぴしりと鞭で耳を叩いた。

側近はとび上る痛さをこらえた。痛そうな顔でもしようものなら、どんな目にあわされるか分らない。下手をすれば、首が飛ぶ。近頃ますます信長の癇癖が強くなっていることに、この男は気づいていた。耳が千切れたところで、死ぬよりはましであろう。

信長は本気で怒っている。あの声が聞えないとはなんだ。わしが幻聴を聞いているとでもいうのか。

信長自身も、時に、幻聴ではないか、と思うことがある。だがこうも頻々と、こうも明瞭に聞えて来る幻聴などあろうか。それは正確には声ではない。言葉になっていないからだ。声というより音である。だが人間の声による音であることは、はっきりしていた。

ああ、ああ。

ああ、ああ。

長く短く、高く低く、いつまでも続いてゆく声なのである。それだけでもいい加減わずらわしいのに、声だけではすまないのだった。

亡者たち。

首のない無数の亡者たち。

首のあるべきところから、果てしなく血を奔出させている男、女、そして子供。母親に抱かれた赤子にさえ、首がない。

頭蓋を叩き割られた亡者たち。

黄色い脳漿が、血をまじえてどろりと流れている。

片目がだらりとぶらさがって揺れている若い娘の亡者。

首のなくなった母親の乳房を吸っている赤子の両脚がない。

臓腑を腹からひきずり出されて、うつろな目をした老婆の亡者。

焼け焦げた亡者、溺れさせられて腹のふくれ上った亡者。

それらの亡者たちが、信長の視界の限りを埋めつくす。

左を見ても亡者、右を見ても亡者である。

まるで亡者の壁の中に閉じこめられたようだった。

勿論、そんなものは屁でもなかった。亡者たちに何が出来るわけではない。生きていてさえ何も出来なかった者が、死んで何が出来るというのだ。その不気味な姿で脅かそうというのなら、女子供のところへゆくがいい。天下人信長が、異形の者におびえるわけがあろうか。不格好で滑稽というだけではないか。さっさと来た所に戻るがいい、亡者どもめ！

今までのところ、奇妙な声が聞えるのも、亡者どもが現われるのも、夜に限った。暗くならなければ何一つ出来ないから、意気地なしめ、と信長は散々罵倒したものである。

そして今、あの声が、白昼の群集の中で聞えて来ている。

このざわめきと喧騒の中を縫って、他を圧する強さと鋭さで、聞えて来る。

ふん。

信長は鼻で笑った。今日は声だけか。亡者どもはどうした。さすがに亡者は昼の光をいやがったのか。自分たちの醜い姿を、白日の下に曝すことが耐えがたいのか。

不意に陽が翳った。ほんの一瞬のことである。再び陽光が馬場にあふれた。

だが、見よ。馬場の様相が一変している。

居並んだ騎馬武者たちが、どれもこれも白骨に変っている。夥しい駿馬たちもまた白骨だった。白骨の馬にまたがった、白骨の騎馬武者たち。あふれ返る群集は、いつも見慣れた亡者どもである。首がない。手がない。脚がない。焼けただれて真っ黒だった。桟敷の方を見ると公卿や女房たちまで白骨と化している。

〈見事だ〉

信長は手を叩いて喝采を送った。

〈仲々腕をあげたな、亡者使いめ〉

幻は来た時と同じように、一瞬に去った。

御所の破れた築地の蔭で、一人の僧ががっくりと膝をついた。昇運だった。

だが今の昇運を師の詮舜や弟弟子の好運が見ても、昇運と認められるかどうか。異常なまでの痩せ方だった。ほとんど骨と皮ばかりである。それは絵巻物に出て来る餓鬼の姿によく似ていた。目ばかりかっと大きく見開いて、歯の欠け落ちた空洞のような口を、ぽかっとあけている。

昇運は今年二十九歳の筈である。筈であるといったのは、昇運には既に年齢の感覚が抜け落ちているからだ。確かに誰が見ても、今の昇運を二十九とは思うまい。四十か、五十か、それとも六十か。とにかく若さなど、かけらもない。水気がまるでなくなってしまっている。亡者たちとのつき合いが、昇運自身まで亡者に変えていっているのだった。

昇運には、そんなことはどうでもいいことだ。欲しいのなら、身も心も亡者たちにくれてやる。どうでもよくないのは、信長の異常なまでの精神の強靱さだった。あの男はこれだけの亡者どもに囲まれながら平然としている。たった今の異変を起すのに、昇運は全力をつくしたと言うのに、あの男は微笑している。手まで叩いてみせた。正しく生れながらの第六天の魔王である。生れついての強者であり覇王だった。

恐ろしい苦痛を耐え忍ぶかのように、昇運はゆっくりと暇をかけて起ち上った。

まだ及ばない。

まだ自分の力が足りない。

だが果していつか自分の力が、あの魔王を凌駕する日が来るのだろうか。それまでに、恐ろしいことが起るのではないか。この国を根こそぎひっくり返すような、凄まじい事件が起きるのではなかろうか。

昇運は亡者たちとつき合ううちに、異常なまでに勘が鋭くなっている。肉体の世界をほとんど棄て去って、精神の世界にのみ没入して来たのだから、当然といえば当然であろう。

その昇運の勘が、異常な事件がまさに起こらんとしていることを告げている。何かまでは分らなかった。だが、それは、必ず起る。それも今からそう遠くない日に。

それまでになんとかして信長を斃さなければならない。だが……。

昇運は肩を落し、足を引きずるようにして、都大路を去っていった。

その姿を追うように、また大歓声がきこえて来る。御馬揃えは、今まさに最高の盛り上りを迎えようとしていた。

譲　位

この京都御馬揃えの後、織田信長が正親町天皇に、二十八歳になられた皇子誠仁親王への譲位を迫ったことを、意外に人は知らない。御譲位下さるなら、自分も左大臣の任官を受けてもいいと信長は言ったのである。

信長はこれまで、将軍義昭から提供された副将軍その他様々な地位を頑固に拒み続けて来た。朝廷から授けられた右大臣・右大将の両官も、天正六年にすべて返上している。あらゆる枠組みから独立した存在であろうとし続けた、信長の姿勢がそこにはある。

それが誠仁親王が天皇になられるなら左大臣になってもいいと言っている。それは如何なる意味を持つか。

誠仁親王は、既に一年も前から、信長が京都屋敷として新築した二条屋敷に迎えられていた。ここを『二条御所』と呼び、公家の世界に次第にその影響力を拡げて行こうとしていた。勿論、誠仁親王御自身の影響力ではない。信長によって作られた力である。現に大坂の石山本願寺と

の講和に当っても、誠仁親王は前関白近衛氏と共に、信長の意のまま、勅命講和の推進に尽力している。いわば既に信長の傀儡となり果てていらしたのである。だからこそ信長は、誠仁親王が天皇になられるのなら、自分が左大臣になってもよい、と言ったのだ。

信長は自分が天皇になろうとしたわけではないようだ。そんな厄介な地位は真平御免だというのが本音だったのだろう。自分の意のままに動く傀儡なら、喜んでその存在を認めるつもりである。自分はそうした世上の地位などから独立した、しかも権力だけはその地位を遥かに上回るものをしかと握っている……そうした形を望んでいたのではないか。

倖い、この譲位の話は、公家たちの強い反対にあって立ち消えになった。信長も無理強いはしない。少なくとも正親町天皇に一種の恐怖感を植えつけることには成功したからである。下手なことをしたら、力ずくでも誠仁親王へ譲位させられる。そう天皇に思わせるだけでも成功なのである。

一向一揆との果てしない抗争を通じて、短気な信長が待つことを知ったように見える。力ずくで根切りにするよりも、生かしておいて利用する方が得だ、ということを知ったのである。顕如の場合がそうであり、正親町天皇の場合もそうだった。この時以後、秀吉の時代にまで亘る一向宗の権力への迎合、人間精神の自由を表す『無縁の徒』『公界人』『道々の輩』たちにとっての甚だしい裏切りは、すべてこの信長の作戦の成功を物語っている。

だが人間の性質がそう簡単に変るわけがない。信長の短気と殺戮への嗜好が、一朝一夕に消え去る筈がない。僕たちは、その性格の爆発を、信玄なき後の武田家への圧迫と戦闘に見ることが出来る。

天正十年三月、信長は武田の御曹司勝頼を、ほとんど戦闘することなく滅ぼしている。少なくとも織田軍団の本隊は、ほとんど武田勢と闘っていない。武田勝頼が闘ったのは、大方武田勢とである。つまりは裏切りの連続の中で死んだのである。残忍な死に方である。裏切る方も裏切られる方もこのいくさでは心に深い傷を負うことになる。信長の残忍性は、この戦さではもう一つ奥行を増し、凄みを増したように思えてならない。降服した武田の武士たちを一人残らず斬れと命じたのは昔ながらの信長の姿である。武田軍団がたとえ僅かでも生き延びられたのは、徳川家康のお蔭だった。家康は信長と違って、人を殺さない武将として定評がある。この時も信長の命令に逆らって、密かに武田軍団を温存させ、自軍の中に吸収していった。それ以外の武田勢は信長の命令通りにことごとく斬られた。殺戮は兵士たちだけでは終らなかった。

武田信玄の菩提寺恵林寺の長老快川紹喜和尚は、勝頼の死体をひきとって追善供養を行った。仏家として当然の行為であろう。だが信長の気には入らなかった。信長は口実を設けて恵林寺をなじり、快川和尚以下寺中の老若をあまさず山門にのぼらせ、楼門から山門に至るまで籠草を積ませて放火、百五十余人を焦熱地獄の中で焚殺した。快川和尚が泰然自若として、

「心頭滅却すれば火もまた涼し」

とうそぶいて煙となって死んだという有名な逸話は、むしろ甲州人の見せた最後の心意気だったのではなかろうか。

天正十年の春の終り頃、信長は機嫌がよかった。長年の宿敵武田家を滅ぼしたためでもあるが、もう一つ、この年の初頭から、例の声と亡者共が現われなくなったからである。

〈亡者共も到頭諦めたと見える〉

亡者にさえ勝った、という意識は、さすがの信長にさえ満足感を与えるものだったのだろう。

〈ちと残り惜しい気もするが……〉

あれはあれで結構面白い日々であった、と思うほど、心に余裕が生れていた。

だから、この春の中ごろから、夜中に突然東の空が明るくなり、安土城の天守を鮮赤に染めてみたり、彗星が鎌のように長い尾をひいて流れてみたりして、人々が不吉だと騒いでも、平然としていた。

「何が不吉か。天までがこの信長の天下布武をことほいで、挨拶を送って来ているのではないか」

殿はどこまで気がお強いのか、と側近の者たちは噂しあったものである。

だが昇運の鬼嘯は、信長の知らないところで、絶えることなく続けられていた。場所は坂本である。

この懐しい町に帰って来ることには、さすがの昇運にも幾分かの抵抗はあった。自分の倖せだった日々のすべてがお山にあった。そしてこの坂本の町にあった。だがそれだからこそ、いいのではないか。あの叡山焼亡の日の魂の奥底までゆるがすような怒りと悲しみを思い出すことによって、何がしかの力が自分の術に加わるかもしれぬ。

昇運は今、坂本城の城主、明智日向守光秀を亡者たちに襲わせようとしていた。光秀はあの日、無動寺谷への道を攻め登って来た男である。谷ノ坊知一郎の父を殺し、母を殺し、妹を殺し、めしたきの源さんまで殺した男である。急坂を攻め登って来る桔梗の旗印が、今もって昇運の眼前にある。考えようによっては、信長は許せても、光秀は許せない。信長は自らいうように第六天の魔王そのものだ。魔王が仏法を滅ぼそうとするのは当然といえる。だが、光秀は違う。公界往来人として長く諸国をさすらい、人間の精神の自由のなんたるかを、根底では承知している男だ。仏法への理解も深く、叡山の学僧とも個人的なつきあいまであった男である。その男が、いかに信長の命令とはいえ、見事に己れに背いて叡山を焼き、何の罪もある筈のない女・子供と学僧まで殺戮した。その罪は断じて許すことは出来ない。

昇運には一つの狙いがあった。亡者どもを使って恐らくは当代切っての知識人であり、良識

の持主である光秀の魂の奥底に眠っている己れの所業への悔れを、最大限にかき立ててやろう。そして己れの所業がどれほど深い罪業に通ずるものだったかを改めて痛烈に認識させることで、その所業を強いた主君信長への怨恨の念をひき出してやろう。それが昇運の狙いだった。

知識人であるということは、武将としては弱みに通ずる。良識は、闘いの中にある武将にとって、危険極まる邪魔物にすぎない。明智日向守光秀は、その知性故に、信長にある心の強靱さを持たなかった。

光秀には亡者どもの姿がこたえた。心底こたえ、そして女子供以上におびえた。己れのやらざるをえなかった、そして、目をつぶって果たしてしまった、全く無用な皆殺しの暴挙の図が、まざまざと眼前に生き返り、その魂に激しくゆさぶりをかけた。

ああ、ああ。

ああ、ああ。

光秀にもこの声が亡者どもを喚び起すことは分っている。初めのうちは真夜中に兵を走らせて、声の主を散々探し求めさせたものだ。だがみつからない。そして亡者どもは執拗に光秀の周囲に立ちはだかり、何ごとかを求めるかのようにその血みどろの手をさしのばすのである。

やがて光秀は、鬼嘯が聞えると、耳を塞ぐようになった。無駄な行為だった。鬼嘯は耳に聞えるのではない。心に聞えるのだ。だから心を閉ざすしか、この声を遮ることは出来ない。そして何人にも、心を完全に閉ざすことが出来るわけがなかった。

光秀は痩せ、性格は鋭さを増していった。

安土城の信長に、勅使勧修寺晴豊が派遣されたのは天正十年の夏の初めである。信長を、太政大臣、関白、征夷大将軍のどれかに任官させようと散々議した挙句、結局は征夷大将軍に落ちついて、その任官をすすめるための勅使である。正親町天皇も公家たちも、例の天子譲位の件に反対し潰したにも拘らず、信長が全く無言でいることに不安と恐怖を抱いた結果である。なんらかの官位を持てば、信長を公家の世界に引き込むことが出来る。それだけが、この不気味な沈黙の壁の向うを垣間見られる唯一の手だてだった。

だが今度も信長の沈黙を破ることは出来なかった。

信長は夕べの琵琶湖に三艘の舟を浮べて勅使をもてなしたが、勅命には一切答えようとはしなかった。しかも勅使の一行は、恐るべき信長の姿を見て、心の底から戦慄することになった。

信長が、亡霊を斬ったのである。

それは信長にとってはあの懐しい亡者どもだった。いつもと違ったことは、今回は信長だけではなく、勅使たちの目にも、舟人たちの目にも、その姿がはっきりと見えたことである。

今度も矢張りあの声は聞えた。久し振りに聞く声は、心なしか悲痛さを増したかのように思われた。

ああ、ああ、あああ。

おう、おう、おう。

記憶にあるものよりも、一段と長く曳くような声が、黄昏の湖上を、微かな共鳴音と共に伝わって来た。

「あれはなんだ?!」

勅使である勧修寺晴豊は、思わず舟の中で立ち上ろうとして、よろめいた。

「あれは……あれは鬼嘯ではないか!」

晴豊は陰陽道の造詣が深い。忽ち声の正体を見抜いた。

「鬼嘯?」

信長が面白そうに問い返す。

「鬼を呼び出すための声です。魏晋の、いやもっと古い時代からの国に伝わる呪法として、非常に恐れられているものです」

晴豊の声がうわずっている。恐怖がのどもとまで這い上って来ている。晴豊は書物を通じて長嘯或いは鬼嘯と呼ばれるものがあるのを知っているだけだ。現実に耳にしたことなどあるわけがない。それだけに尚更、この惻々として迫る、啾々の声が、正しく鬼の啼く声のように聞えたのである。

その瞬間、出た。薄暗くなりかけた水の上に、首なき亡者たちの姿がぬっと立ったのである。血みどろの手をさしのばし、何物かを求めるかのようだった。

信長が立ったのはその時である。

「勅使に対し奉り、無礼であろう!」

一喝するなり抜き討った。太刀は見事に亡者の胴を両断したと見えたが、血煙は上らず、忽然と消えた。振り返ると、他の亡者たちの姿も消えている。

「わし一人の時に出るがいい。但し今少し趣向を凝らせよ」

信長はなんと天を仰いでからからと笑った。

それは天狗笑いに似ていた。

〈この男は人ではない〉

晴豊以下、勅使の一行はそう思った。人間にこれほど野太い真似が出来るわけがない。それに最後の言葉はなんだ。まるで亡者に友のように呼びかけているではないか。彼等にはたった今見た異形の者たちよりも、この信長の姿の方が遥かに恐ろしかった。

〈この男は何をするか分らない。天子を弑することぐらい簡単にやってのけるのではあるまい

か〉

信長の頑固な沈黙の意味が、今ようやく公家たちの心の中に、深い意味をおとしはじめていた。

本能寺炎上

この琵琶湖舟遊びの七日後、信長は突然、安土山の一角に摠見寺という寺をつくり、ここに己れ自身、つまり信長自身を、不滅の生命を持つ神として祭り、礼拝すべしという命令を高札にして掲げた。高札には、信長の誕生日を聖日として、この摠見寺に礼拝すれば、間違いなく『功徳と利益』がもたらされるであろうと書いてあった。富める者は益々富み栄え、貧しい者は富裕になり、子孫と長寿に恵まれ、疾病はなおり、健康と平安を得るであろう。これを信じない邪悪の徒は、現世・来世とも滅亡あるのみ。

寺内にはご利益があると知られた各地の諸仏が強制的に集められ、仮りの神体として、どこからか運ばれた一個の石が、最高の神として、これら諸仏の上にまつられた。信長は、

「予みずからが神体である」

といったと言う。一見して明らかな通り、ここには切支丹の影響が色濃くある。一神教的な、信長自身の神格化である。来世往生を説く一向宗も、現世利益を説く法華宗も、信長の前に

屈服した。官位につけることによって天皇の下に位置づけようとする朝廷の狙いも無視した。今や仏法も王法も信長の天下のもとにある。

安土に住む諸人はこの高札に驚き、後難を恐れて、先を争って摠見寺に参拝したと伝えられる。陸続と続く参詣の群集を見て、信長は非常な歓喜を味わった、と当時京都の新築成った南蛮寺にいたルイス・フロイスは書いている。そうして、次のようにつけ足した。

『われらの主なるデウスは、彼がある群集と衆人の参拝を見て味わっていた歓喜が十九日以上継続することを、許し給わなかった』

この十九日後とは天正十年六月二日のことである。この日、信長は京都本能寺に宿泊していた。そしてこの日の未明、明智光秀はこの本能寺に信長を襲った。

明智光秀謀叛の理由については諸説がある。『川角太閤記』が伝える屈辱説は、徳川家康の御馳走役を命ぜられた光秀の館を信長が訪れ、勝手で魚が腐っているのを見て罵倒の限りをつくし、御馳走役を罷免したからだと言う。だが御馳走役を辞めさせられたくらいで、主君を襲うものだろうか。

母の仇説は、丹波八上城に波多野秀治兄弟を囲んだ時、信長が光秀の言を無視してこの兄弟を誘い出し殺したため、光秀が人質として城中に送った母が殺された、という事実に基づいて

いる。だがこの話はいくらなんでも古すぎる。母の仇を討つなら、もっと早い時期に、いくらでも機会はあった筈である。

封禄召し上げ説は、光秀の現在の領国をすべて森蘭丸に譲り、光秀にはこれから先の備中のいくさで斬りとった分をくれると信長に命ぜられたためと言う。ご叮嚀にも、領国を奪われては、備中に赴く軍事費にも不足するだろうという。勿論、そんな馬鹿なことを信長がする筈がない。軍事費が足りなければ貸してやったであろうし、大体領国を奪われると即無収入になるという考え方が短絡にすぎる。禄米とり、今日で言う月給取りではないのである。

真因、というより、謀叛の直接のきっかけは、全く別のところにあった。

勅使として安土にいった勧修寺晴豊が、今まさに備中への援軍として出発寸前の光秀に対して書を送り、信長に天子弑逆の意図があるのではないかと言う、琵琶湖の舟遊び以来の疑惑を書き送ったことである。

光秀は信長の性格を熟知している。摠見寺での驚くべき命令も知っている。誠仁親王への譲位の件についても、晴豊の窺うすべのない細部に亘って光秀は知っている。それだけに晴豊の、まったく勘だけの推測が、光秀の頭の中では恐ろしい具体性をもって迫って来たのである。確かに信長は、必要とあらば平然と天子をも弑逆し奉るほど無道な男である。それに、武田に次いで四国の長宗我部も抑え、今や毛利さえ倒せば、天下はほぼ信長の物になるという時だ。正

親町天皇を弑し奉り強引に誠仁親王を帝位につけるか、或いはこの際親王をも殺し、公卿たちも皆殺しにすることによって、一気に朝廷というものを無にしてしまうことも考えられる。それは将軍義昭にやってのけた所業から見ても、充分信憑性のある推測だった。知識人光秀としてそのような暴挙を許すわけにはゆかなかった。それは再び、皆殺しを復活することであり、しかも今度の場合は朝廷皆殺しである。今日までの信長の皆殺し作戦、別して叡山に対する皆殺しによって、光秀は充分に罰せられている。今や夜ばかりではなく、白昼から堂々と現われる亡者共の姿が、恐ろしい罰を果たしている。もうごめんだった。もう二度とあんな皆殺し作戦には従いたくない。これ以上亡者共に怨みつらみを言われては、生きてゆけそうもなかった。

そして何よりも機会の問題がある。今ならやすやすと信長を討つことが出来る。現在自分の掌中にある軍勢の数は一万三千。京都本能寺にいる信長の兵はたかだか数千にすぎない。備中に赴き、秀吉の大軍と合流した後では、叛逆の機会は皆無だった。

秀光は思案に思案を重ねた。その間に出陣の日が来た。六月一日である。酉刻（午後六時）に出発。秀光は既にこの時、決心を固めていた。

婿弥平次秀満をはじめ斎藤利三ら五人を呼び、信長を討つ決意を告げた。その方たちの同心が得られない時は、一人本能寺に乱入して切腹し思い出とする、と言う。弥平次秀満は既にこの五人に告げられた以上、躊躇は無用である。決行あるのみと言い、他の者も同意したと言

う。

老の坂を越えて桂川に至った時、全軍に武装を命じ、鉄砲の者どもには火縄に点火して引金にはさませ、その上で、初めて、

「敵は本能寺にあり」

と告げたのである。現実にこんな格好いいことは言わなかったらしい。

「今日よりして、天下様に御成りなされ候間、下々草履取以下に至るまで、勇み悦び候え」

そう全軍に触れさせたという。これは『川角太閤記』の記述である。

この瞬間、光秀は又、あの鬼嘯の声を聞いた。例の如く忽ち亡者共が現われたが、今日ばかりは彼等は光秀に向って何物かを求めるように手を差し出すことはなく、却って手を叩いて喜悦の表現を露骨に示した。光秀は初めて、今まで彼等が手を差し伸ばしていた理由を知った。彼等は信長の首を欲しがっていたのである。亡者共は野を埋め、地を覆った。彼等は一万三千の軍勢と共に、嬉々として出陣していった。

この時はじめて、光秀はこの叛逆の成功を確信した。

未明、明智軍団がひたひたと本能寺をとり囲んだ時、信長は寝所であの鬼嘯を聞いた。今朝の鬼嘯にはいつもの悲痛さはなく、かわって悦びの色が微かにあった。

〈奇妙な〉

寝床の中で信長はそう思った。

亡者共が出現した。その亡者共さえ全身に喜悦の表情をあらわして、信長のまわりをほとんど踊り廻るのである。

「何の真似だ」

思わず口に出して言った時、信長は雷鳴の轟くような鬨の声を聞いた。

同時に銃声が湧き、板戸に弾丸のうちこまれる音がした。

信長ははね起きた。

周囲で踊り狂う亡者どもを見凝めた。

「そうか」

低く呻いた。

森蘭丸が、信長の剛弓をもって、駆け込んで来た。

「誰の謀叛だ？」

信長は短く聞いた。

「明智が者と見え申候」

と蘭丸は答えた。信長はもう一度、亡者共を見た。亡者共は、顔もないのに笑っているように見えた。

「是非に及ばず」

そう信長は言ったと書かれてある。

ああああ、あああああ。

おおお、おおおお。

鬼嘯が高く低く、長く短く聞えていた。

信長は弓をもって、手早く三の矢まで放った。

亡者の長い爪を伸ばした指が伸びて、その弓弦を切った。

槍をもって戦ったが、亡者共がその槍にしがみついた。

遂に信長が笑った。

「分ったよ」

槍を捨て、中へ入った。

既に本能寺は紅蓮の炎に包まれている。

ルイス・フロイスの年報は、信長が手と顔を洗ってから、自決したことを伝えている。

信長時に四十九歳。

本能寺の外で、人間とは思えないほど痩せさらばえた一人の僧侶が、ばったりとうつむけに

倒れた。昇運である。既に死んでいた。生きている人間たちは、誰一人、この僧侶の死を気にかけない。この朝は、あまりに多くの人が死に過ぎていた。

そしてこの時、叡山無動寺谷では、掘立小屋のような粗末な小屋の中で、好運が修行五年目の、堂入りに入っていた。断食断水不眠不臥、八千枚の護摩を焚くのである。護摩の火が、厳しくやつれた好運の顔を照らしている。好運はまだ、自分が千日回峯修験再開の第一回目の阿闍梨になることを知らない。

解説

縄田一男

吉川英治の『宮本武蔵』で、一乗寺下り松において吉岡一門をことごとく打ち倒した武蔵が、比叡山無動寺にこもって一心不乱に観音像を彫ろうとする場面がある。

武蔵は、下り松で自分が手がけた吉岡方の名目人源次郎少年の供養のために、そして、〝われ事において、後悔せず〟という決心すらぐらつく自身の魂に対する慚愧として仏像を彫っていたのだ。その武蔵のところに中堂延暦寺衆の衆判を携えた法師たちが来て、山からの退去を命じる。何故に、と問う武蔵に法師たちは、〝外道、羅刹〟と嘲罵を浴びせ、武蔵が源次郎少年を無残に殺し、吉岡家を断絶同様にした非道を詰る。吉岡一門との決戦を切り抜けたことが、武蔵に大きな自信以上の自省を与える〝風の巻〟の中の有名なくだりである。

そして、武蔵が訪れたのと場所も同じ無動寺の回峯修験僧が、比叡山を焼き打ちにした織田信長を呪殺しようとする——そうした構想の下に書かれたのが、本書『風の呪殺陣』である。

この作品は「問題小説」に昭和六十一年の十月から六十二年の一月まで、四回に分けて短期集中連載されたものだが、作者の隆慶一郎氏はこれを意に満たぬものとし、あと百枚を書き足

して首尾を整える予定であった。それが果たせず、この度、初出のまま単行本となったのには理由がある。ひとつには、隆氏が昨年十一月四日に、肝不全のために永眠されたせいだが、今、ひとつは、赤山禅院の御前様が隆氏に下された一喝のせいである。隆氏は、本書の連載がはじまる前と終了後の二度、取材のため赤山禅院を訪れているが、その二度目の時に御前様、すなわち叡南覚照大阿闍梨から「仏教が人を殺すかあ！」という凄まじい一喝を受けてしまう。

作者が私に語ったところによると、そのために作品の構想が「すっかり軸が狂ってしまって」とはいうものの、かえってその一喝を受けたことによって何かが見えて来たというような、実に愉し気な様子であったことを思い出す。事実、このくだりを話される前に「かれこれ百枚くらい書かないと、完結しませんなあ」という発言もあり、これは換言すれば百枚で『風の呪殺陣』にまとまりをつける自信があったということだろう。とすれば、この作品の解説を書く者としては、隆氏が本書をどのようにしめくくるつもりだったか、それを推理してみないことにはその任は果たせない。

隆慶一郎作品全体の特色としてまず挙げられることは、それらが伝奇小説のかたちを取りつつも、これまで書かれて来たような単なる時代の衣裳をまとったチャンバラ小説にとどまることなく、常に最新の歴史学・民俗学の成果を踏まえた独自の展開が示されていた点にある。特に処女長篇『吉原御免状』やその続篇『かくれさと苦界行』、或いは渾身の大作『影武者徳川家康』等は、網野善彦らの最新の中世研究の成果と踵を接して書かれたものだった。隆氏がこ

れらの研究の中からいちはやく作中に取り込んだのは、〝上ナシ〟と称して天皇以外のあらゆる権威を認めず、多種多様な職業につき全国を放浪した誇り高き自由民〝道々の輩〟〝公界の者〟の存在である。『風の呪殺陣』では、傀儡子やワタリがこれに当たる。前述の諸作は、総体として歴史の中の有名無名のヒーローたちと、こうした自由民の末裔たちが織り成す一種のユートピア小説としての体裁を成し、相互に関連を持ちはじめていた。

そして今一方の民俗学的な関心は、時として歴史の中で死者の意志を最も怖れ、かつ尊重して来た日本人の特異性を浮き彫りにしていた。『吉原御免状』の庄司甚右衛門や『かくれさと苦界行』の荒木又右衛門等、死んだはずの人間が物語の展開と抜きさしならぬ関係を持って登場するくだりには、こうした関心のあり方がはっきりと示されていた。これらに加えて『影武者徳川家康』の主人公は死んだ家康の意志を受けつぐ影武者であり、「葉隠」を伝奇化した『死ぬことと見つけたり』が作家デビュー当時から暖められて来たテーマであった。

つまり、隆慶一郎作品の魅力は、波瀾万丈の伝奇的趣向の面白さとアカデミックな知的興奮が一体となった重層的ダイナミズムにあったといえよう。そして、本書『風の呪殺陣』の根底にあるものは、谷川健一民俗学の原点ともいうべき『魔の系譜』である。この著作の中で谷川健一は、日本の主権を支えて来た影の部分を、日本人の情念の歴史であるとし、死者の魔が生きている者を支配するという、奇怪な構造が歴史の裏面に存在することを明らかにしている。そして、この場合、死者は歴史の中の敗者であり、生者は勝者である。その敗者が勝者に一矢

報いるための手段として存在するのが〝呪詛〟なのである。

問題は、この〝呪殺〟というテーマと叡南覚照大阿闍梨の一喝を、隆氏がどうアウフヘーベンするつもりであったのかということだ。作品の主要登場人物は三人いる。比叡山東塔無動寺の若き回峯修業僧・昇運、同じく無動寺の小僧で鈍くさいと評判の好運、そして山門公人衆の若者・谷ノ坊知一郎の三人である。彼らの運命を一夜にして狂わせてしまったのが、元亀二年九月十二日、織田信長によって行われた皆殺し、叡山焼き打ちである。

ちょうど行をはじめて百日目、新行満行の日にこの焼き打ちを受けた昇運は、阿闍梨となる道を永遠に閉ざされ、仏敵信長を呪殺すべく、越中立山の地獄谷で山人から授けられた呪法の修業に入る。また、いっこうに悟りが開けないかと思われていた好運は、京の町を托鉢するうちに清純無垢なキリシタンの少女・美鈴と出会い、この美鈴が織田軍によって無残な最期を遂げるに及んでにわかに発心。信長によって頬に十字を刻まれながらも大阿闍梨になるべく決意する。一方、知一郎は、傀儡子の女お蘭を知り、長島一揆の中に身を投じることになる。

作者の意図はこの三者三様の転変の様を通して、様々な立場から、人間の歴史のある限り語り継がれるべき、権力者信長に対する自由な民衆の熱い戦いの実相を描くことにあったと思われる。そこには当然、前述の網野善彦や、一向一揆研究に生涯を捧げた井上鋭夫らの研究が踏まえられており、信長の皆殺しの動機づけを、一揆に加わっていた自由民たちへの怖れに求めている点などは正にその現われといえよう。その一方で、作者は、同じ信長を敵とする同志であっても、この世を穢土として至福の浄土は死の向うにあるとする一向宗徒に、〝今〟を生きる傀儡子を対置させて立場の違いを記したり、キリシタンやさらには折伏の呪法など、当時の様々な宗教観や死生観のあり方を抜かりなく点描し、戦国の時代相をも活写している。

そして再び物語の展開を追えば、いかに仏敵信長を倒すためといっても呪殺という非常手段を取った昇運に明るい未来があろうはずはなく、彼は亡者たちをあやつり、その力で明智光秀に信長を討たせ力尽きて死んでゆく。また、好運には千日回峯修験再開後の第一回目の阿闍梨となる未来があり、知一郎は、お蘭の亡骸を抱いて傀儡子一族と共に忽然と姿を消し、行方が分からないままになって終わっている。

さて、次に隆氏がこの作品をどのように改稿するつもりだったのかを考えてみるとまず、隆氏が百枚もあればいいといっていたことからしてもストーリーに大幅な変更のあろうはずもなく、基本的な構成はこのままであると見ていいだろう。隆氏は「すっかり軸が狂ってしまって」といっていたが、私の考えでは、その狂った軸は作中における明智光秀の扱いを変更することによって修正されるのではないだろうか。

光秀謀叛の理由に関しては、これまでにも様々な諸説があるが、隆氏は本書において、その背後に昇運の呪法ありという新機軸を打ち出すことに成功している。しかし、それ以上に、より隆慶一郎氏らしい光秀の扱い方があったはずなのである。それは、光秀が〝道々の輩〟〝公界の者〟との連携によって信長を倒すという設定である。隆氏には「七道往来人・明智光秀」

というエッセイがあり、その中で、自分は光秀が若狭小浜の刀鍛冶の次男坊であるという説が一番好きだといい、彼が天下を放浪している間に出会ったのは、底なしの自由への憧れを持つ漂泊民〝道々の輩〟や〝公界の者〟たちだったのではないかといっている。

彼らの自由を求める心は天下を己れの権力下に置こうとする武将たちの野望と真っ向うから対立するはずのものであり、隆氏は更に「彼ら自由の徒と深くなじみ、しかも武将たることを望んだ十兵衛光秀の精神の風景はどんなものだったろうか」と述べ、この二つの思想のはざまに生きた光秀にとって、教養とは「断じて下手くそな和歌や宮中の儀式ではなかったはずである」と結論している。正に光秀謀叛に対する新解釈である。

しかし『風の呪殺陣』ではこうした設定は、一切、用いられてはいない。あくまでも、信長が昇運の呪法によって殺されたということにするため、この魅力的な筋立ては捨てられてしまい、光秀は単に昇運のあやつり人形になってしまっているのだ。しかし、呪殺という方法は、叡南覚照大阿闍梨の「仏教が人を殺すかあ！」という一喝によって封じられてしまっている。とすれば、光秀謀叛は、このような、隆氏の作品のモチーフをもっとも活かしたかたちで書かれるべきなのではないだろうか。その方が、むしろ自然だといえる。

私が注目したいのは、この作品が『風の呪殺陣』という題名であることからして、その主役が昇運でなくてはならないはずなのに、後半、鈍くさいと云われていた好運が、美鈴の死をきっかけに生まれ変わってから、どうも二人の立場が逆転したような気がしてならない点である。

地獄谷で亡者に取り囲まれた昇運が、彼らから〝地獄は正しく今の浮世と同じだよ。だからこそ美しくなくてはならないのさ。その美しさを誇りに思う。地獄にこそ誇りが必要なんだ。誇りがなければ、生きてゆけない世界なのだよ〟と語りかけられる。この言葉には、呪殺によって信長を殺そうとする昇運の決意を浄化させる一次元高いレベルでの諭しが含まれてはいないだろうか。とすれば、この時、昇運は呪殺の虚しさに気がついてもいいはずである。

しかし、彼は、幽鬼のように痩せさらばえても呪法を止めようとはしない。この時点で、千日回峯行に挑みはじめた好運が彼の上を行っていることは歴然としている。死者たちの怨念を一身に引き受けた昇運が凄惨な最期を迎えるのはやむを得ないとしても、信長を呪殺する一歩手前で力尽きて倒れ、そこに来合わせた好運が、昇運の無念を千日回峯行を成し遂げ、阿闍梨となることによって受け継ぐという場面を明確に設定してみてはどうだろうか。信長を倒すのは、むろん、昇運の呪法ではなく、〝道々の輩〟や〝公界の者〟たちと連携した光秀である。このようにすれば作品の基本的な構成は動かさずにすむ。

今となっては隆氏の考え方がどのようなものであったか知る由もなく、これは、私が隆氏の作品の中に残されたヒントをもとにして作り上げた、私なりの、いわば妄想であるといっていい。

隆氏は「時代小説の愉しみ」というエッセイの中で、自分は古本屋、それも歴史書の多くある古本屋を覗くのが何より好きだといい、それらの本を見ている内に、ぱちぱちと電気がはじ

けるようなショックを受け、頭の中でたちまち様々なイメージと観念が交錯しはじめると記している。それは〝眩暈(めまい)〟にも似た感覚だそうで、この一瞬の眩暈＝妄想の中にこそ隆慶一郎作品の創作の秘密が隠されているのではないだろうか。

隆氏は『風の呪殺陣』に先立って書かれたエッセイ「叡山焼亡」の中で信長の比叡山焼き打ちの場面を小説風に描いており、隆氏の言によれば、そのくだりは景山春樹の著した『比叡山寺』を読んで描いた氏自身の勝手な妄想であり、白昼夢であるという。これらのことを思い合わせると、私がこの作品について記してきた身勝手な妄想についても、隆氏は、案外、笑って許してくれるのではないか。

『風の呪殺陣』は、未完成ながらも、その隆慶一郎氏が残した壮大な戦国伝奇ロマンである。一人でも多くの読者に愛読されることを熱望して止まない。

（初刊単行本に収録された解説を改稿しました。
なお、この作品は1990年2月徳間書店から刊行されました）

徳間文庫

風の呪殺陣(かぜじゅさつじん)

© Jun Ikeda 1992

り-3-1

1992年1月15日 初刷
1992年3月20日 2刷

著者 隆慶一郎(りゅうけいいちろう)
発行者 荒井修(あらいおさむ)
発行所 株式会社徳間書店
東京都港区新橋四―一〇 〒一〇五
電話(〇三)三四三三・六二三一(大代)
振替 東京四―四四三九二番
印刷 凸版印刷株式会社
製本

〈編集担当 吉川和利〉

ISBN4-19-599452-7（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

〈歴史時代小説〉

風の呪殺陣　隆慶一郎
極道　青山光二
仁義　青山光二
蝶の骨　赤江瀑
春喪祭　赤江瀑
海贄考　赤江瀑
荊冠の耀き　赤江瀑
天皇賞への走路　阿部牧郎
海の放浪者　阿部牧郎
商社崩壊　阿部牧郎
情事の追跡者　阿部牧郎
情事の目撃者　阿部牧郎
情事の脅迫者　阿部牧郎
夜の息づかい　阿部牧郎
金曜日の寝室　阿部牧郎
ニッポン野球株式会社　阿部牧郎
ビル街の官能　阿部牧郎

〈エンターテインメント〉

狼たちが笑う日　阿部牧郎
蜜月新報　阿部牧郎
白い肌の神々　阿部牧郎
抱擁カレンダー　阿部牧郎
夜の肌ざわり　阿部牧郎
天使の寝室　阿部牧郎
20時の誘惑者《上下》　阿部牧郎
娼婦の町の蜜月　阿部牧郎
ドン・キホーテ軍団　阿部牧郎
裸体家族　阿部牧郎
キャリアガールズ《上下》　阿部牧郎
熱い夜の旋律　阿部牧郎
白夜の妖精たち　阿部牧郎
½の誘惑者　阿部牧郎
オフィスガールの更衣室　阿部牧郎
ある朝の戦雲　阿部牧郎
週末の交際《上下》　阿部牧郎
快楽の製作者　阿部牧郎
昼休みの情事　阿部牧郎
虹の野望　阿部牧郎
機密漏洩　阿部牧郎
夜の調査員　阿部牧郎
自由家族《上下》　阿部牧郎
大いなる情事　阿部牧郎
シャワールームの女　荒木一郎
走れホース紳士　石川喬司
競馬聖書　石川喬司
馬家物語　石川喬司
本命　石川喬司編
紳士は競馬がお好き　石川喬司
ホース紳士奮戦す　石川喬司
空海　稲垣真美
徳川女系図《全二巻》　岩崎栄
秘本西遊記　宇能鴻一郎
金髪　宇能鴻一郎
すわっぷ団地　宇能鴻一郎
むちむちぷりん　宇能鴻一郎
むれむれ夫人　宇能鴻一郎